

682

682-34

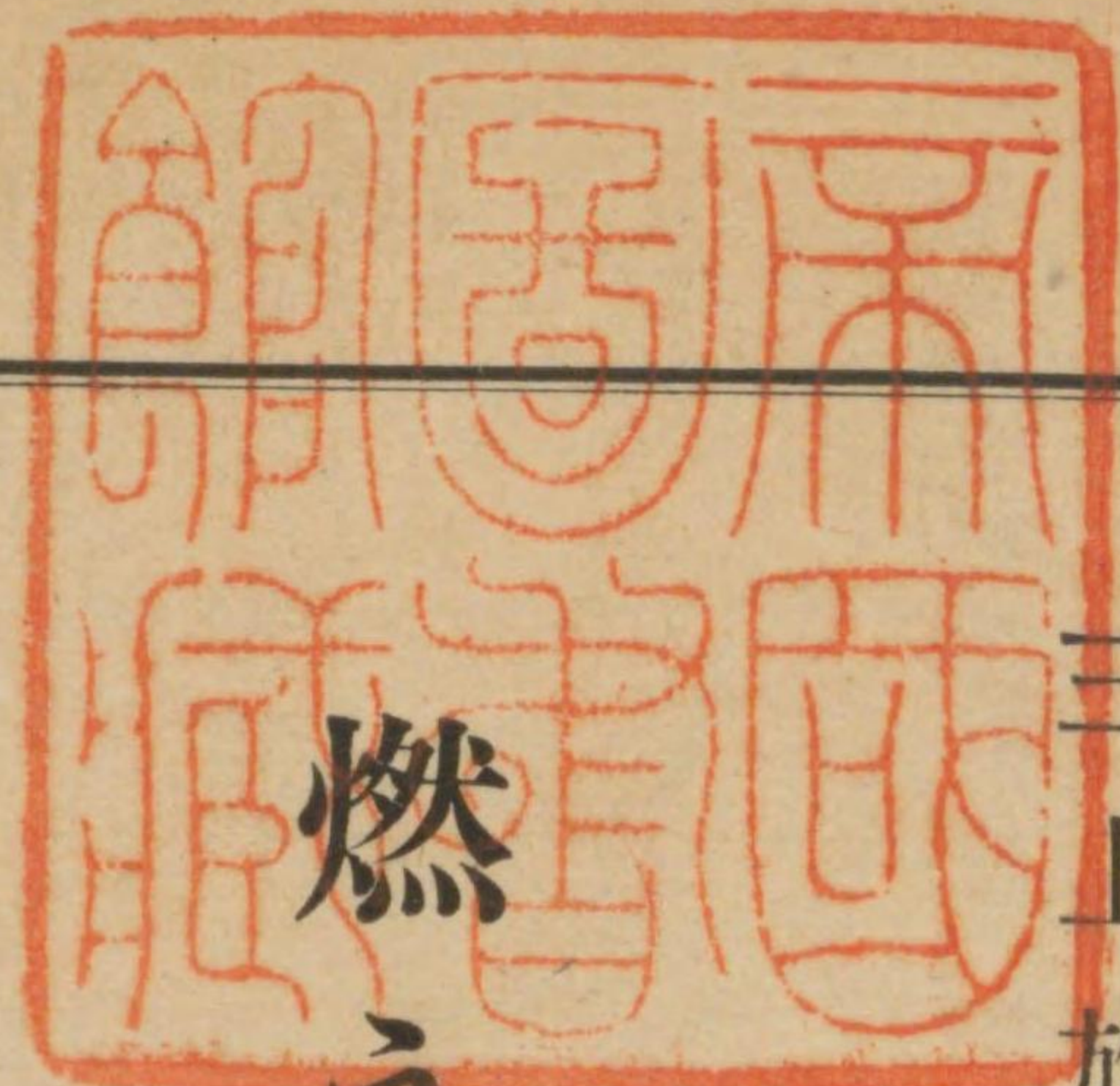


1200501577558



28. 8. 15





三上於菟吉著

燃える處女林

サイレン社版





682-34

目次

夏の遠乗	救護者	ある追憶	第一歩	月の砂濱	蠱の輪	憎悪の目	月の露臺	美しい闖入者	處女の闇	昔の譬諺	湖畔の夜
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三	二二	一八	三〇	三九	四九	六一	七一	七五	八五	九三	九九



震へる耳朶	二二
雌豹たち	二六
美しくしき反噬 <small>はんぜい</small>	二九
防禦線	三三
決意	四六
病室の波瀾	五三
純情と媚笑	六七
奇怪な脅迫	八一
柔しく、白い花	九六
不思議な樂園	一〇
有閑有罪	二六
處女等は夢みる	三七
不幸な兄妹	四四
悪夢は續く	五二
美しくしき訪客	六六

翌朝	七八
凜太郎の奇略	九五
激突	一〇三
失戀者の行方	一三三
盲ひの美女	一三一
奇怪な人々	一四八
月の窓	一五七
呪はれたもの	一七二
忠告	一七九
ホテルの夜	一九二
死よりも強し	二〇四
脅かさるるもの	二一四
逆襲	二二四
悪魔の如く笑ふ	二四六
毒も薬	二五九

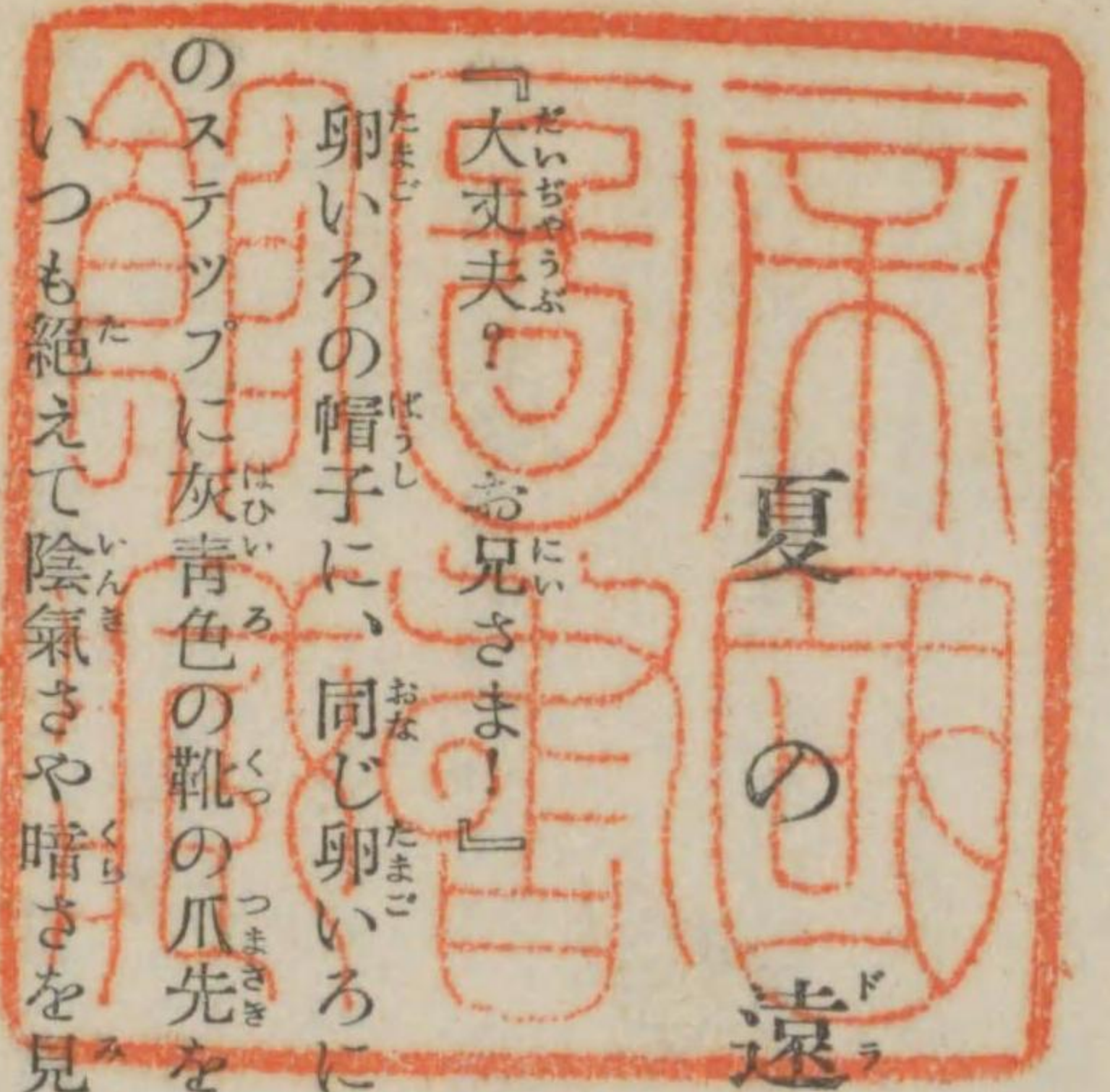






静吉の若妻の節子

夏の遠乗



「大丈夫！ お兄さま！」  
卵いろの帽子に、同じ卵いろに明るい蝦茶の縁を取った、軽快な旅行服を著た夏子が、自動車のステップに灰青色の靴の爪先をかけたながら、念を押すやうに言った。  
いつも絶えて陰気さや暗さを見せたことのない、まつ毛の長い、黒目がちな目やふつくらした

頬に、今日に限って偽りならぬ不安が漲つてゐた。

兄の清水静吉は、もう小型クライスラーの運転席に坐つて、荒毛織の鳥打を阿彌陀に、香りの高い紙巻をくはへてゐるが、振りかへりもせずハンドルを握つたままで答へた。

「僕の技倆に今更疑念を持つなら、君はあとから別の自動車で来るといいよ。嫂さんだつて、涼子さんだつて、ちやあんと僕を信じてゐるぢやあないか！」

事實、静吉の若妻の節子も、夏子には従妹に當る涼子といふ娘も、もうつつましく座褥に坐つ



て、夏子を眺めて微笑してゐるのだつた。

『あたしだつて、あなたの技倆をうたがひはしないわ——でも、先達、あんな事があつたばかりなんですよ——』

この一行は、今日熱海の宿を立つて、例の崖つづきのドライブ路を、修善寺へ、そこで一泊して三島へ廻らうといふ豫定であつた。

が、今、ホテルをいよいよ出掛けるといふ際になつて、恒々、元氣な夏子が危懼を抱きはじめてた——それも無理がないと言へば言へる——この幅の狭い、迂餘曲折した崖道を遠乗して、深い谿間に墜落し、あたら青春のいのちを溝壑に捨てた學生の群れがあつたことを、つい幾月か前の新聞が大きく書いてゐたのである。夏子はその事實を思ひ出して、二の足を踏むやうな氣持になつたのに相違なかつた。

『フム。』

と、兄の靜吉は、紙巻の煙りを紫いろに吹き散らして、

『僕はもう四年もハンドルを握つてゐるのだよ。日本中の、自動車の通れる道は走らないところが無いと言つてもいいのだ。熱海修善寺間をはじめだが、まさか丸太橋より幅があるだろう。さあ、乗るなら乗り給へ、厭なら厭で、あとから富士屋タクシイでも追ツかけるがいいぜ。僕は無理にすすめはせん。』

靜吉は、明らかに自尊心を傷けられたらしかつたが、さすがにそれを顔へは出さなかつた。一たい、有産階級に生れた青年たちは、非職業的な勞働に對して、多少の技倆があることを得々と誇示するのが恒だ。彼等はそれを、スポオツといふ言葉で現はして、さも紳士のたしなみでもあるかのやうに信じ込んでゐる。マラソン、水泳、ゴルフ、テニス——これ等の遊戯は、總じて勞働行爲の模倣にすぎないのだが、彼等は寧ろ、自分にひどくふさはしくない仕事に、いのち賭けの冒險をさへ敢てして、どのやうな苦痛や疲勞をも念としない。靜吉の自動車道樂も、その一つだ。だから、彼は修善寺道が、危険だと聽いて、そこを疾走することに——その快感を味はうとするのだつた。

夏子は車内にはひつて、緑いろの座褥に腰を下した。

『いいえ、あたし、あなたを信じて上げるわ。』

靜吉は右手を上げて、見送りに出てゐたホテルの支配人やボーイ達に挨拶した。

『お氣をつけなすつて——』

『またどうぞ——』

夏背廣の支配人、白い制服のボーイたちは笑ましげに腰を屈めた。自動車は動き出した。

七月なかばの、白い、眩い光りはさんさんと降り注いでゐたが、しかし、空氣は爽やかに乾い



て、自動車のの上では限りなく涼しかった。車は石くれの多い熱海の町すぢを出はづれて、阪を上り、やがて左へ切れ込んだ。

この自動車路は、名勝案内が、天下無比の絶景を誇つてゐるだけに、まづ關東では有數な眺めを持つてゐると言つてもよかつた。右手に近く聳え立つのが、十國峠、それを越えて、壯大優雅な紫いろの姿を見せるのは、言ふまでもなく富士山だ。その前後を、大浪のやうに繞る箱根活火山脈——そして、左手には、伊豆の海の沖の小島、さては海岸線を洗ふ白い女波男波をまでも眺めることが出来て、どんな鬱屈した気分の人間も、一度この道を軽快な無蓋車で走しつたなら、日ごろの憂さの一切を忘却しつくすに相違ないのだつた。

『どうだ、夏子。』

と、静吉は叫んだ。

『坦々砥の如き道ではないか！ こんな道をあぶながつてゐたら、東京の、あの混雑の中を走し

ることはとても出来やしないよ。』  
——さうだ！ いかにも、最初のうちは静吉が樂觀してゐた通りだつた。勾配も比較的おだやかで、曲り角も大まかだつた。しかし、さう言つてゐるうちに、十國峠の雄姿をうしろにした頃から、風景の美がいよいよ人目を眩せしめるに従つて、道路の困難は増大して來た。傾斜は急になり、曲折は鋭どさを加へ、殆んどつづら折りをさへなして來たばかりか、狭い、辛うじて車を擦れ違へることが出来るか出来ぬかの道の兩側は、何百尺の大溪谷なのであつた。

『まあ、美しい景色だわねえ！』

『ほんたうに、生れてはじめてこんな遠乗をしますわ！』

なぞと、はしやぎ合つてゐた静吉の若妻の節子も、従妹の涼子も、今は明らかに不安な氣持に胸を壓しつけられるのを、どうすることも出来ないらしかつた。彼女等は、沈黙した。

静吉も、もうしやべらなかつた。彼はとうに紙巻を吸ふのを止めた。ハンドルにしがみつき、制動と調整とに懸命であるやうに見えた。實際、不案内な、危険な道を運轉してゆく身は、一分の緩みを自分の心に與へるひまもなかつた。急角度の曲り目は、あとから後から直ぐに來たし、下りつくしたと思ふと、ぢきに上り坂になつてゐた。そして、ちよいと舵をあやまるか、制動を怠つたなら、自動車は、千仞の谿間に墜落して、自分自身ばかりか、美しく愛すべき同乗者のすべてを殺してしまふ外にないであらう。

彼の苦しきは、背中が語つてゐた——この涼しい自動車の上で、上衣を脱ぎ捨てたあとの、ワイシャツの背中は、油汗が見る見る大きく沁み出して來たのだつた。

この崖路の運轉が、土地になじまぬ素人の腕では、ちと無理であつたのを、彼自身も幾分自覺しはじめてゐたに相違ない。

『あなた、あんまり景色がいいから、少し休んで行きませうか？』



不安な氣持を知らせまいとするやうに、しかし、心の中では、良人に勞れを休める機會を與へようとして、節子が、うしろから言ひかけた。

『ウム——向うの臺まで行つたら——』

事實、この狭苦しい、そして兩側が相變らず深い谷に臨んでゐるあたりでは、車を止めるわけには行かなかつた。少し大型の車が來かかつたなら、通りすぎるすべもないであらう——

『お兄さま、もう半分位來て？』

と、夏子はたづねた。

『いやいや、まだ、中々だ。』

しかし、危険な崖路を、もう少し行きつくせば、稍々平潤な臺地になるのは、ここからも眺められるのだつた。そこまで進行してゆく外はない。

『涼子さん、何かうたはないこと——ね！』

夏子が、氣分を一轉せしめようとして、年下の從妹に言ひかけた。

『ええ。』

ほつそりした、切れの長い目の、口元の紅く柔しい娘は答へた。

『何を？』

『「爽けき風」を——ね、お嫂さまも——』

で、三人の、うら若い女性は、細い、高い聲で、わざと楽しげにうたつた。

爽けき風、

熱き頬を吹けば、

黒髪は波と流れ、

おお、悩みは消えて

わがこころ、

湖を航く舟のごと、

安けく樂し！

來ませ君

綠濃き木かげに

そよ風は枝を揺り

おお、胸は和ごみて——



だが、そこまで、三人がうたつたときだつた。  
突然、自動車は急な曲り角を一曲りすると、思ひがけなく、つい鼻の先きに、向うから一臺の青いろの車が來かかつたのを見出したのだつた。

先方も狼狽たらしかつたが、靜吉もうろたへて、ぐつと左に避けようとする——二臺の車が、辛うじて、擦れ違つたと見えたその刹那、こちらのクライスタアは、ぐ、ぐと二三度上下に震動したと思ふと、鼻つらをすでに崖下にのぞかせて、今にも深い溪谷にのめり込みさうになつてしまつたのだ。

『あれえッ！』

と、抑へることの出來ぬ恐怖に、お互にしがみつき合ふ、三人の女性！ 咄嗟に美しい顔が怖れにゆがんで、頬は一やうに土氣いろにかはつた。

靜吉は、ゲンと踏んばつて、ブレーキを全力的に引きしめ、どうにかして車を後退せしめようとしながら叫んだ。

『車は木に突つかかつてゐる——大丈夫だ。狼狽せずに下りろ！ 早く下りろ！』

夏子をやつとドアを開いて、三人が飛び下りる。

『お兄さま！ あなたも早く！』

『あなた——早くお下りあそばせ！』

靜吉は、しかし、あきらめ兼ねて、一生懸命 どうにかして愛用の車を破壊から助けようとするかの如くもがいてゐた。が、その中にも、自動車はズルズル、ズルズルと崖際を迂り落ちはじめたので、思ひ切つたやうにハンドルから手を放して、車外へ飛び下りようとしたのであつたが、ああ、それは遅すぎた！ 今や激しい勢で前のめりに崖下へ轉げ落ちはじめた車體ともつれ合つて、彼自身もまた、鞆のやうにゴロゴロ墜落してゆくのであつた。

崖上では、狂氣のやうに泣き叫ぶ三人の女性——

『あなたア！』

『お兄さま！』

『お従兄さま！』

自動車は、土煙を揚げ、石くれをはじきながら、ガラガラとすさまじい音を立てて、今や、小さい岩のやうな形を見せて轉落しつづける——そして、靜吉はどうしてしまつたのであらう——あの車の下敷になつて、五體微塵に粉碎されてしまつたのであらうか！

三人の美女は、この思ひがけない突發事に當面して、ただ、しがみつき合ひ、叫び合ひつづける外はないのであつた。



救護者

燃え處る女林

——すると、突然、思ひがけない人聲がうしろで起つた。

『大丈夫だ！いのちにかかはりは無い。あの灌木の蔭で、うつぶせになつたまま起き上らうともがいてゐる——オイ、君も早く来い！』

『畏りました。』

——さう叫びかはしたのは、たつた今通りすがつた自動車の乗客と運轉手とに相違なかつた。

二人の青年は、まるで猿のやうに、急な崖を駆け下りはじめた。

崖上の三美女は、幾分かホツとして、顔を見合せた。

『お兄さまは大丈夫ですつて！一たい、どこにいらつしやるのでせう？』

と、夏子が見下した。

節子は青ざめて、ガクガクとわななき乍ら、

『あたしには、見る力がないわ。涼子さんよく見て頂戴。』

——が、その時には、二人の青年は、五六十間下の、灌木の茂みのあたりにもう駆け降りてゐた。そして、その茂みの影から、ぐつたりした静吉のからだを引き出して、左右から腕をつかんで崖上の方へ引き上げようとしてゐた。

『あ、いらしつた！』

節子は不安にわなないて呟やいた。

夏子と涼子とは抱きつき合ふやうにして見下してゐた。

無帽で、襟の開いたワイシャツだけの青年紳士は、青白い、髪の毛を長目にした、痩せ型の男だつたが、ぐつたりしてゐる静吉を片手で引ッ抱へて、ともすれば息が迫りさうになる運轉手をはげまはげまし、ぐんぐんと、急な傾斜を上つて來た。土は足の下で崩れ、攪む木の根は碎け切れたが、彼は少しも屈せずに叫んでゐた。

『君、しつかりしたまへ！頭も内臓も撲つてやしないよ！手足なんぞ、へし折れたつて何

だ！しつかりしたまへ！早く上へあがつて、僕の上等のウイスキーを呑めばさつぱりする。

おい、運轉手君、この人の腰をぐいぐい押し上げてくれ。さあ、もう一息だ！』

青葉のやうに青ざめた三人の美女は、間もなく、髪も顔も泥まみれになつて、全身が虚脱してしまつたやうな静吉の軀が、崖上の路上に横たへられるのを見た。

『有難うございます——何とお禮を申し上げたらよいか——』

出来るだけ取りみだすまいとして、節子がさう言ひかけたとき、青年は頭を揮つて、



『そんなことよりも、早く顔に水をかけて拭いて上げなさい。』

彼は運轉手が、青い自動車の中から持つて来た大きな水筒を節子に渡した。そして、自分はボケツト・ウイスキーの栓を開けて、罐口を静吉の唇に押しつけた。

『ウイスキーだ。出来るだけ澤山飲みたまへ。』

言葉は、明らかに静吉の耳に通じたいらしい——彼はかすかに唇をうごかして、強い酒を一口飲んで、咽せんだ。

『咽せてもいい——もう一口』

と、テキバキと、見知らぬ救護者が命令するやうに言った。

節子はハンケチを水筒の水で濡らして、突然不幸な危難に遭遇した良人の額や、顔を拭いた。

『お苦しい？ どこかお痛みになりますか？』

『いいや——』

と、微かに呟やいて、静吉が身を起さうとしたが、それが出来なかつた。彼の顔面はしかんだ。

『——痛い！ 脚が——腕が——』

すると、その時、ヂツと被害者の顔を注目してゐた救助者が、だしぬけに叫んだ。

『おお！ 君は、清水君ぢやあないか！』

三人の美女に抱き起されたまま、苦痛に顔を歪めてゐた静吉は、その叫びで、ギョロリ目を開けた。

『お！ 君は？ おお、如月君！』

呟やくやうに、元氣なく答へたが、その中にも、奇遇に驚くやうな響きがあつた。

『やつぱり清水君だつたなあ——』

と、青白い青年は少々微笑をうかべて言つて、

『これは全く盡きせぬ縁だよ！』

——盡きせぬ縁！

この言葉が言はれたときに、ある微かな忌はしげな表情が、静吉の眉根にうかんだのを、若し気がついたものがあるとすれば、それはこの如月といふ青年のみであつたらう。

三人の美女は、救はれた者、救つた者が、かなり親しい仲であるらしいのを見て、只、驚きと喜びとを感じるのみであつた。かやうな大難に臨んだ場合、赤の他人に出會つてもうれしいのに、その救ひ主が、静吉の舊友であるとするれば、心強さは百倍なわけだ。

静吉はしかし、目を閉ぢてしまつた。

如月と呼ばれる青年は言つた。

『とにかく、ここにいつまでもかうしてはゐられない。君の自動車は、もうはるか崖の下で——』



五百尺も下の方で粉微塵となつてしまつた。みんなで、僕の車に乗つて熱海まで行かう——なあ、清水君、その外に方法はない。』

そして、女たちの方を眺め、

『御挨拶はあとでいたします。何より急務は、清水君を、醫者に診せることだと思ひますが——いいえ、大したことはないでせう——頭も、胸も、背中も大丈夫ですから——只、右腕と、左の脚がいくらか傷んでゐるやうです——では、一時も早く町へ往きませう——おい、運轉手君、この方を、自動車へお乗せしよう。』

静吉は、如月の介抱を受けながら、この場に及んで、何かしらその好意を拒まうとするやうな舉動を示した。

『いや——それより、君が熱海へ行つたら、迎への自動車をよこしてさへくれれば——もう大丈夫だから——』

と、痛みを憶へて、齒を噛みしめるやうにしながら彼は言つた。

『馬鹿なことを言ひ給ふな。外科的な負傷が、どれほど醫療に急を要するか、今更言ふまでもないことぢやあないか——さあ、抱き上げるよ——少しは痛くとも辛抱したまへね。』

如月は運轉手ともども、静吉を抱いて、青い自動車の中に運び入れた。そして、節子に、

『あなたが、ソツと抱へるやうにして上げて下さい。』

と、言つたので見ると、まだ紹介が濟まないうちに、彼女が静吉の夫人であるのを早くも洞察してしまつたのであらう。

そして、夏子と涼子とを、補助席へのせると、自分は助手臺に腰を下して、

『さあ、少しいそいでくれ給へ。』

と、命じた。

夏の子はまだ高かつたが、富士はいくらか夕べの輝やきを反射しはじめた。低い山々は、緑の靄の中にしづかにまどろんでゐた。

『景色はいいが、あぶない道だ。』

と、如月はつぶやいた。

『清水君は、巴里にゐるころから自動車の運轉は得意だつたが、馴れぬ道はやつぱしあぶないよ。』

如月の、この言葉に依ると、この青年は、曾つて清水がソルボンヌで法科を修めてゐたころ、この人も巴里にゐたものには相違なかつた。

静吉は、しかし、それには答へなかつた。彼は内部の苦痛を外にあらはすまいと努めるかのやうに身を硬くして座褥に凭れたまま、ひと言も言はなかつた。

夏子も、出發間際の豫感が的申したために、この出來事が自分の所爲でもあるかのやうな自責



を感じて黙り込んでゐた。

節子も、涼子も、まだ恐怖と不安とからよみがへることは出来ない——

——負傷の程度は、どれ位だらう？　すぐ恢復してくれるであらうか？　それにしても、いい案配に、偶然舊友にめぐり合つたといふことは、何といふ僥倖であつたらう——

しかし、静吉にすれば、かかる場合、舊友の救助を得たことに關して、もつと明らかに歡喜感謝の情を現はしてもよさうなものではないか——彼の態度は、むしろ、如月に救はれたことを悦ばないやうにさへ見える——

だが、女性たちは、静吉の表情や思念を深く讀み取ることは出来なかつた。彼女等は、ただ、一刻も早く病院へ着くの念じてゐるのだつた。

## ある追憶

助手臺に坐つてゐる、救助者如月は——詳しく言へば、舊い資産家に生れて、年少期をいはゆる學校巡りに費やし、學士號ひとつ得るでもなかつたが、どんな問題にも相當の知識を持つてゐる上、巴里で青春期をすごして、財産こそ剩さなかつたものの、人生の経験だけは、自分でもかなり豊富だと信じ込んでゐる如月稔太郎は、人知れぬ苦笑のやうなものを、剛巧げな唇にうかべて、心の中で呟やいてゐるのだつた——

——全く盡きせぬ縁だ！　人間は、どこで、どんな調子で、どんなゆき合ひ方をするものかわからんなあ。清水と、まさかこんな土地でめぐり合つて、しかも、僕の手で、あの男の難儀を救はうなどとは思つてもゐなかつた——あの男は、救ひ主が僕だと知つたとき、なぜ救はれたか——僕になぜ恩になつたかと呪つたに相違ない。

さう、獨言ちたところを見ると、二人の昔は、決して、若々しく生々しい、楽しい思ひ出にのみ充たされてゐたのではなかつたであらう——

如月の心の言葉は、なほも悪どくつづくのだつた——

だが——、何度繰り返しても、縁は異なるものさ。そして、いつの場合も、幸福さうな清水の奴が、ある危険に瀕してゐる時に、僕が叫び出すのだ。巴里でだつて、この男と僕との間に腐れ縁が結ばれたのは、この男が詐欺賭博にひツかかつて、ひどい目に逢つてゐるその場所であつた——それにしても、清水といふ奴、女運にはいつも恵まれてゐるなあ。あの時も、ああいふ女がついてゐるが、今日の同乗者たちも、すばらしい美人達だなあ——細君に、妹に、それからもう一人は？　妹の友達か、それとも、親類の娘だらう？　これで、僕の退屈な夏も、いくらかにぎやかなことになるかも知れん——フ、フ、フ、フ。  
明らかに、彼は微笑して、そして、うしろを振り返つた。



『どうだね？ 清水君。ひどく痛むかね？』

清水静吉は、かすかに顔をふつたやうであつた。

『それはいい工合だ。なアに。大した事はないに相違ないよ——それにしても、あの自動車は黒く光つてゐるが——多分クライスラーかね——しかし、クライスラーの一ツや二ツ粉微塵にしたつて、いのち拾ひをしたのだから何でもないさ。君自身が無事でさへあれば、どんなものを犠牲にしたつて——』

この最後の一句の、深刻な意味は、静吉と如月凛太郎以外には理解出来ぬものであるに相違ない——これと同じ言葉を、巴里の、學生街の裏町のアパートで、もつと毒々しいかたちで、凛太郎は、静吉に對して浴びせかけたことはなかつたらうか？

傷いた静吉の胸の中は、この場合、ハツキリ過去の情景を思ひ描くことが出来たか出来ぬか知らぬ。しかし、凛太郎は思ひ出してゐた——そして、苦い黒い微笑で、口邊を歪めてゐた——

それは、今から三年前の、ある暮春の夜更けだつた。

如月凛太郎は、その頃すつかり巴里にも自分にも倦怠しつくしてゐた——贅澤な生活を長らくつづけたあとで、弟が後を取つてゐる故郷からの送金も思はしくなかつたし、金の費る妖婦型の女は、(あたしは、あなたに飽きたんぢやないのよ。でもあたしが付いてゐては、とてもあなたはお故國へ歸らうともしなさい)柄にもなく、そんな涙っぽい置手紙をして、事實、遠い西班牙へ行つてしまつた。彼には、追ひかけてゆくほどの根氣はなかつたが、しかし、その後の一日一日は、味もそツ氣もないものになつてしまつて、仕方なしに、日本人たちが近よらぬやうな、不評判なカフェやレストオランや、キャバレエを巡つて、荒蕩たる酒色に沈溺してゐたのだつた。

その晩も、二三軒、不仕だらな飲酒に耽つたあとで、凛太郎は、モンマルトルの、無頼漢藝術家が集まつて、賭け事に「痛」を待つ「痛」と呼ぶ薄暗い、カフェのドアを押した。

この「痛」に集まる連中は、言はば巴里の地廻りのヨタモンだつたから、日本人では、どんなに落魄しても、この家の奥の小部屋をのぞく度胸のあるものは少かつた。

ところが、凛太郎が、酒場の、脚の高い椅子に坐ると、アブサンを注いでくれた主人が、眇をウインクしながら囁やいた。

『今夜、珍らしい客が來てゐますよ。奥に？』

『珍らしい客？ オペラ役者か？ それとも一寸法師かね？』

『いいえ。あなたの國の若い紳士です。』

と、言つて、苦笑して、

『わたしの店をはじめの方で——だから、あなたの耳に入れて置かぬと、あとで叱られては困



ると思ひましてネ。」

——主人は、無頼漢仁義を守つたのだつた——どこから見ても、生粋の堅氣の青年としか見えない日本人が、賭博宿へ連れこまれてゐるのを、同じ日本人の常連に知らせて置かぬと、何か間違ひのあつたあとで、どんな尻を持ち込まれるか解らなかつた。

『フウム——どんな奴だね？』

『美しい男でさあ。育ちのよささうな、着物だつて、ロンドン物でしたぜ。』

『へえ——ぢやあ、のぞいて見るかな？』

アブサンを、大きなグラスで引ッかけると、凛太郎は奥へはひつて行つた。表と奥との間には細長い、暗い廊下があつた。そこには、用心棒がダイヤのタイ・ピンをきらめかせて立つてゐる。

『今晚は？』

と、細長い男が言つた。

『やあ、ラザール。どうだね？ 景氣は。』

『一向——お歸りにはどこかへお供したいですね。』

『約束するよ。』

凛太郎の顔は、それほど通つてゐた。

奥の、一ばん奥の小部屋にはひつて行くと、香料の香と、酒の匂ひと、裸出しな白い肌と、タ

キシイドの黒い影とが、ほの紅い灯の下でもつれ合つてゐる。凛太郎が、隅のソファに腰を下すと、白い、裸の腕が、シヤムバン・グラスを拾つて来て、凭れかかつて坐つた。

凛太郎は、女の肩を撫でてやりながら、ジロジロとあたりを眺めまはした。

——日本人といふのはどこにゐるのだ？

それは、片隅の置電氣の下にゐた。五六人の賭博師がかこんでゐるテーブルに一座して、ボオカア遊びの最中だ。

——ふむ、何としたことだ！

と、その横顔を眺めたとき、凛太郎は驚かされた。

——あれは清水ぢやないか？ あの男が、こんなところへ來てゐるなんて——

清水静吉が、ソルボンヌ大學に籍を置いて、物持の長男坊らしく暢氣にやつてゐるのは、如月凛太郎もよく知つてゐた。逢つたのは、某富豪の喜捨で出來た日本人クラブの廣間で、二三度きりだつたが、そのたびに、静吉は、いつもすばらしい美人を伴れてゐた。しかも、その美人が、怪しげな代物ではなく、ソルボンヌの羅馬法の教授のピカール氏の愛嬢であるのは、在留邦人の羨望の種であつたのだ。

静吉のやうに恵まれた境遇の青年が『窟』へ出入する？

凛太郎は苦笑して、頭を揮つた。



——あいつも、ピカール令嬢に振られやがつたかな？

そんな風に呟やいたときだつた——突然、静吉のテーブルで騒ぎが起つた。突立つたのは静吉で、カルタを投げ散らして、憤りッぽく怒鳴り立てはじめた——

『僕を盲目あつかひするな！ インチキ師め！』

『何だと！ 黄色人！』

と、前の一人が、これも突つ立つて怒鳴り返へした。

『どこの誰れがインチキした！ 負腹を立つな！ 小僧！』

この罵しりで、小部屋の中は一度に騒動の大渦巻となつた。あらゆるテーブルの人々が、札を捨て、紙幣をかきあつめて立ち上つて、喧嘩の方へ押し寄せた。

凜太郎は、ニヤリとして、両手をポケットに突ッ込んで立ち上つた。

すでに、静吉は相手に組み付かうとしてゐた。

相手は、ほんの少し身構へただけで微笑つてゐた——なぜなら、静吉のすぐうしろにゐた同類の一人が、卓上のフラスコを掴んで、今しもそれを振り下さうとしてゐたから——

——黄色人メ！ 今に見ろ、氣を失つて、ドアの外へ投げ出されるのだ！

ところが、その間一髪の刹那だつた。

振り上げて、振り下されようとしてゐた、そのフラスコが、だしぬけに消し飛んで、かなたの

壁に打ツ突かつて、ガチャーンとくだけた。そして、その同類の無頼漢をぐいとかけ寄せて、ぬつと顔を突き出したのが凜太郎だつた。

彼は静吉の肩をポンと叩いて

『清水君、大事なからだを、こんなところで傷でもつけたら、馬鹿馬鹿しいも馬鹿馬鹿しいし、それに、尻の穴の狭い巴里邦人の間では相手にされなくなつてしまふが——』

静吉は、凜太郎の突然の出現に、驚きもし、喜びもしたに相違なかつた——異國で、しかも、詐欺賭博師の巢窟に飛び込んだ自分だと氣がついて見ると、無事でここを脱出出来る自分だとは思はれなかつた。

彼は凜太郎を見て、いくらか氣まり悪げだつた。

『ついで、誘はれたものですから——』

『諦めなさいよ。ね。』

と、凜太郎は言つた。

『僕は大てい顔馴染ですが、この連中は仕方のないゴロつきですよ。まあ、今夜のところは、僕と一緒にこの場所を出てしまふのが大勝利です。任せてくれませんか？』

——一時、カツとしたものの、考へて見れば、どこまでも不利な立場の自分だと、静吉も思ひあきらめたのだらう——彼はうなづいた。



凜太郎は、いくらか捲き舌の巴里語で言った

『兄弟、これは俺の知つてゐる坊ちゃんなんだ。——何も言はずに手を退いてくれ。』  
賭博者たちは、笑つた。

『君と友達とありやあまかせるよ。その男は少し酒癖が悪いやうだぜ。』

所々に、赤い節燈が點いてゐる裏町を歩きながら、凜太郎は、たしなめるやうに言った——

『どうしてあんなところへ足を踏み込んだのです？』  
『イヤ、よくカフェで逢ふ男に誘はれたものですから——あんな奴等の集團ではないと思つたのです。』

と、静吉はイマイマしさうだつた。

『あんなところで、カルタなんぞ弄ると、この巴里ではもう社交界へ出はひりは出来なくなりま  
すよ——紳士淑女は顔をそむけてしまひます。』

その時、静吉は溜息をした。

『僕、ほんたうに馬鹿でした。君が來合せてくれなければ、今頃は——』

『長々と伸びたからだを、往來へ投げ出されてゐたでせう。』

と、凜太郎は笑つたが、嘲けるやうに、

『君のやうな氣高い戀人を持つた人のする事ぢやありません。』

『君。』

と、静吉は足を止めた。

『何です？』

『君、卑怯のやうですが、今夜の一件を、みんなに黙つてゐて頂きたいのですが——』

——ピカール嬢の耳にひびくのが何より怖いのだな？

と、凜太郎は心で笑つた。

『いいですとも——僕は成り下るばかりだが、人の祕密なんぞを口外するやうなことはしませ  
ん。』

そして、笑つて、つけ足した。

『そのかはり、君と君の愛人で、充分に御馳走してくれるでせうね？』

『ええ、勿論。どんな御馳走でもしますよ。』

その時の事を思ひ出して、凜太郎は、今、自動車の上で、冷たく含笑つた。

——あの時は、僕はどんな成心もなかつたのだ。だが、ピカールの娘と、半日ばかり話してゐ  
る中に、何となく好いたらしくなつてしまつたものだから——あの娘も、僕の話が大そう面白さ



うだつたし——まあ、みんな成りゆきといふものなんだな。

——その成りゆきといふのが、しかし、静吉に取つては、辛抱のならぬものであつた。つまりところ、マドモアゼル・ピカールの、美しく、生き生きとしたところに、異常な興味を抱いた凛太郎は、彼女が好みさうな、東洋風な冒険談や、怪奇談や、あらゆる話術の秘技をつくして、彼女の心をたらし込んでしまつたのだつた。そして、その後、どんな折にか、彼は令嬢の耳に囁やいた。

『このやうなことを申し上げていいか悪いか——とにかく、清水君も、もう少し自分を慎しんでくれなければ、あなたの御名譽にも——』

『清水が、どんな？』

と、ピカール嬢は、さすがにびつくりしたやうな顔をした。

『あなたから仰有つたら、あの悪癖も止むだらうと思ひますが——ときどき「痛」へ出入するやうです。』

この一語は、氣位の高いピカール嬢の自尊心と戀情とを、たつた一滴で殺す毒藥のやうなものであつた。

『まあ、清水が「痛」へ——』

「痛」と言へば、自分の良い巴里人に取つては、下水溜よりもつと汚らしいところに思はれる

のだつた。

『どうぞ——折があつたら、あなたから——』

いいえ、この囁やきが、却つて、ピカール嬢と静吉とを、もう二人だけで逢ふ『折』さへも失はせてしまつたのだ。そして彼女は、戀人の淺ましい裏面生活をほめかされて、まるでこれまでの自分が、一から十まで欺かれてゐたやうに信じ込んでしまつた上は、もはやどのやうな静吉の哀願もかへりみてはくれなかつた。

けれども、一度東洋人の持つ、不思議な魅惑を知つたピカール嬢が、その後静吉から凛太郎に心を移さないわけにかなかつたところに、怖ろしい悲劇の種が蒔かれた。

——静吉のか、それとも凛太郎のか、恐らく、ピカール嬢その人しか知らないであらう子供が彼女のお腹に宿ると、自分を殺してしまふ外に仕方のない彼女なのであつた。

——日本へ歸る静吉の胸は、鉛のやうに重たかつた。

が、凛太郎は、巴里に踏み止まつて、この醜聞については、まるで無關係な顔をして、更らに新らしい冒険を夢みつづけけたわけだつた。

これが、彼等の過去で、そしてその過去は、歸朝以來の轉回によつて、明るい、ほがらかな生活を生創めようとしてつある静吉に取つては、夢裡にも思ひ出したくない暗影だつたが、何事ぞ、運命の戯れは、(盡きせぬ縁)で、ふたたび、あの呪ふべき凛太郎を、彼の目の前に出現させた



ばかりか、またもや急場の危難を救はせさへもしたのである。

——ハ、ハ、ハ！

と、自動車に揺られながら、凛太郎は心で嗤った。

——清水の奴、旅の恥をすつかり塗り隠して、すばらしい幸福を、味はつてゐるらしいな。どつこい、さう問屋が下すものか！ 僕が出て来た以上は相當の覺悟をするがいいや！ これで僕も、當分生活の目的が出来たといふものだ。が、好事、魔多しだ。どしどし仕事をいそがなければいけない。

悪の使徒を以つて自ら任じるかに見える如月凛太郎、胸の中で、どのやうな計畫を組み立てたか、ニタリと微笑して、そのまま腕を拱いた。

自動車は、いつか熱海の町並にはひつてゐた。

## 第一歩

その翌夕——

節子と涼子とは、靜吉が入院した病院の方へ行つて、彼等一族が宿つてゐるホテルの翼家には、夏子が、只一人ヴェランダに坐つてゐた。

ヴェランダからは、涼しげな竹林のかなたに、白く光りながら流れてゐる溪川を眺めることが出来るのであつた。

夏子は、純白のアフタ・ヌーンを著て、手に紫表紙の書物を一冊持つてゐるが、それをひもといてはゐない。うつとりと、何か思ひ沈みながら、青々とした竹の戦ぎを見入つてゐるのだ。淡青い背廣を著た凛太郎が、恰度、その時、ホテルの裏庭を散歩してゐた。そして、偶然、ヴェランダの彼女をみとめたので、例の底深い微笑が口元を削ひまはつた。

——ふん、處女は夢んでゐる！ 何を？ あるロマンスを！ うたふやうに、彼は呟やいて、肩をそびやかした。

——花は摘まれねばならず、羊は獅子の餌食になる運命を持つてあらう——と、もろこしの聖者が言はれたかどうか僕は知らぬよ。が、あの娘は、清水の妹にしては相當以上のものだなあ。

紙巻を投げ捨てて、背廣の袖の塵をはじくやうにすると、凛太郎は、翼家への入口の方へ行つた。

コツコツと、軽く、淡黄色のドアをノックすると、高い、美しい聲が答へた。



『おはひりなさい！ お嫂さま！』

そして、次の瞬間には、中から開けられた。

ドアの外には笑まじげな凛太郎が、真直に、禮儀正しく立つてゐた。

『お邪魔ではないでせうか？』

『いいえ、いいえ。どうぞ、おはひりあそばして——』

と、夏子は、紅い唇で、早口に言った。

彼女は、生面の凛太郎を好く好かぬに拘らず、先づ、心からの感謝に溢れてゐることは當然であつた。

二人は部屋を通り越して、ヴェランダの椅子に行つた。

『ここの方が、お涼しうございますわ。』

凛太郎は進められた椅子に着く前に言った。

『さき程、病院をのぞいてまゐりましたが、お兄さまも、あの分ならまづ御安心ですな。勿論、この長い夏を、手足を硬い當木をされてお暮しになるのは困難ではありませうが——』

『ええ、でも、いのちに別状さへありませんければ——それにしても、何度もくどく申し上げるやうですけど、あの時、あなたがお通りがかりになつて下さらなければ、どんな事になつたらうと考へますと、今更ゾツといたしますのよ。』

白衣の夏子は、その白衣のために、一そう娘らしさと豊麗さを増させてゐるのを、彼女自身氣がついてゐるのであらうか？

凛太郎は、豊かな胸のあたりをチラリと眺めた。

『それに、兄があなたに巴里で御懇意願つてゐたといふのは、何といふ任せなことでしたらう。』

『いや、巴里ではごく稀にしかお目にかからなかつたのですが、しかし、海外での同國人は、また別な親しみを感じさせるものでしてネ。』

——凛太郎は、静吉が、一家の人々に、巴里でのいきさつを、一切祕密にしてゐるのをたしかめて、冷たく心に笑つた。

——臆病者！ だからこの妹が、何等の豫備知識もなく、僕のやうな危険人物に近づかうとするのだ。

『如月さま。』

と、夏子が、遠慮深い微笑で、しかし、押へ兼ねる好奇心を以つて言った。

『私、實は、あなたがこの部屋へいらつしやる前、考へ込んでしまつてをりましたのよ——』

凛太郎は、ちよいと頭を下げて、喫煙の許しを乞ふやうにしてから、紙巻に火をつけた。



『兄は、これまであなたのことを何も話してくれませんでしたし、あの<sup>おほけが</sup>大負傷で、何も訊くことも出来ませんし——』たい、あなたといふお方は、どんなお方なのだらうと？』  
近代女性の朗らかさで、彼女は小首をかしげるやうにした。

『どんな人間と言つて——』

と、凛太郎は笑つた。

『お言葉の意味がのみこめませんね——』とにかく、お兄さまの知り人である以上は、別に悪魔でも、氣狂でもないでせう——』

——悪魔といふとき、彼の目はしかんだ。

『いいえ、いいえ。』

と、夏子はさへ切つて、

『勿論、そんな意味ではありませんわ。藝術家のやうでもいらつしやるし、それにしても快活でいらつしやるやうにも思はれるし——』

『ハ、ハ、ハ——藝術家？ なるほど、巴里にゐたといふので、畫家のやうにでもお思ひになつたのですか？ どういたしまして、僕には、このテーブルの上の灰皿ひとつ描けませんよ。何を<sup>なに</sup>する男かと強ひておつしやるなら、何か爲すべきことを見つけてゐる男だとお答へする外はないのです。』

『何か爲すべきことを見つけていらつしやる方！ まあ、何といふ面白いお言葉でせう！』

と、夏子は考へて、

『でも、屹度、あらゆる人は、みんなそれを見つけてゐるのではないでせうか？ 誰しも現在の境遇には甘んじずに——』

『あなたは経験者のやうに——失禮ですが大人のやうにお言ひですね。』

と、凛太郎は、ふざけ氣味で言つた。

『ところが、それはまだほんたうに人生を見ていらつしやらない方の觀察で、この世間には、自分のしてゐる事が、この上ない仕事だと信じ切つてゐる人達が一ぱいなのです——まあ、この町の軒竝の小賣商人にしろ、商品がさばけて、食べて、著て、貯金でも出来れば、その外に何も求めはしませんよ。若し彼等がブツブツ言ふとすれば、それは經濟上の不平にすぎんです。こんな事は、あなた方には遠い話で、御理解出来るのも無理はない。』

『でも、それは、凡人の——いいえ、俗人の世界ですわ。』

と、夏子が抗議した。

『いいえ。全く反對です。』

と、凛太郎は眞顔になつた——彼が眞顔になると、不思議な痛切なひらめきがほの見えて來るのだつた。





『あなた方が、非凡人、非俗人と考へておいでの人達に、一人として、さういふ觀念に當てはまる人間が居ますか？ 夏子さん、あなたは、今、例の藝術家——繪かきとか、音楽家とか、詩人とか、作家とか——でなくば、思想家、學者、ことに依ると政治家や、社會運動家をひつくるめて、非凡、非俗の人間のやうに考へておいでかも知れない。ところが、どういたして、彼等こそ、どんな小賣商人、どんな小工業者にも比べものにならない俗人、凡人にすぎんのです。僕は今、小賣商人を、俗人の代表のやうに言ひましたが、まだしも彼等の方が、正直である點で、世の中の、いはゆる非俗人より、千倍も氣高いでせう——切り賣りの思想家、口まねの煽動家、模倣一式の藝術家——獨創のないところに、何で非凡な容象があり得ませう？』

『では、あなたは、その、獨創的なものを探していらつしやるとおつしやるのね？』

と、夏子が夢ましげに言つた。

『獨創的な世界——それは、すばらしいものに相違ありませんわ。ヴェトオフエンの第九シムホニー——』

夏子は、音楽に教養を有する女性であることを、謙遜な形で告げて、そして口を噤んだ。あまりに、大きな（獨創）を引例したのを氣はづかしく思つたのであらう。

『さうです。ヴェトオフエンの第九シムホニー——でなければマッチの創造——』

と、夏子はいぶかしげに叫んだ。

『さうです。マッチ——』

と、凜太郎は、灰皿のそばのマッチ箱を取り上げた。

『このマッチです。この創造がなかつたなら、人間はどんなに不便でしたらう——そして、不便といふことは、いつも不幸を伴ひます。』

この男は、全く話術の——もしくは思ひつきの上手であるには相違なかつた。

ヴェトオフエンの代表樂曲と、卓上のマッチの比較——

その比較が、突拍子もなければない程、聽き手の興味は増してゆくのであつた。

『まあ！ 伺へばそれに違ひありませんわ。』

と、夏子はうなづいて、

『そして、あなたのお探ねになつてゐる生き方といふのは、そのどの種類の創造ですか？』

『さあ、自分にもわかりません。』

と、凜太郎はお辭儀をしてあやまつた。

『僕は只、熱意を失はぬ生涯を送りたいと願つてゐるだけなのです。そして、その願望は、いつも多少とも果されはするので——修善寺路の遠乗が、あなたのやうなすぐれた女性に紹介せびくれたやうに——ある意味で、僕は運命論者です。』



『まあ、何をおつしやいますの？ 私なんか——』  
凛太郎は腕時計をのぞいた。

『おお、もうラヂオの経済市況です。ちよいと失禮いたします。』

『あなた、株式相場をなさいますの？』

と、少女はびつくりして叫んだ。

『空想家の、ひとつの阿片としてね。』

凛太郎は立ち上つたが、ドア口まで見送つた夏子をふり返つて、

『今晚、お兄さまをお見舞なさいますか？』

『ええ、行つて見ようかと思ひますの。』

『では、その節、御一緒にいたしませう。お誘ひ下さい。』

——夏子は、凛太郎が行つてしまつてから、丸い顎を白い手でささへて、テーブルに頬杖をついて、二十むすめの熱情を以つて呟やくのだった。

——まあ？ 何て變つた方なのだらう？ あの方、屹度、すばらしい人生の冒険家よ！

そして、恒に、かうした男性ほど、無経験な娘たちの好奇心を煽り立てるものはないのであつた。

## 月の砂濱

もうスツカリ日が落ち暮れて、涼しい風が黒く植込みをそよがせはじめたころ、夏子は凛太郎に誘はれて、静吉を見舞ふために病院に自動車をいそがせてゐた。

自動車の中で、凛太郎は禮儀正しかつた。雪白のリネンの背廣を著た彼は、羅地の散歩服を著た夏子の豊麗なからだに、出来るだけ遠く坐つて、殆んどなれなれしげな口さへ利かなかつた。

夏子はさうした凛太郎の態度に、一種のヨソヨソしさを感じて、娘らしい冒険心にかすかな不満をさへ覺えるのだった。

——この方、夕方部屋をたづねて來たときには、もつと親しげだつたわ。もつと特別の氣持があるやうだつたわ。あの時とはまるで變つてしまつて、私には少しも興味も持つてゐないやうに思はれるけど——

ホテルから病院までの道は、勿論遠くはなかつた。

病院は、初島を見渡せるやうな崖の上にあるのだった。自動車道は紆餘曲折して、月に照らされてゐた。

二人が二階へ上つてゆくと、特等室のドアを開けて迎へたのが、節子だつた。



若夫人は、突然な良人の奇禍に、半日の間にまるで憔悴しつくしたやうに見えたが、そのためか、黒っぽい單衣がいつもより一そうよく、スラリとした立ちすがたに似合つて見えた。

『まア、如月さまも——ようこそ。』

彼女は、凧太郎と夏子とを、控間に迎へ入れた。

『お兄さまは？』

と、夏子が立つたままでもたづねた。

『ええ、一しきり、大變痛たさうでしたけれど、二時間ばかり薬で休んだので、今は大分よさうですのよ。』

『起きてゐられますか？』

と、凧太郎が言つた。

『ええ、醒めてをります。』

『ちやあ、お目にかかつてゆくかな？』

節子に導かれて、二人は病室にはひつて行つた。淡青い蔽ひをかけた電氣がほのかに照してゐる部屋の窓際に、白いベッドが据ゑられて、その上に仰向きに目をつぶつてゐるのが、兩手兩足を硬くグルグルと縋帯された静吉だつた。

夏子よりも、凧太郎の方が一足さきにベッドに歩み寄つた。そして枕邊に佇んでゐる涼子に、  
禮すると、患者をのぞき込むやうにした。

『君、どうだね？ 苦しいか？』

静吉は凧太郎と目が遭ふのを、恐れるか、それとも厭ふかするやうに、苦痛にドンヨリした瞳を電燈の方へ遣つてしまつた。

何か答へたらしかつたが、それは唇を洩れなかつた。

凧太郎の口元に、一種の微笑がうかんだ。友情か、蔑視か、それは當人でなくてはわからない複雑な表情だつた。

『どうだね？ 清水君？ いくらか樂になつたかね？』

静吉は、ものうさうに答へた——まるで別な言葉を——

『ほう、君はまだ熱海にゐたのか？』

冷たい、無愛想な表現だつたが、凧太郎は氣にかけた容子もなかつた。

彼は明らかに笑つた。

『それは當り前ぢやあないか？ 君と邂逅してもしなくても、僕はこの土地を指して旅をして來てゐるのだからね——まあ、一週間か二週間——決して君、僕の滞在を君のためだなどと氣を病まずともいいのだよ。』

静吉は、どこかに痛みを感じたか、眉をしかめて口を噤んだ。



『ねえ、清水君、それだから、若し僕で間に合ふことなら、どんなことでも言ひつけてくれ給へ。巴里でいろいろお世話になつた御恩返へしもしたいからね。』

さう言つて、ヂツと患者をみつめて、またも口もとで笑つたが、淑ましく枕元の椅子に坐つて、ジクジクと湧いて来る静吉の額の汗を拭つてやつてゐた涼子の方へ目を移して、

『あなたも御看病によく御精が出ますね?』

『いいえ。』

と、涼子は、不安危惧の想ひに充たされた陰氣な病室に、凜太郎のやうな精悍な青年を見出し、やつとホツとしたやうに微笑しながら、

『私には何も出来ませんの。ただ、心配ばかりしてゐるだけで——』

『一に看病、二に薬ですよ。まあ折角——』

その時、夏子がいつもの華やかな聲で、涼子の肩に手を置いて言つた。

『あなたにばかり働かせて——私にかはらせて頂戴な。』

『いいえ、いいのよ。あとで代つていただくわ。』

『ぢやあ、明日は私の番にしますわ。』

夏子はさう言つて、兄の上に屈み込んで、

『何か冷たいもの飲まないと?』

静吉は要らない——と、いふやうに唇を動かしたただけだつた。

『今日の出来事を、東京方面へ知らせましたか?』

と、凜太郎が節子にたづねた。

『は——いいえ。』

と、彼女はまた思案がきまらぬといふやうに、

『出来事が、新聞記者の耳にもはひらなかつた以上、誰れにも言ふな——と、申すものですから——でも、それもどうかと思つてゐるのですけれど——』

『いや、僕は寧ろ清水君の考へに賛成するな。負傷や病氣は醫者の外にどうしやうもないので

す。この病院は外科骨折でも信用がある方だ。折角ゆつくり治療しようとしてゐるところへ、飛

報におどろいて、東京からいろんな見舞客が駆けつける——清水君自身に取つて、あまりうれし

いとも言はれまいから——僕も、その方へ賛成しますよ。』

節子夫人は、凜太郎の言葉に決心が出来たかのやうに——

『あなたもさうおつしやるなら、やはり當人の意見に従ひませう。何だか、それもあんまりなやうに思つてゐたのですけれど——』

『あんまり手輕なやうだとおつしやるのですか? いいえ、そんなことは決してありません。清水君に取つて、おくさんと、それからお妹御や涼子さん以上に、どんな親近しい方がおありで



すか。もう親御さんがいらつしやるといふわけではなし——それに、僕のやうなものでも、ああいふ場所に通るかかつて、不幸な災難を目撃したからには、決して他人事と思つてをりませんし——その上、申し上げた通り、清水君とは巴里以來の交際です。もし、男手が御用の場合には、どんなことでもいたしますから、遠慮なくお命じ下さい。』

『御深切さまに——ほんたうに、あなたがお通りがかりにならないと、どんなに私達は心細うございましてらう——御滞在中は、どうぞ何分よろしく。』

『ええ、どうせ世捨人のやうな僕です。』

と、凜太郎は笑つて、

『どこでどう暮してゐるやうとも、世間にも、自分にも、何の影響があるわけでもありません。僕は、清水君が、すっかり全快して、愛用車で歸京されるまで、この土地にゐても構はないつもりです。』

『何といふ御深切な！』

と、節子はしんみりとして禮を言つた。

節子と凜太郎との會話を、傍らで聽いてゐる二人の處女たちの、一方は華やかな、一方は淋しげな——しかし共通して別種の美を持った顔に、感謝の色が漲りあふれるのだつた。黙しつづけて、呻吟の聲さへも洩らさないのは清水静吉だけだ。

彼の瞑目と沈黙との意味に就いては、蓋し、彼自身よりも、もつとよく凜太郎が知つてゐるであらう——

竹んだま見下してゐる凜太郎の目つきは、かう呟やいてゐるやうに思はれた。

——フム、もう取り越し苦勞といふ奴をはじめてるのかね？ まあ、未來についてはお互にあんまり考へ込まないやうにした方がいいよ——なぜつて、とかく不幸は言ひ當てるつて言ふぢやないか、——ハ、ハ、ハ、ハ。

が、彼は、やがて、静吉の方へ目を遣つたままで、低聲で言つた。

『どうやら清水君はお眠いやうです。激動のあとでは安眠が何よりですから、もう僕が御邪魔してゐない方がいいでせう。また明日伺ひます。』

そして、節子たちと會話を交すと、ドア口まで見送つた夏子に、獨言のやうに言ふのだつた。

『これから僕は海岸を一巡りして來ませう。今夜のやうないい月夜は、この海岸でもさう滅多にあるものではありません。』

夏子は答へずに腰をかがめて微笑した。

十分後、如月凜太郎は、病院のついで下の海岸の、一ばん大きい岩蔭に腰を下して、しなやかな



竹の洋杖を手にしたまま、大空に澄み渡つてゐる満月に近い月を仰いでゐた。

全く彼が夏子に言ひ残したやうに、こんなに美しい月夜はさらにありさうには思はれなかつた。空は水のやうに晴れて、月に近いあたりには一めに眞珠いろの輝やきが漲り、波は、黒く光りながらしづかに續いてゐた。その癖、砂濱には、涼を追ふ散歩の客が少なかつたが、恐らく、今夜、この避暑地で、名高いテナア眞木誠の獨唱會があるので、その方へ人々の足が向いたためであらう。

凜太郎は、さき程ホテルの食堂で遠くから眺めた、有名なテノル唱ひの、黒い髪や、青白い頬や、愛想深く、そしてどこか冷酷な微笑を、フト想ひ出した。同じ食卓の夏子が、眞木の容姿に稍々ひきつけられたやうに、絶えずその方へ視線を送つてゐたのを考へて、彼は笑つた。

「だから、誰れが何と言はうとも、僕は妙齡の處女は、誘蛾燈の光りに身を焼くために飛びつく火蛾にすぎないと言つてゐるのだよ。また、肉食獸のために供へられた、和らかい、おいしい犠牲だとも言つてゐるのだよ。まあ、假りに、今夜、兄貴の身に變事がなくて、あの娘が眞木の演奏會に行つてゐたとして見給へ——何しろ、同じホテルにゐる二人なのだ、あの娘はまづ、甘つたれた聲で、あの悪どいまでに感傷的な眞木のテノルを讚美する。それからその次に、サイン・ブックを取り出して、黄金製萬年筆を添へて署名を求め。次には會話がつづいて、それから二人だけの部屋で、ドアを閉めて、何かつまらない事を話し合ふ——そしてその中には、男は

娘らしい腰のあたりに手がまはしたくなり、娘の方では、もつと激しい感觸を、男の唇を、たとへ額にだけでも受けて見たくなるのだ。娘たちは、格別、どんな異性でなければいけないかと考へてゐるやしないのだ。誰れでもいい——自分を一ばん強く抱き締めてくれるものを求めてゐるだけなのだ。だから、僕たちの方から言ふと、遠慮は不沙汰で、あの夏子にしろ、僕が今夜この濱へ誘はなければ、明日は眞木と何處かへ遠乗でもすることになる——早いが勝ちといふ見方をする外はない。

かくもしみらな、純らかな月光の下で、如月凜太郎は、世にも毒々しい微笑を洩しながら、心に呟やきつづけたが、ふと——

「が、夏子は今夜この濱へ出て來るかな？」

若し、彼女が後を追つて來なかつたなら、彼女の熱情は、たつた夕方食堂で眺めた眞木の方へ、突然注がれはじめたのに相違ない、と凜太郎は思つた。しかし、すぐあとで頭を揮つた。

「いいえ、あの娘は來る。屹度來る。あの娘はどんなテノルよりも、僕のロマンチックな出現に魅惑されてしまつてゐるのだ——だが、夏子も美しいが、あの涼子とかいふ、淋しさうな花もしをらしいな。ああいふ娘が一たん情熱的になると、全く思ひがけないやうな危険を冒すものだ。

如月凜太郎は、さう心に言つて、追憶的な目つきで月をみつめた。彼のやうな、言はば精神的



浮浪人（ウツカボンド）に取つては、をりをり彼の魂（たまひ）と肉體（にくたい）とに一種（しゆ）の印象（いんしょう）をあたへて行つた女（おんな）たちの、それぞれの面影（おもかげ）は、まるで夜の港（みなと）の灯（ひ）のやうな儂（ほろ）なさ、美しくさで思（おも）ひ出（だ）されるのだつた。彼は夏子（なつこ）に似た娘（むすめ）を、何人（なんにん）知（し）つてゐたであらうか？ 彼（かれ）が一月（ひとつき）あまりあるホテルで同棲（どうせい）した娘（むすめ）に、涼子（りやうこ）と同じやうな淋（さび）しさを感じ（かん）させる女（おんな）がなかつたであらうか？ いいえ、女性（ぢよせい）の性格（せいかく）は大凡（おほよそ）幾（いく）通りかにかまつてゐた。そして、より強烈（きやうれつ）な刺戟（しげき）を求めて生（い）きる彼（かれ）は、順々（じゆんじゆん）にさうした女（おんな）たちを去（さ）つたが、彼（かれ）も人間（にんげん）である限り（かぎり）は、時々（ときどき）激（げき）しい追憶（ついきよ）に捲（ま）き込まれ、鋭（す）どい自責（じせき）の牙（しば）で、魂（たまひ）を噛（か）み裂（さ）かれるやうな痛苦（つうく）を感じ（かん）しないではゐられなかつた。

今（いま）も、彼（かれ）は、曾（か）つて愛（あい）を囁（ささ）やいて、ある小都市（せうとし）のホテルに置き逃（に）げをした一少女（せうぢよ）が、涼子（りやうこ）にどこか似（に）てゐるやうな氣（き）がして、一種（しゆ）痛烈（つうれつ）な悔恨（くわいこん）に打（う）たれさうになつた。けれども、次の瞬間（しゆんかん）には、凛太郎（りんたろう）は自分を嗤（わら）ふやうに、聲（こゑ）に出（だ）して笑（わら）つた。

——馬鹿（ばか）！ とかく月（つき）なんぞ見てゐると、人間（にんげん）は陰氣（いんき）臭（くさ）くなつてしまふものだ。凛太郎（りんたろう）、貴（き）さまはまだ青年（せいねん）なんだぜ——鋼鐵（かうてつ）の牙（しば）であらゆる犠牲（ぎせい）を噛（か）み破（やぶ）り、獅子（しし）の舌（した）で美肉（びにく）を味（あじ）はつて、次（つぎ）へ次（つぎ）へと進（すす）んでゆけばいいのだ。しつかりしろ！

彼（かれ）が、さう自ら嗤（わら）つたとき、かすかな足音（あしおと）が砂濱（すなはま）を近づ（ちか）づいて、夏子（なつこ）の處女（せとめ）らしいすがたが、月光（くわうが）の下（した）に現（あら）はれたのであつた。

## 蠱（い）の輪（りん）

白い麻布（マフ）の背廣（せびろ）を著（き）た凛太郎（りんたろう）を、夏子（なつこ）の情熱（じやうねつ）な目（め）が見（み）つけ出（だ）したとき、彼（かれ）は岩蔭（いはかげ）を少し（すこ）はなれて彼女（かのじよ）を迎（むか）へた。

『おお！ 夏子（なつこ）さん、ここですよ！』

凛太郎（りんたろう）の呼びかけには、こよない親しみ（おんしみ）が溢（あふ）れてゐた。

『おまちしてゐました。多分（たぶん）、一緒に濱（はま）を歩（あ）るきに來（き）て下さ（くだ）るだらうと——』

『私（わたし）、心細（こころほそ）うございましたわ。』

夏子（なつこ）は相手（あひて）のさも朗（ほろ）らかな調子（てうし）に引（ひ）き入れられて、男（をとこ）と二人（ふたり）だけの海濱（うみべ）の夜（よ）のそぞろ歩（あ）きをすこしも氣（き）にかけずに濟（す）むのだつた。

『若（わか）しお目（め）にかかれなかつたら、ホテルまでの道（みち）がさぞ淋（さび）しいでせうと思（おも）つて——』

『發見（はつけん）したがつてゐる同志（どうし）は、必（かな）らず發見（はつけん）し合（あ）ふものです。』

と、凛太郎（りんたろう）は哲學者（てつがくしゃ）めかしく笑（わら）つて、細（ほそ）い洋杖（けん）を腋（わき）にはさむと、兩手（りやうて）を夏子（なつこ）の方（ほう）へ差し伸（の）べた。

『ああ、この岩（い）の上（うへ）へ登（のぼ）りませう。』



夏子も、氣まり悪さを感じるひまもなく、その手にすがつて、踵の高い靴で大きな岩の、海に面した方へまはつて行つた。

『さあ、掛けませう。』

凧太郎は、無邪氣な少女に對するもののやうに言つて、滑らかな岩角に腰を下させると、自分もそれに寄り添つて坐つた。

『おお、いい月ですこと——』

と、まだ片手を男にあづけたままで、夏子は、流れる月をみつめながら、自然な口調で呟いた。そして急に凧太郎を、黒い大きな瞳でみつめて、

『あなたはさつき病室で妙なことをおツしやいましたわね？』

突然、思ひ出したやうに言ふ夏子を、凧太郎が見返へした。

『妙なことは何です？』

『あなたは、御自分が、どこでどう暮してゐるやうと、世間にも御自分にも何の影響もないとおつしやつたわ。』

『ええ、言ひましたが——いつも僕はさう思つてゐるのです。これまでの生活がさうであつたやうに、今後も必らずさうだらうと思ひ込んでゐるのです。』

『でも、どうしてそんなことをお思ひになるのでせう？』

と、夏子はますますみつめた。

『私には、そんな考へ方をなさるあなたのお氣持が呑み込めせんわ。人間は、だれだつてみんな相互關係があるはずですもの——』

『ハ、ハ、ハ、夏子さん。』

と、凧太郎は絶望的な笑ひを笑つた。

『さういふことは、あなたが幸福な令嬢だから言へるのですよ。古い言葉で言ふと、いつどこで死んだつて、聽いて泣くのは裏山のからすばかりといふ人間もあれば、その人一人が死んだために、天下の子女が紅涙を流すといふやうな人間もある。僕などは、たとへばこの海岸を一人で歩いてゐるとしますネ、土用波がだしぬけに来て、海の底へ浚ひ込んで行つてしまつたとする。突然の僕の消失を、誰れ一人氣にかけるものもないのです。』

『いいえ、嘘でございますわ。』

と、夏子は叫んだ。

『あなたの考へ方は間違つてゐますわ。私はそんな風には信じませんのよ——たつた今日の一日を考へて見ても、あなたと修善寺への遠乗道で自動車を通りすがつたといふだけなのに、兄の危難を救つていただいたばかりか、その晩、かうして私達はこの海邊の岩の上でお話してゐるのですもの——私は、人生をもつと好いものに考へてをりますのよ。』



凜太郎は、ただ、委ねられた、手袋なしの細い指先をいくらか力強く握つただけであつた。そして唇で笑つた。

『あなたは笑つていらつしやるのね？』

と、夏子がおこつたやうに言つた。

『笑つてなんかやるやしません、あなたの考へ方も随分感傷的ですよ。』

と、凜太郎は、はじめて夏子の指を放して、紙巻に火をつけた。

『われわれが、ああいふ機會で知り合ひになつて、今夜二人で海邊の月の下で話してゐる——それだけのことが、別にわれわれの一生の生活に大きな影響を投げることは出来やしません。明日お別れしてしまへば、もうこの瞬間は磨滅されてしまふのです。』

『いいえ、人生には、一年よりも長い一時間があるはずですよ。』

夏子は、放された指先きを、急に物足りなさを覺えながら、月光にみつめた。

凜太郎は黒く冷たく光る波に見入つた。

『あなたは唯物論者？』

と、夏子がたづねた。

凜太郎は答へなかつた。

『あなたを見てゐると、まるで生活から興味を失つておしまひになつた——』

『流浪者のやうに見えますか？』

と、凜太郎は受けて、

『大きに違つてゐます。僕は絶えず、何か爲すべきことを見つけてゐる男だと、さつきホテルで申し上げたことと思ひますが——どんな種類の仕事にせよ——僕は、株式相場の丁半をさへ試みてゐるのですよ。ほんたうに僕の仕事がつかる迄の、時間を忘れさせる阿片催眠薬としてネ。』

——夏子は、白くきらめく大きな月を仰いで吐息をした。

それが、凜太郎には、まるで、

——あなたは戀にも興味を失つておしまひになつて？ 一生懸命になれる戀人さへも發見出来ないとおツしやいますの？

と、訊ねるかのやうに感じられた。

そして、事實、夏子はさうした熱情に燃えてゐたかも知れない——近代のある種の女性は、相手が冷たい男であればあるだけ、自分の情熱をわざと攪き立てずにはゐられないのだ。

凜太郎は夏子の目を追ふやうにして、しづかに流れてゐる月を眺めた。

——この娘は、妙な虚榮心から、戀といふ言葉を、この場合、唇に上せることが出来ないのだな？ やさしい、美しいお嬢さん、僕が、それでは口火を切つて上げませうね！

『どんな小さなことでも、僕は一生を賭けられる仕事を求めてゐるのです——尤も個人的なもの



でも——たとへば戀愛でも——』

——戀愛！

その言葉が、凧太郎の唇から洩れたとき、夏子は明らかに戦慄した。彼女は肩先をつたはる身震をかくさうとして、齒を噛み占めながら言った。

『では、あなたは、これまでどなたをもお愛しにならなかつたの？』

『不幸な男です。』

と、凧太郎は自らあはれんだ。

『僕を愛してくれた女たちは、僕と歩調を合はせることが出来ませんでした。』

『みんな女性は愚かだとお言ひですの？』

凧太郎は、それには答へずに、また波を見た。波はさざめきながら、靜かに岩の根を洗つてゐた。

『僕はしかし、今夜は清水君が羨やましい氣がしましたよ。』

『兄がうらやましい？ どうしてでせう？』

『あの人は旅で負傷をして、病院に寝てゐるが、夫人や、あなた方がああしてやさしく看護してゐられる——この僕があべこべに災害をうけたのなら、どうしたでせう？ 僕は、ひとりぼつちで、折れた脚に當てた當て木を抱いて呻吟してゐるなりやならん。と、さう考へると、淋しくな

つたのです。』

『あなたはどんな女性がお好き？』

夏子がさう訊ねることが出来たのも、盪はしい月の光りにある心の昂奮を與へられたからであらう——さもないことには、かうした質問は、打ちつけてまだ口に出來る彼女と彼だとは思はれなかつたが——

凧太郎は白い齒を露はして微笑つて、夏子を眺めた。

『さあ——』

『どんな方がお好き？』

彼女は繰り返へした。そして二人の目は出逢つたまま、不思議にいつまでも離れなかつた。

『どんな女もお嫌ひなの？ 今おッしやつた通り、歩調を合せるだけの賢しさを持たないから——』

『いいえ、僕はそんな生意氣な斷言は決してしないのです。いつ、どこに、どんな優れた人がゐるかも知れない——僕を一目見て捉へてしまふやうな女性があるかも知れない——そして、全く思ひがけなくさうした人とめぐり合つて、これまでどんな女性にも折らなかつたこの膝を、折らなければならなくなるかも知れない——その人への思慕で、一度も戀のために流さなかつた涙で、この頬邊を濡らさなければならなくなるかも知れない——僕は決して、すべての女性を嫌ふ



なぞといふやうなことは申しません。』

月の光りの下で、二人の目は、お互の魂の奥の秘密を読み取らうとするやうにまっはり合つてゐた。

夏子の唇は動いた——彼女はわれにもなく呟やいてしまつた風であつた。

『まあ、あなたからそんなに崇められた方はどんなに幸福でせう！』

『夏子さん。』

凛太郎の手は一度離してゐた彼女の指先を求めたために、夏子の膝の上をさまよつた。

『あなたはそんな冗談を言つて、僕を氣違ひにしてしまふつもりですか？』

夏子の瞳に黒い炎がバツと燃えて、激しい戦慄が、ふたたび全身を走しり流れたやうであつた。

『如月さん——』

と、彼女は寧ろ乾いた聲で、

『私を、あり来りのフラツパーのやうに、おあつかひになりますの？ そんな嬉しからせをおツしやつて、私をおからかひにならうとなさるんでせう？』

『いいえ、全く反對です。僕は僕自身で自分の氣持に驚かされてゐるのです——言はば、これが運命といふのでせう——』

と、凛太郎は妙に迫つた聲で言つた。

『僕はある不幸な出来事が突發した瞬間、極端な驚愕の中にも、あなたを一目見て息が詰つた位でした——ですが——』

と、急に沈んだ調子になつて、

『僕にはこれ以上の事が言へません——僕はもう汚れた男で、あなたを崇めるといふ事さへ許されてゐないかも知れん——』

彼は、把つてゐた夏子の手先きをしづかに放して、遠くたつた一つ浮いたり沈んだりしてゐる月夜の漁り火をみつめるのだつた。

夏子の肉と魂とは明らかに擾亂せしめられた。彼女は放された手先きに残つた感觸にさへ、なほかつ全身がをのきつづけた。彼女は得體の知れない存在に對する激しい好奇心から凛太郎に近づいて、そして今や、彼獨特の誘惑魔術に引つかかつてゆくのを、どうすることも出来なかつた。

『如月さん。どうしてあなたは御自分をそんな風にばかりおツしやるの？』

『恐らく、僕は自棄になつてゐるのでせう——醜くい食人鬼が、透きとほつた鏡の前では絶望して自暴自棄になるやうに、あなたのやうな方にお目にかかる、なぜ自分といふものを、もつと大事にして置かなかつたかと、返へらぬ昔を憤はる外はないのです。』



『いいえ、如月さん、私、決してあなたは、そんな汚れた方だとは思ひませんの——なぜと言って、私たちは、清らかな世界や正しい世界へあこがれを持つてゐる以上は、いつでもそつちへ進んでゆけるものだと、信じてをりますのよ。』

『ああ、何といふ、美しい、やさしい心を持つたあなたなのでせう——僕は世間の荒波の中に好んで身を投じて、すさんだ生活ばかりして來ましたが、あなたの言葉を聴いてゐる中に、心の傷がズンズンと癒えてゆくやうな氣がするのです。』

——二人の言葉はブツリと途切れた。夏子の胸は次の瞬間への——ロマンスへの、激しい期待でワクワクと躍つた。が、その短かい緊張した刹那は、二人が坐つてゐる大きな岩のつい側まで近づいた足音に依つて傷けられた。

その足音で、夏子の心と肉體とに投げかけられた蠱の輪は破られたもののやうであつた——彼女の胸に、言はば處女性とでもいふやうなものが、急激によみがへつた。

彼女は、思はず踏み込んだ水溜りから足を引くやうに、ハツと、反射的に立ち上つた。月の晩、異性とたつた二人で、かうした場所に長く止まつてゐたことが、本能的にうしろめたくなつたのである。

身を起した彼女を、近づいた人々はもう見つけてしまつた。

『まあ、夏子ねえさま——あなた、今日修善寺へお立ちになつたと思つたら、また戻つていらしつたの？』

若々しい少女の聲であつた。

『まあ、千代子さま！』

十五六の、少し長目な斷髪の、浴衣着の娘の側には、これも裾短かな浴衣だが、夜目にも品の良い、たしかに大學生らしい容子の二十二三の青年が立つてゐた。

『お兄さまと御散歩？』

夏子は兄の奇禍について語るのを好まぬらしく、少女の間には答へまいとしたのだつたが、同じ事を、兄の方がたづねた。

『修善寺は面白くありませんでしたか？』

『いいえ。』

と、夏子は口籠りながら、

『兄が途中で自動車をこはしてしまひましたので——』

『それは！』

と、青年は不安げに、

『どなたもお負傷は？』

『兄が少し——大したことはありませんけど——』



『ホテルで御静養ですか？』

『ええ、その病院に——』

『ちつとも知りませんでした——では、明日早速お見舞に上りませう。』

青年はさう言ふと、夏子に未知の伴れがあるので遠慮したらしく、

『さあ、千代子、行かう——』

と、言つて、夏子を、切れ長な目で眺めて、

『みなさんによろしく。』

『お待ち遊ばせね、私達ももうホテルへ歸らうとしてゐたところですよ。』

夏子にすれば、男性とたつた二人で、この岩かげにゐのこることがはばかられたのであらう

『如月さん。』

と、凛太郎を呼びかけて、

『御紹介しますわ。』

凛太郎も岩を下りて砂濱に立つた。

彼と、浴衣すがたの、髪黒い青年とは向ひ合つた。

『こちらには兄のお友達のお如月さん——こちらは、今川俊一さん——今川子爵の御子息です——そ

れにお妹御の千代子さま。』

男性たちは腰を屈め合つた。

『御別荘は、ホテルのついで上におありですよ。』

と、夏子が凛太郎に説明した。

男たちは、肩を並べるやうにして歩き出した。夏子は千代子の手を引きながら、二人から少し

はなれて、そして、何がなしに、ホツとしたやうにも思つたが、同時に限りない残り惜しさを覺

えもするのであつた。

月は、四ツの人影を、砂上に黒く長く引かせた。

## 憎悪の目

その翌朝、十時少しまはつたころベッドを離れた凛太郎が、昨夜の海邊の思ひでを胸に浮べて  
ゐるのか、口邊に奇しげな微笑を脣はせて、ホテルの後苑の涼しい竹林の小徑を歩いてゐると  
き、ふと、うしろで、

『あら、あそこにいらしたわ！』

といふ、美しい叫びを耳にして振り返ると、そこには、清楚な朝衣を著た夏子と、薄地の



銀鼠に荒い縞を出した單衣に、赤のまじつた青竹いろの帯を締めた涼子とが近づいて來てゐた。  
『お早う！』

と、凧太郎は紙巻を捨てて、二人を迎へたが、夏子の方は朝化粧に生き生きと艶やかだつたけれど、涼子は、さも寝足りないやうな青白い頬をして、すつかり憔悴してゐた。

夏子は言ひかけた。

『實は、さつきから、お探ししてをりましたのよ——是非御相談いたしたいことが起つて——』  
その夏子の表情には、どことなしに、普通の親しみを越えた馴れ馴れしさがあつた——凧太郎は、昨夜の月の光りを、この娘も思ひうかべてゐるであらうと思つた。  
が、相手はつづけた——

『兄のことで——』

急に凧太郎の口元が緊つた。

『お兄さんが？』

涼子が、しとやかに口をはさんだ。

『昨晚——もう曉け方になつてから、お従兄さまが、急に駄々をこねはじめ、どうしたらよいかと、ほんたうに心配いたしましたの。』

『駄々をこねたのですつて！ どんなことを言ひ出したのです？』

凧太郎の顔には、好奇的な色が浮んだ。

『どうしても、今夜これから東京へ歸るのだと——』

『へえ！』

『夜中だし、そのからだでは——と、いろいろになだめたのですけど、それなら、夜が明けたら、死んでも歸京する——と、どこまでも言ひ張つてお肯きになりませんの。お嫂さまも途方に暮れておしまひになるし——私、ほんたうに泣き出したうございましたわ。』

と、涼子が訴へるやうに言つた。

『で、今朝はもう平靜になつたのですか？』

『ええ、今のところ、疲れでぐつすり眠つてをりますから——その間を見て夏子さんにそのことをお知らせにまゐりましたの。』

『嫂も、昨夜の模様では、醒めたら屹度また我儘がはじまるだらうから、あなたに御面倒でも、當分こちらにゐる外はないことを、因果をふくめていただいたらと、さう申すんださうですよ。』

と、夏子は言つた。

『それで、その事をお願ひしようと思つて方々お探してゐましたの。』

『何でまた、熱海が急にそんなに厭になつたのかなあ——』



その原因は、清水静吉自身以外に、凛太郎ほど詳しく知つてゐるものはないであらう——  
けれども、娘達は知る由もない。

『それがサツパリわからないのよ。』

と、夏子は打解けた言葉遣で、

『兄はああいふ気性で、そんな非常識なことを言つたことはないのですけど——』

『どうして？』と、お聞きしても、理由なんかどうでもいい——東京の邸宅へ歸るのだと、どこ

までもどこまでもおツしやるのですもの！』

と、涼子は心から懸念に充たされてゐるのだつた——

『醫者は、一週間か十日は、絶對安静が必要だとおツしやつてゐますのに——』

『いいです。』

と、凛太郎はキツパリと承諾した。

『ひとつ僕が忠告して上げませう——今日もそんなつまらんことを言つてみなさんをイヂめるやうなら——なあに、多分、急に身動きも出来ないやうな状態になつたので、癩癩が起きてたまらないのでせうよ——その氣持はわかります。』

凛太郎にそんな風に言はれて、二人の娘たちは氣が樂になつたやうに見えた。

『僕の部屋にいらつしやいませんか——何か冷たいものでも飲みませう。』

二人の娘は凛太郎に招かれて、彼の部屋にはひつた。

凛太郎はボオイを呼んで、飲料を言ひつけて、自分でコップを取つて奨めると、すぐに自動車を命じて病院へ出かけた。

彼のやうな種類の男に取つては、犠牲は異性ばかりではなかつた。一度弱味を見出した相手は、どこまでも苛なみつけてそして悪魔的な快感を味はふのが何より楽しみなのであらう——それゆゑ今、彼は大變上機嫌でハシヤいでゐた。

『お兄さんが少し快くなつたら、モオター・ボオトで大島まで行つて見ませうね——僕はボオトの運轉なら、テムズ河で優勝したこともあるのですよ。』

『でも、あなたはスポオツなんかお好きにならないやうに見えるわ。』

と、人知れず凭れかかるやうにして、中央に席をしめた夏子が言つた。

『どうして？』

『でも、スポオツマンは、もつと粗野な神經でなくては——』

『いいえ、違ひますよ——人はすべて精神で生きるものなんです。勿論、角力やレスリングでは僕たちは劣敗者でせう——しかし、僕は僕で、別の闘争力を持つてゐるのです。』

——見ろ！ その中には、底知れない俺の魔力で、君たちは呪縛にかかつてしまふのだぞ！  
自動車は病院に着いた。



控間に迎へに出た節子夫人は、昨日よりも一そう寒れを見せてゐた。

『起きていらつしつて？』

と、夏子が訊ねた。

『ええ、今、朝の診察が済んだところですよ。』

『わがまま、言はなかつて？』

と、夏子が聲をひそめた。節子は美しい眉根を寄せて、

『それが——』

と、病室の方を気にしながら、

『今も、醫者が何と言はうと、歸京しなければならぬと、また同じことを言ひ出して弱つてゐた

ところですよ——看護婦さんも困つておいでですわ。』

『よろしい。』

と、凧太郎は口を扱んだ。

『僕がきびしく言つて上げます——それについて、二人だけの方がいいと思ひます。あなた方は

庭でも歩いていらしつて下さい。』

『ほんたうに、何から何まで——』

と、節子夫人は感謝した。

『何の！ 舊友のためですもの——』

『うんと言つてやつてネ。』

夏子は、微笑つて言つた。

そして、三人の女性は、目で凧太郎に頼んで外へ出た。

凧太郎は冷たい微笑をうかべたまま、落ちついた足どりで病室にはひつて行つた。

『お早う、清水君。』

静吉は、むかうを向いたまま、殆んど頭を動かさしなかつた。

凧太郎は看護婦に言つた。

『少し話があるので、どうか——』

頬邊の紅い白衣の娘は、大人しくうなづいて出て行つた。

凧太郎は、ベッドの枕元をまはつて、静吉の苦痛に歪んだ顔を見下した。

『どうだね？ 昨日よりいくら快いですか？』

静吉は答へなかつた。しかし、目を反らさうとはせず、凧太郎の注視に怯へてゐた。

赤濁つた目はボコリと凹んで、いつもの静かで上品な光りはそこから流れてはゐなかつた。

凧太郎は、ズボンのかくしに両手を突込んだまま突ツ立つてゐた。

『君は僕が見舞ひに来るのがお氣に入らんやうだね？ 僕の邪推かしら？』







「——どうだね？ それでも、僕を侮りつづける勇氣があるかね？」  
と、勝ち誇つた凜太郎は、ふたたび調子を變へて、親しげに、

「しかし、そんなことを僕だつてしたくはないよ。僕の方ではこんなに友情を見せてゐるのではないか？ 昔は昔として、これから仲よくつき合つてくれ給へ。僕のやうな男でも、相手の出方ひとつで、案外深切な人間かも知れんのだ——」

静吉は黙して唇を噛み締めた。

「わかつたね？ わかつてくれたね？ 君。もう東京へ歸るなどと駄々をこねてみなさんを苦しめないね？」

静吉は苦しげにかすかに呻いた。

「——負傷が痛むのか、それとも、憤怒に魂がうづくのか？  
が、凜太郎は全く親友のやうにたづねた。

「脚がいたむのか？ それとも腕か？」

静吉は、突然涙を流した。

「如月君。」

「何だ？」

凜太郎は顔を寄せるやうにした。

「お願ひだ——僕の家庭をだけは尊重してくれ給へ——」

「ウム、僕だつて人間だよ。」

凜太郎は、病室のついで下の庭を、三人の女性が、この部屋の方を氣にしながら逍遙してゐるのを、さつきから見えてゐたのだ。彼は窓から顔を出して、さも快活にその方を小手招ぎした。

三人の女性は、凜太郎の明るい笑顔を見ると、さも安心したやうに微笑して、病舎の方へ引ッかへして來た。

彼女等がはひつて來たとき、凜太郎は、上機嫌で迎へた。

「御安心なさい、もう清水君は決してみなさんを苦しめないのです。この人は、この病院を少し信頼しなかつたのですが、僕が院長の技倆を説明したので、充分恢復するまで入院をつづける決心をしました。どうせ、病人なんてものは我儘にきまつてゐますよ。」

一ばんホツとしたらしかつたのは節子で、つづいて涼子であつた。夏子は、今や、兄の負傷よりも、もつと外の事に關心を持つてあらう——

「ねえ、お兄さま。」

と、彼女は言つた。

「今、こちらへ來る自動車の中で、お兄さまが快くなつたら、みんなで大島へボート遊びをすることをお約束しましたのよ。如月さんは、モオタア・ボオトのチャンピオンでいらつしやるので



すツてネ——』

## 月の露臺

林女處るえ燃

その晩も、冴え渡つた月が、水のやうな大ぞらを流れてゐた。

そして、昨夜遊園地のホールで獨唱會を開いたテナア眞木誠が、今夜はホテルの廣間で、特選された聴衆のために得意の小曲を歌ふことになつた。

この青年音楽家の獨唱を聴き落さねばならなかつたのは、涼子にかはつて、病院で兄の看取りをせねばならぬ夏子と、節子夫人とであつた。それに反して、細そりとした身を、水いろのドレスに包んだ涼子は、如月凛太郎と椅子を並べて、聴衆の中にまじることが出来たのだつた。

眞木誠は、スラリとした燕尾服すがたで、狭い舞臺に立つて、少し疲れたやうな目つきで聴衆に會釋をした。伴奏は一流を以つて目されてゐる野井といふピアノリストで、細長いからだを樂器に屈み込ませて鍵盤を軽く打ちはじめた。

眞木の聲は、どちらかといふと、かぼそすぎたが、小曲歌ひとしての身上もそこにあるらしかつた。スペインの小唄には、南歐的な情熱のメロディが充分に含められてゐた。そして、次の唄に移る間に、聲樂家はカフの間からハンケチを引き出して顔の汗を拭いた。

凛太郎は、しかし、テノルうたひの藝術にはあまり耳を傾けてはゐなかつた。彼は象牙彫りのやうに線の美くしい涼子の横顔をチラチラと眺めてゐた。

涼子はどの道夏子とは大分違つた性格を持つてゐるのであらう——彼女は昨夜の食堂での夏子のやうに、眞木誠のいかにも藝術家らしい目つきや口元に注視を送つてはゐなかつた。半ば目を閉ぢるやうにして、熱心に聴き入つて、曲がをはるたびに深い吐息を洩らすのだつた。

——淋しい子だな——

と、凛太郎は心に呟やいた。

——しかし、この淋しさの底に、僕が見抜いた通り激しい情熱がかくされてゐる——見ろ！

あのため息は、その情熱が洩れ口をさがしてゐるのだ。

拍手が送られて、最後のアンコオルに答へた曲が了ると、ザワザワと聴衆は席を立つた。

『涼子さん。』

と、凛太郎は囁やくやうに言つた。

『僕の部屋の露臺からは、月がよく見えますよ——いらつしやい——月を見ながら、お話しませう。』

彼は右腕を涼子の方へ差し出した。

涼子は禮儀上、軽く腕を組んで、細長い廊下を凛太郎の部屋の方へ行つた。



凧太郎の部屋のバルコニーは、全く月を見るに適してゐた。白いきららかな輝やきは、鉢植の南洋植物の影を床の上に眞黒に投げさせてゐた。

ボーイに椅子を月光の中に運ばせて、凧太郎は涼子に氷片を浮かした白葡萄酒をすすめた。

『音楽は妙に後口が悪いですね。』

と、呟くやうに凧太郎が言つた。

『え？』

と、涼子が訊きかへした。

『音楽は人間に、つまらぬ悲哀を感じさせていけないといふのですよ。』

と、凧太郎がかすかに笑つて答へた。

『さう仰有ればさうでございますのね。』

『あれは去つてしまつた過去を、みんなに思ひ出させます。すると苦しかつた過去まで甘たるいものに感じられて来て、われわれは思ひ沈んでしまふのです。もつとも、あなたなんぞのやうな若い、美しい嬢さん達には、未來の夢想を煽るこのもしものは知れませんが——』

と、涼子は答へた。

『をりますから——』

『どうしてあなたのやうな方のお口から、悲しみに充たされた過去、といふやうな言葉が洩れるのでせう？ 苦しい戀でもなすつたのですか？』

『まあ！ 戀なんて！』

と、涼子は淋しげに笑つて、

『私はただ家庭的にひどく不幸だつた昔を言つてゐるのですわ。』

『へえ！ あなたのやうなお嬢さんにも、不幸な經驗がおりなのですか？』

涼子は月を仰いだまま、うなづいて見せただけであつた。

## 美しい闖入者

一種押し迫るやうな凧太郎の語調は、話の内容がどんな類であるにもせよ、うら若い娘の耳には、激しい旋律を含む音楽のやうな効果をあたへるのだつた。

涼子は、青い涼しい月が、黒い影を投げる露臺で、たつた二人、その不思議な魅力を持つた異性と、とりとめもない雑談をかはしながら、生れてはじめての感情が、攪きほどてられて來るのをどうすることも出来なかつた。彼女は時刻が移つて行くに従つて、かうした場所に他人まぜず





に坐つてゐることが、妙に氣がとがめて來るのだつたが、その癖自分の口から、押し切つて別れを告げることが、残り惜しい氣がしてならないのだつた。

そして、ついこれまで、どんな人の前でも、洩らしたことの無いやうな、奥深い心の惱みについてさへ、われにもなく口にしてしまふのであつた。例へば、たつた二年の間に、急激に父を、また母を失つて、兄弟とてもなく、天涯の孤兒として、從兄の寄食人になつてゐる佗しい身の上話さへも――

凜太郎は、涼子が、孤獨の身の淋しさを歎いたとき、力強く勵ますやうに言つてくれた。

『そのやうな淋しさや苦しみに、一刻も負けてゐては駄目ですよ。あなた方のやうな美しい若い方は、すでに絶對的な優越力を持つてゐるのです。あなたが、かりにこの露臺で、月に向つて、孤獨を哭いたとすれば、月さへ、ぢきに救ひの手を伸ばすでせう。』

『月が？ まあ！』

彼女は哀しげに微笑した。

『さうです、月が――』

と、凜太郎は笑はずにうなづいて、

『月が、誰れか力強い男に命じてそれをさせるのです。』

かのやうに思はれるのだつた。

彼女は肉身の親たちを失つて、清水家をたよるやうになつてから、これといふ苦惱を経験したことはなかつた。靜吉は勿論、同性の節子も夏子も、いつもいい友人でもあり、慰さめ手でもあつた。が、それにも拘らず、寄食人以外のものにはわからない、言ふに言へぬ寂莫な、遣る瀬ない氣持を一日も忘れることは出来なかつた。

彼女は、事實、何度か、節子にも夏子にも知られぬ場所、今夜のやうな青い月を仰いで哭いたこともあつたのだ。

では、凜太郎の言ふ通りだとすれば、月が今夜、この魅惑的な青年を、自分のために送つてくれたのだらうか？

『人間は、男にせよ、女にせよ、みんな辛い悲しい運命を背負つてゐるのですよ。だからわれわれは、ときどき心の中をだれの前でか打ち明けねばならないのです。そして慰さめ合ふことだけが、われわれに明日の希望を持たせるのです。』

涼子はその言葉を聴くと、凜太郎とこんなに親しく語り合つた今夜は、彼女のために記念すべき日で、明日からは今日までの淋しさが拭ひ去られてしまふに相違ないやうな氣がされた。

しかし、月はますます青み渡りながら、稍々傾むきかけて行つた。

もう十二時にも近いのであらう。娯樂室のピアノのすさびも消え、部屋部屋の話しごゑも靜ま



つてしまった。

涼子は、いよいよ露臺の椅子を離れようとしたが、その折も折だ。ドアが軽く叩かれた。

凧太郎は椅子から立ち上つて、

『どなた？』

と、訊ねた。

『わたくし——夏子ですの。』

『おお、夏子さん？ どうぞおはひり下さい。』

その言葉と一緒に、凧太郎はドアの方へ行つて、扉をあけると、少し腰を屈めるやうにして、妙齡の訪問者を導き入れた。

夏子の不意の訪問は、涼子を少なからず動揺させたやうに見えた。このやうな時刻まで、この部屋に居残つてゐたことが、何となく後めたく思はれたのだ。

——あの方、屹度私を見つけないらしたのだわ！ どうしませう？

涼子は、夏子と凧太郎との、昨夜の海邊の祕密について何も知らなかつた。

『あなたは、今夜、病院の方へお泊りだと思つてゐましたが——』

夏子は白の羅衣で身を包んでゐたが、幾分肥り肉の、ふくらかな軀つきにそれがよく似合つて、裸はな腕をたつた一ツの腕輪が微かにきらめきながら飾つてゐた。すぐれて美しく見えたにもかゝらず、どういふものか、いつもの朗らかな微笑は、紅い唇にうかんでゐるなかつた。

夏子は、凧太郎の方へは、

『ええ、その積りでしたけれど——』

と、答へただけで、ひどく光りのある目でまっすぐに涼子を見てゐた。

『兄が、ぐつすり眠つてばかりゐるものですから、別に用もなささうなので歸つて來たのよ。すると、あなたが部屋にゐないでせう——方々、庭の方まで探しましたわ。』

涼子は責められたもののやうに、目を反して、低く答へた。

『私、あまり長くお邪魔してはと思つて、今、おいとましようとしてゐたところなんですのよ。』

『今夜はネ。』

と、凧太郎が説明した。

『私が涼子さんをお誘ひして、眞木誠氏の獨唱を聴きに舞踏室へ出かけたのです。そのあとで、無理に無駄ばなしの相手になつて頂いてゐたわけです。夏子さん、あなたも露臺へいらつしやい——月がよく見えますよ。』

夏子は他人行儀に小腰をかがめて見せただけだつた。



『ええ、ありがと。でも、もう大分遅うございますから——』

涼子は立ち場を失つたやうに、明らかに羞ぢしめられて、椅子を離れたままモチモチしてゐた。夏子の、責めるやうな、促がすやうな目つきが、なほ彼女の上に据ゑられてゐた。突然、凛太郎は明るく笑つた。

『あなた方は、どんな美しくいい晩でも、時間が来れば、おやすみになることにしてゐるのですか——現代では全く珍らしい德行ですな。ハ、ハ、ハ。』

その笑ひに、夏子は屈辱を感じたやうに、眉を聳やかした。

『真夜中が来かかれば、私達若い娘は、めいめいの寢部屋にはひるのが、そんなに笑ふべき事なのでせうか？』

『いいえ、どういたしまして——』

と、如月凛太郎はまた笑つた。

『御婦人諸君が、常識的に自分をお慎しみになることほど、見た目にも上品なものはありませんよ。只、僕たちのやうな浮浪の徒には、さうした方々が、まるで天上の聖女のやうに思はれてならないだけなのです。聖女と、卑俗なヴァガボンド——そのへだたりや霄壤ですからね。』  
そして、さも縁なき衆生に對する僧侶でもあるやうに、両手を擦合せるやうにするのだつた。何とも言へず、冷たい、悪びない態度に、夏子はもう眞夜を見せられてゐるわけがなくなつた。

らしかつた。事實彼女は今夜、思ひがけなく涼子のすがたを凛太郎の部屋に見出して、言ひ難い嫉みに魂を刺されてゐたのだつた——昨夜の、あの海邊の、密語には、お互の心の誓ひが含まれてゐなかつたのだらうか——

それなのに、その時の囁やきの相手が、今夜は月の露臺で、今一人の、うなだれる萩の花のやうな美女と、たつた二人で物語つてゐたのだ——夏子は、昨夜すごした時が、たとへしもなく楽しく夢ましかつただけに、今夜の發見が苦しく怖ろしくさへ感じられるのだつた。

けれども、凛太郎から、露骨に嘲けりを見せられて、彼女の氣強さは弱味を覺えた。彼はほんたうに、自分を輕蔑してしまつたのではなからうか？ 旅人は、旅人らしく、冷たい笑ひをのこして、自分に背後を見せて立ち去つてしまふのではなからうか？

『私、そんな意味で言つたのではありませんのよ——』

一度氣弱になつた彼女は、思ひを鍾めた目つきで、今は恨めしげに彼をみつめるのだつた。

『私は——』

と、何か言ひ添へたげに、そのまま口を噤んだが、それは、

私、氣にかかつてなりませんの？ あなたは涼子さんと、どんなお話をしていらしつたの？ それで詰らないことを言つてしまつたのよ。  
と、歎願してゐるもののやうに思はれた。



凛太郎は意地悪く微笑しつづけてゐた。

『僕は實に馬鹿げた自由好きな氣儘な奴でしてネ。こんな美しい晩には、あり來りの習慣や道徳なんぞに拘はつてゐられなくなるのですよ。夜が更けたからと言つて、寝るどころか、あべこべに月明の遠乗をしたらどんなに楽しいかとさへ考へてゐるのです。夏子さんが、ホテルに歸つていらしたと知れば遠乗りをお誘ひしに伺つたかも知れませんでした。が、今後は慎しませうね——僕は、大分長く家庭生活といふものに慣れないので、今後あなた方に叱られる種を蒔くかも知れませんが許して下さい。』

立ち場を失つた涼子は、夏子の目を怖れるやうに床をみつめつづけてゐた。床には、月光が、露臺の鉢植棕櫚竹の影を黒く落してゐた。彼女は凛太郎の前で、自分が夏子を怖れるやうな態度を見せずにはゐられないことが口惜しかつた。彼女が、夏子をあまりに壓迫的な人だと感じたのはこれがはじめてだつた。

—私は何だつて夏子さんを怖がらなければならぬのでせう？ 何だつて、この人の監督を受けなければならぬのでせう？ 寄食人だからだらうか？ 寄食人といふものは、朝から晩まで、心の自由さへ、家の娘に奪はれてゐなければならぬのだらうか？

これまで、ハッキリと意識しなかつた、夏子と自分との交渉が、モヤモヤと胸苦しい形で思ひ出されて來るのだつた。そしてそのどれもが、儼然かな孔雀の前になだれる、卑屈な鶴のやうな自分のやうに描かれるのだつた。彼女は一種の反抗心をすら抱いて來たが、さすがに眞直に夏子を見つめることは出來なかつた。

—それにしても、涼子のやうに柔しい娘が、親しい夏子に、今夜に限つて、なぜこんな氣持を抱かなければならなかつたのか？ 彼女にはその原因を考へる餘裕はなかつたが、他人になら、誰れにでも、それが、單に凛太郎との交際に小さな石を投じられたことから、生じたことは、充分に觀取されるであらう。

凛太郎は、もうとうに、この空氣を見てとつてしまつて、心に呟やいてゐた。

—涼子は憤つてゐる——東縛された娘が、東縛の綱を噛み切らうとしはじめてゐる。僕の所爲だらうか？ 僕の所爲にしたつて、それは決して悪いことではない。人間は、みんな自分自分の自由を主張しなければいけないものなんだ。そして夏子は嫉妬してゐる。嫉妬は、彼女を僕から遠ざけるどころか、ますます接近させるにきまつてゐる。僕の生活喜劇——海邊の戀といふ奴は、ひどく波瀾を加へて來るかも知れないぞ。

部屋の中に、氣まづい渦を捲き起した夏子は、今やわが手で、どうにかしてその渦を鎮めようとしてゐた。彼女としては、一生懸命な謙遜で、凛太郎の機嫌を取りもどさうとして言つた。

『私が申し上げたこと、氣にかけずに下さいませね。病院の中が鬱陶しかつたので、氣がくしやくしやしてゐたのですわ。私だつて月の美しくさ位わかりましてよ。』



『ハ、ハ、ハ。』

と、凜太郎も、急に気軽に笑つて見せた。

『僕は氣にかけなぞ少しもしてはるませんよ。只、何となく濟まなくなつてゐたのです。お交際してはならないあなた方の社會へ、無理に闖入して來た、ならず者のやうに自分が思はれて來たので——』

『私、おいとましますわ。おやすみなさいませ。』

その時、涼子が、凜太郎を見上げて言つた。そして、もうドアの方へ歩き出してしまつた。

夏子はもつとこの部屋にとどまつてゐたかつたに相違ない——が、涼子が出て行く以上は、凜太郎と二人で残ることは出来なかつた。

『私も——では、また明日。』

夏子は、寧ろ哀しげに凜太郎を見上げて、膝を屈めた。

凜太郎は虚心に答へた。

『明日、僕は箱根の方へ行つて見ようかと思つてゐるのです。』

『まあ！ お供したいわね。』

『しかし、お兄さんの許しを受けなければならんでせう。』

『では、お誘ひだけはして見ませうか。』

『どうぞ——出来るだけお供したうございますから。あの分では兄ももう快ささうですし——』

これで、すべてが緩和されたやうであつた。二人の娘達は彼の部屋を出て行つてしまつた。

凜太郎は、ドアを閉すと、部屋の眞ん中に突ツ立つて、腕を組んで、妙にネトリとした微笑に下唇を引きまげてゐた。

——女といふものは妙なものさ。僕の本體がどんなものだか、見極めもせぬうちに、僕に全身を凭せかけて來るのだ。いつか、巴リのどの女だつたかが言つたなあ——あなたには、不思議な動物磁力があるツて——

彼はそんな風に呟やいたが、それは彼の自信が、多少とも見當を失つてゐたかも知れない。どんなに賢こげに見えても、人生を少なく生きた女性達は、みんな何かしら激しい經驗に渴ゑてるのだ。そして、いかに小さい契機でも、彼女の白い指が掴むことが出来る限り、ぢきに未知の冒険世界へ突進しようとおがきはじめるのである。

## 處女の閨

二人の娘は、廊下では何も語り合はずに自分達の部屋に歸つた。



涼子の細い指がスウキツチにかかると、パツと明るい光が漲ぎつて、二人の目に妙なまばゆさをあたへた。

涼子はまだ一度も夏子の顔を仰がなかつた。彼女はそのまま、次の寢室にはひつて行かうとした。

夏子は、その後すがたを、ちよいと眺めて、自分もその後を追つた。

寢室は、小ぢんまりして、眞白で、衣紋竹にかけられた、水いろや、緋色のものだけが、その雪白の中で異常な艶めかしさを撒き散らしてゐた。香ひは言ふに言はず複雑で、強いまた弱い、さまざまな香料の香が、ほのかな肌の香りとまじり合つて流れてゐた。

二ツの白いベッドの間の置卓には、透きとほつた水瓶や、グラス、蜜菓入の美しい函、赤や緑の表紙の小説本などが置かれた。

涼子は、自分のベッドの裾の方で、つまましくドレスを脱ぎはじめた。そのサヤサヤといふかすかな響きを聞きながら、夏子は、カーテンを引き退け、玻璃窓をあけた。

涼しい風が、一度にはひつて来て、薄白い丸蚊帳を、波のやうに軽くうごかした。

『ほんたうにいい月夜ばかりつづくことね。』  
と、夏子が呟やいて、

『これでは、あしたも大丈夫お天気ね。湖畔は楽しいに相違ないわ。』

涼子は、ほつそりした體から、もう水いろのドレスをむらせてゐた。

『あなたもここへ来て、涼まないこと？』

涼子には、夏子のその言葉は異様にひびいたに相違ない。彼女は今夜の小さな出来事が自尊心の高い夏子を、充分に傷けて、今後二人の友情に、たしかにある險しい障害を残さずにはゐないと信じ込んでしまつてゐたのだ。

ところが、今、夏子は、いつもの親しさを少しも失はない口調で言ひかけたのだつた。

彼女は、柔しい氣持から、濟まなさを感じて、なつかしく答へた。

『ええ、今、伺ひますわ。』

寢巻浴衣になつた涼子は、夏子の側に行つて、窓枠に手をかけて月を見た。

夏子は、緋いスリッパに穿き更へた足を、ベッドから垂らしてブランブランさせてゐた。

『あしたは屹度愉しいことよ。湖で、ボートへ乗つて、うんとお腹を減らして食べるのが楽しみよ。』

女學生の快活さで、彼女は言つた。

けれども、月を見る涼子の横顔を、ぢつとみつめるその瞳には、一種の鋭どさのやうなものが含められてゐた。

突然、彼女は訊ねた。



『涼子さん、あなた、あの方、どう思ふ？』

涼子は、不意を打たれて驚いたやうに振り返へつた。

『あの方ツて？』

と、かすかに彼女が訊き返へした。

『まあ！』

と、夏子は笑つた——そのわらひには、わざとらしさのやうなものを、隠すことが出来なかつた。

『わからなくつて？ あの方ツて、如月さんのことよ！』

そして、もう一度、くり返へした。

『あの方を、どう思ふ？』

『どう思ふツて、別に——』

當惑したやうに涼子は答へた。

恐らく、月光の下ででなければ——ベッド・ランプが明るかつたならば、彼女の顔はその時紅く染まつたに相違ないのだつた。

『私には、如月さんといふ方は、まるで見當がつかないのよ。非凡な方か、それとも凡人か——善人か、まさか、悪人ではないにきまつてゐるけど——』

夏子は、さも親しげに、涼子の白い指を握つて、愛撫するやうにするのだつた。

涼子はその手を引き退けたいやうな衝動を感じたが、それが出来なかつた。

『あなたは、今夜、大變楽しさうだつたことよ——あのお部屋で——』

と、夏子は軽く言つて、戯れかけるやうに——

『まるで、月の下で戀を囁やいてゐるお二人のやうに見えたわ。何だか、邪魔をしてしまつたやうで——』

『そんなこと！』

と、涼子が目を反した。

笑はうとして、笑へないやうに見えた。

『そして、あなたは、大變おこつたやうに私を御覽になつたわ。』

と、夏子がつけ足した。

『誤解ですことよ。』

と、涼子は言ひわけした。

『私、随分眞面目なお話を伺つてゐたのですわ。』

『まあ！ 珍らしいことね。あの方の口から、眞面目なお話が出るなんて——』  
涼子は夏子を眺めた。



『いいえ、私、あの方を侮蔑んで言ったのではないことよ。あの方、どなたの前でも、何か皮肉におつしやるか、それとも——』

と、言ひかけて、夏子はかすかに身を震はせた。昨夜の海邊の思ひでが胸を刺したのだつた。しかし、彼女はつづけた——

『それとも、戀を囁やくかするやうに思はれるのかわ。』

『私、あの方は大變親切な方だと思つてゐますわ。だけど——』  
涼子は言ひ漱んだ。

『だけど、どうなの？』

『だけど、普通の男性とは變つたところがあるにはありますわ。』

『どんな點が——』

『お聲にも、お目にも、人を魅きつけるやうなものが——』

『ホ、ホ、ホ、ホ！』

と、夏子は、相手がびつくりした程の聲で笑つた。

『まあ、やつぱしあなたは戀しはじめたのかわ！』

『どうしてでせう！ 私そんな！』

涼子は、事實、真太郎の態度にどのやうに魅了されてゐたにもせよ、ハッキリと彼を戀するや

うな氣持にはなつてゐなかつた。が、夏子からさう言はれると、ハツとした。

——あんまり早すぎるわ！ でも、私の氣持の引きつけられ方は、普通だとは言はれないかも知れない。

『戀なんて、屹度ひどく急に來るものなのよ！』

と、夏子が言つた。

そして、彼女は、何か考へ込むやうに黙つた。

『だつて、昨日今日お目にかかつたばかりで、どうして戀の氣持なんか——』

と、涼子はつぶやいた。

『そんなこと、いくらだつてあるのよ！』

と、夏子は急に激しく言つて、

『戀をしたつて、構はないぢやないの？ 戀する自由なんか、だれにだつてあるわ！』

彼女は、今迄握つてゐた涼子の指先きを放して、垂れかかる斷髪を、兩手でうしろへ拂ひのけるやうにして、

『戀つてものは、時にひどく早く來るものなのよ。そして、一生を決定してしまふか知れないのかわ。だから、どんな女の人でも、戀をすると氣違ひのやうに強くなつて、あらゆる障害をぶち碎かうとするのよ。』



涼子は、妙にズツとするやうであつた。

——私が、あの方と戀に落ちてしまつたら！

彼女は、さう心に言ひながら、如月凛太郎その人が、どんな氣持で自分を見てゐるであらうかを思ふと、不安でならなくなつた。

——あの方は、私を、屹度、小ちやい、つまらない赤んぼだと思つていらつしやるに相違ないわ。それツきりだわ。

涼子は哀しかつた。

夏子は心の中で、嘲けり怒つてゐた。

——私と、ああいふ囁やきを交した人を、涼子さんが思ふなんて！ この人に、昨夜のことをすつかり言つて上げようか知ら——もう、及ばぬ戀はおあきらめなさいって！ いいえ、そんな必要はありはしないわ。私はこの人を競争者と思ふほど自分を小さくはしないつもりよ。

夏子は、自分ならば、どんな複雑な經驗のある凛太郎をも、勵まし、慰さめ、満足させることが出来ると思つようと努力した。そして、涼子が、いかに美しく、しとやかであらうとも凛太郎のやうな性格の前には、恐らく魅力を示さぬであらうと思ひ込まうとするのであつた。彼女は、紅い口で、あくびをした。そして白い、羅衣仕立の洋服を脱ぎはじめた。

『まあ！』

『ホ、ホ、ホ、ホ！』

窓は閉ぢられカーテンは引かれた。

そして、二人の處女は、めいめいのベッドに横たはつて、醒めてゐるのか、眠つたのか、もう口を利き合はうとはしないのであつた。

### 昔の譬諺

箱根の自動車道は、斷崖の工合、曲折の調子もあるだらうが、何となく右肩上りの姿勢で、上つてゆくやうに作られてゐた。それで凛太郎を中に挟んで右に夏子、左に涼子が乗つた自動車が湖畔をさして身を揺つてゆく間、絶えずある感情の刺戟を感じつづけねばならぬ夏子だつた。つまり、自動車が、激しく動揺するたびに、自分の軀が凛太郎を壓迫し、そして、それと同じに、彼の全身が、涼子の方へ傾くことをどうすることも出来なかつたのだ。

彼女はさうしたことに神経を尖らせねばならぬ自分を憤ろしく感じた。けれども、自尊心は陰鬱な不快感に押し伏せられてしまふのだつた。

——私、やつぱし眞中に乗るとよかつたのだわ。——どうしてあの時、如月さんの中へ入れて



しまつたのだらう。

しかし、凛太郎は、今日は、いつぞやの病院夜の自動車のなかとは違つてゐた。彼の右肘は折々、意識的に彼女の左の腕や、ふくらかな小腕に觸れた。時々、右の手先が、肩や、股のあたりをさへ軽くさまよつた。

——なぜ、私達は涼子さんを誘つて來たのだらう？ 二人ツ切りなら——

夏子は、磯濱の、あの大きな荒くれた岩の上での、接觸の追憶に、心がときめくのだつたが、その刹那、涼子の方へ傾いてゆく凛太郎の上半身を見ると、激しい憤怒が湧き上つて來た。

——なぜ早くからだを眞直にしないのだらう！ 私なんか、少し位車が揺れても、そんなにグラグラなぞしやしないわ。涼子さんにしても、あんなに凭りかからせて、うれしさうに紅くなつて！

夏子はこの楽しいげに見える遠乗が、一刻も早く終りになることを望まざるを得ないのだつた。凛太郎は、さうした中でもなかなか饒舌だつた。彼は日本中は勿論、東西の半球を歩きまはらないところは稀ないやうであつた。

コモの湖畔の夕ぐれを語るかと思ふと、ヨルダンの谿谷の思ひでを話した。砂漠の落日の悲しさ、高原の夜の涼しさを物語つた。

夏子は、現在の肉體的な不快な氣持を乗り越えさうとして、突然たづねた。

『あなたは何だつてそんなに世界中を歩いていらしたの？』

その語韻には、涼子がびつくりしたほどの、馴れ馴れしさが含められてゐた——恐らく、彼女を驚かせ、何事かを氣づかせるための、夏子の作戦であつたかも知れない。

が、凛太郎は笑つた。

『古風と言ふと、幸福を探して歩いたのでせうな。それ、ホセ・マリア・エレデリヤか誰れかが歌つてゐるぢやありませんか——』

と、言つて、半ば歌ふやうに、錆びた美しい聲で、

x

山のあなたに

なほ遠く

幸、栖むと人のいふ

われ人、ともに

求めゆきて

涙さしぐみかへり來ぬ。

山のあなたに

なほ遠く



幸、栖むと人のいふ

X

と、いふ小曲を口ずさむのであった。

涼子は、それを聴くと、ため息をした。

しかし、夏子は反抗的に、

『まあ、ずる分感傷的でおいでですか？』

『あなたは、どう思はれたのですか？』

と、凛太郎が問ひ返へした。

『私は、戀愛巡禮でもなすつてゐたのかと思つてゐましたのよ。』

『ハ、ハ、ハ、大きにさうかも知れませんか。』

と、凛太郎は笑つてしまつただけだったが、しかし、彼のさうした旅行には、いつも何かもつ

ともつと激しい慾望を伴つてゐないことはなかつたのだ。

凛太郎は、酒や、賭博や、戀愛三昧にも耽つて、一時はそのために身心を投げ出すかとも思は

れたが、その時機が過ぎると、醜然として、全く種類を異にした事業に身をゆだねた。

戀や酒に沈溺した彼の覺醒を待つものは何であつたか？ ある時は、密輸出入者との共同作業

であつた。ある時は、叛亂や官憲の密使、密偵であつた。彼は、祖國日本の不利なるほどの

にくみしたことはなかつたが、アメリカでは、英吉利人のために働らいたこともあるし、印度の

奥地に叛徒の巢窟をたづねて、その内情を統治者に裏切つたこともあつた。

生死の危険が伴へば伴ふほど、収入も多く、その後の幾月を放縱に送る事が出来るのだつた。

さうした生活から來た、一種暗い、その癖ギラギラした底光りを持つてゐる性格が、多分世間

の女性を極端に彼の方へ引きつけるのであつたであらう。

『随分、いろいろな人達にお逢ひでしたらうね？』

と、夏子がたづねた。

『ええ、山賊の親分にも、土人の王にも——』

『山賊！ 土人の王！』

と、夏子が、いくらか、痴かしい憂鬱から解きほぐされて叫んだ。

『まあ、何てすばらしいんでせう！』

ロマンチックな空想は、娘たちの魂の中で膨れ上つた。二人の娘の目は、左右から、みはら

れたままで凛太郎に注がれた。

『いいえ、ちつとも素晴らしくはありませんよ——あいつ等は、みんな無智で、自我主義で、い

やな連中です。ただ、まあ、物珍らしい生活ぶりをしてゐるだけです。』

山賊には伊太利で、王には土耳其で逢つたのであつた。



凜太郎の唇からは、黒い森林の奥での殺人や、小宮廷の密室での陰謀會議なぞの情景が、冷たい口調で語られるのであつた。娘たちが興奮するにつれて、あべこべに彼は冷静になつて行つた。

『さうしたとき、あなたはどんな役割を持ちなさるの？』

と夏子が訊いた。

『まさか、殺人や謀反の手傳はしませんでしたよ。』

と、凜太郎は軽く一笑して、

『僕は、いろんな経験を積みたがる悪癖を持つてゐるのです。そして、いつか、一度、自分に適當する事業を持つことが出来るだらうと考へてゐるのです——それは不可能かも知れませんが——』

夏子は、ちつと、凜太郎の横顔を見た。

——女性についても、屹度同じお考へなんだわね？ ドン・ファンの悪業も、たつた一人の女を求めたためだつたと言はれる通りに——

自動車は、午後一時の、まばゆい日光に照らされてゐる緑の溪谷に沿ひながら、上へ上へと走つてゐた。深い木立の間にはひると急に黄昏と秋とが來たやうであつた。

たうとうみんなは、白い、夢のやうな湖の光を緑林のかなたに見出した。

『まあ、いつみても美くしいこと！』

と、涼子が、ホツとしたやうに呟やいて、ぴたりと、押しつけてゐる凜太郎の肘から身を離した。彼女も亦、夏子と大同小異の、ある焦燥を感じてゐたにきまつてゐた。

昔の諺の通り、三人旅は、つい五丁を歩ゆむ間にも、何かしら複雑なものを、その人々の心にのこさずにはゐないものなのである。

## 湖畔の夜

箱根神社の高い石段を上つたり下りたり、湖畔の青草の間を分けてあるいたりする間に、さすがに二人の娘の頬には、少女らしい輝やきが添はつてゐた。咽喉が乾き切つて、三人は、白い建築のホテルにはひつて行つた。

まだ、夏の日が高かつたが、涼しいヴェランダから眺め下す湖面には、どことなく夕ぐれらしいほの紅い光りが漂ひはじめてゐた。夏子はボオトに乗りたがつてゐたが、さすがに、歩きすぎたといふ風で、風呂から上つて、浴衣に着更へると、藤椅子から立つのが億劫らしく見えた。

三人は食事までの時間を、冷たい飲みものを採りながら骨牌などあそんだ。涼子は、勝負そのも



のよりも、凜太郎の目や手の動き、言葉のはしばしに、妙に氣を取られてゐた。ことさら、夏子が、さも馴れ馴れしく、彼に物を言ひかけたり、首をかしげて見せたりするのを見ると、言ひ表はし難い焦ら立たしさを感ずるのだつた。

——私、どうしてちつとも楽しくないのでせう！ どうしてお二人と一緒に笑つたり話したり出来ないものでせう！

彼女は自分に言つて見た。

——私は、夏子さんの言ふ通り、昨日今日知つたばかりのこの方に、ほんたうに戀をしてしまつたのか知ら！

たしかに、彼女は、戀に落ちつつあるのであつた。

彼女は一人で負けつづけた。

勝負事は、時をいち早く流れさせる。三人は夕映が、いつか湖面を染めつくしてゐるのを見出した。

ボオイは、食卓を、ヴェランダに近くしつらへた。そして冷却器に入れた、シヤムパンや冷たいカクテルを運んで來た。

『君、このごろの月夜は、湖がさぞいいだらうね？』

『はい。まあ、私も、毎夏必ず、このホテルにまゐるのでございますが、この兩三日のやうに美しくい月は見たことがございません。更ければ更けるほど冴えてまゐりますので——どうぞ、ごゆつくり月見をあそばして——』

このボオイの言葉が、夏子や涼子に、一種惱ましい暗示をあたへたのであつた。彼女等もどんなにか、更けて冴え切つた月光の湖を見たいであらう——が、その時刻には、とうに熱海へ歸つてゐなければ——

——彼女達は、重傷の靜吉を病院に残してゐる上、二人とも嚴密に自分を護らねばならない處女であつた。

二人は、同じやうに陰氣になつて、赤く染まつた湖の方をみつめた。

凜太郎は、二人に甘いカクテルをすすめた。

『これならいくら呑んでも大丈夫ですよ。殆んど無酒精だから——』

どこか、遠い部屋から、チャイコフスキの甘美なメロデーが響いて來た。夏子はカクテルのグラスを美しく指で摘んで、紅い唇へ持つて行つた。

凜太郎は自分で調合したウイスキー・ソーダを傾けながら、全く一青年のやうに上機嫌で、今迄弄んでゐた骨牌を取り上げて、手品師そのけの藝當をやつて見せた。ことに、詐欺賭博師が常に行ふ、イカサマの札の撒き方、札の隠し方などを示したときには、二人の娘は人間離れのし



た、手先きの器用さに驚歎してしまふのだつた。

『ネ、これがボオカアの時なら、このポイントをいつもかうして自分の分にと取つて置くのです。どんな相手が出て来ても、十中八九勝つし、また、必らず負けはしない。それから二・十・ジャツクの場合なら、涼子さん、たとへば、君を勝たせようとするれば、かういふ切り札を、こんな工合に君の手に撒くのですね、——ブリジの時なら——』

等、等。

彼のカードのあつかひ方は、神業のやうにさへ思はれた。

このやうな事は、イカサマ賭博の常習者であれば、誰れしも出来ることなので、紳士としてそれを知らぬことは、却つて恥ぢねばならぬのだが、二人の娘は、凛太郎の技能の一ツであるゆゑに心から感服せざるを得ないのだ。

——この方は、出来ないことといつたら、ひとつもありはしないのだ！ テーブルをかこんでの事ばかりではない——あの、崖下へ走り下りて、お兄さんを擔ぎ上げたときの素晴らしい腕力と言つたら！

彼はカードを捨てると、湖を一瞥しながら、ヨットの操帆法に特別の知識があることを示したし、山登りにも澤山の経験を持つてゐることを説き明した。

ぬ諧調を示したときには、深い歎息を以つて最も高級な詩や、繪畫や、音楽や、その他の藝術に關する鑑賞力を示すのを忘れなかつた。

凛太郎の話題は豊富で、しかも、話法は自然だつたから、わざと自分を見せびらかすやうな感じはあたへなかつたし、ことさら、折々、自分を嘔ふやうに、

『つまり、僕のやうな男は、何ごとにも一すちに打ち込む力がないのですね——いはば廢兵見たやうなものです——若い人生の廢兵にすぎんのです。』

なぞと、いふのを聴くと、二人の娘は、もつともつと奥深い歎げきや祕密が、この青年の心に隠されてゐるやうな氣がして、どうにかしてさうした絶望的な氣持を拂拭してやり、いかにもこの人らしい、華々しい人生を送らせてやりたいやうな望みを、持たずには、ゐられなくなるのだつた。

が、時は遠慮なく経つて行つた。

夕ぐれが遅く来るだけ、夜が更けかけるのも早かつた。

ある瞬間、涼子は思はず腕時計を見た。

すると、その動作を、すかさず見て取つた凛太郎が——

『ねえ、僕は、少し無遠慮な、禮儀はづれの提議をいたしたいが——』

『何でせう？』



と、夏子が言った。

凛太郎は少し頭を下げるやうにして、

『僕は又夏子さんから叱られるかも知れない。しかし、やつぱし骨髄からの放浪者で、ひどく心を魅く土地や場所へ来ると、どうも元の古巣へなかなか歸れないやうな気がしてならないのです——つまり、僕は、今晚、たつた一晚だけでも、このホテルに泊つて、語り明かしたいのですが。こんな、美しい月を見ながら、あなた方のやうな方たちと、一夜をすごすやうな経験は、僕のやうな人間には、もう二度と味はへないに相違ないですから——』

夏子は凛太郎を、燃えるやうな目でみつめた。

涼子はうつむいた。

二人の胸を、最後の彼の言葉が、やさしくまた激しく震撼したのだ。

『しかし、多分、それは、お二人に取つて不可能なことなのでせうね！』彼の語調は銷沈した。

——どんなにどんなに、二人の少女は、彼の言葉に盲従したいであらう！ しかし、いかにその青年が兄や保護者の友人であるとしても、未婚の男性と、二人の處女が、ホテルに同宿しようなどといふことが——それは、恐らく、彼女等の一生に、黒々しい汚點となつて残るかも知れない行爲なのだ。

『駄目らしいな！』

と、淋しげに凛太郎は笑つた。

『人間は、最も強く望むことは、いつも叶へられぬものなのだ——それは、とうから抱いてゐる觀念なのだが、やつぱし僕は望む——人間は、結局、極めてあはれむべき、無力な生きものなのだ！』

彼は、ゆつくりと、ウイスキーのグラスを干すのだつた。

『しかし、一瞬間のあとは、どんな事が起るか、わからないことよ。』

と、夏子が、いく分自棄的に言つた。

『たとへば、今すぐにも、いつかのやうな大地震が来て、このまま三人とも湖水の底に沈んでしまふかも——』

事實、この附近の住家は、十年あまり前の大地震で、まとめて湖底に頽れ落ちてしまつたのだつた。

凛太郎は微笑して彼女をみつめた。彼は、一處女の燃えるやうな渴望の炎を、黒い大きな瞳の底に見出すのであつた。彼は涼子へ目をうつした。涼子は、うなだれつづけてゐたが、その白い美しい頸が、すべてを語つてゐた。

——私もそれを望むわ——この幸福な晩に死んでしまふことはどんなにいいでせう！ 私には死



にたい！

だしぬけに、夏子は言った。

『如月さん、シヤムバン頂戴 私、咽喉が干いてしかたがないのよ。』

凜太郎はうなづいて立ち上つて、隅のテーブルに載せてあつた冷却器から大きな黒い瓶を取り出して、ボーイは呼ばずに、自分で、ボンと栓を抜いた。

そして、器用な手つきで、めいめいのグラスに注いで、

『美しいあなたの方のために——』

と、干盃して坐つた。

夏子は、グツとグラスを干して、もう一つ注がせて、また飲んだ。

すると、見る見る彼女の豊かな頬の紅みが増すのだつた。いかに酒精分が少ないと言つても、カクテルを三四杯重ねたあとのシヤムバンは、飲酒に馴れぬ處女を、酔はせるには充分であつた。

熱い息をついて、彼女は、両手で頬を押へて見て笑つた。

『酔つて来たわ！ ホ、ホ、ホ！ 頬邊がまるで火のやうよ！ 涼子さん、あなたもおあがんな

さいよ——おすましてゐないで——ホ、ホ、ホ！』

た。彼女は酔ふことに依つて、日頃とち込められてゐる埒の中から、飛び出す勇氣を求めてゐるのだ！ そして、もう彼女は、薪木を負うて、完全に炎の方へ駆け込みはじめたのだ。

『涼子さん、あなたも飲むのよ！ きゆうツと！ まあ、あなた、何て卑怯なの！ ホ、ホ、ホ

ホ！』

『私、もう頭が痛いのよ。』

と、涼子は言ひわけした。

『さうお！ 私、生れてはじめて、こんなに、飲んで見たのよ。でも、まだ飲めるわ。もう一

盃——』

そして、それを唇にしなから、

『涼子さん、酔つてしまつたら介抱してね。いつか、私、あなたが流感で熱を出したとき、ずる分介抱して上げたでしょ。』

『いいえ、そんなに酔ひはしませんよ。大丈夫、それに熱海までの夜のドライブは、大ていな酔ひなんかさましてしまひます。』

と、凜太郎が言つた。

夏子は手を胸にあてた。

『いいえ、私、自動車になかなか乗れないかも知れない——こんなに鼓動が激しくなつて——』



「苦しくなつたら、窓際のソファに横になつてゐれば、ぢきになほりますよ。」  
凜太郎はさう言つて、目を湖面に走しらせて、

「僕はいろいろな世界の湖水を見ましたよ——この蘆の湖へも、何度か來てゐます、しかし、ボ  
オイの言ひぐさではないが、今夜のやうな美しい夜に逢つたことがない——それにいい音楽が無く  
とも、少しも物足りなくはありませんよ。なぜと言つて、あなた方のやうな純潔な二人の令嬢の  
聲は、どんな音楽よりも美しいから——」

「私は馬鹿よ。」  
と、今や明らかに酔つて來た夏子が言つた。

「私は、死んでしまひたいの！ 湖を見てゐると、あの銀の光りの中に飛び込んでしまひたい  
の！ 窓を閉めて、月が見えないやうにして頂戴。」

「夏子さん、苦しうですね——少し。」  
と、凜太郎は言つた。

そして、立ち上つて、彼女の肩に觸れて、のぞき込むやうにしながら、

「さあ、大きな椅子の方へ行きませう。少し横になるがいいです。冷たい水を一口飲んで——」  
彼は妹を介抱する兄のやうに、氷水のコップを彼女の口に當ててやつて、そしてかかへ

夏子はまるで小學生のやうに素直だつた。そして、涼子に、  
「涼子さん、熱海の宿へ、私が湖畔で少し気分が悪くなつたから休息してゆく——と、さう電話  
をかけて下さいね。それとも、あなたが一足先きにお歸りになるなら、お嫂さまへよろしく言つ  
て置いて頂戴。」

そして、夏子は、その答へをも待たず、ソファの上で目を閉ぢてしまふのだつた。  
凜太郎は、テーブルに戻つて來て、涼子に言つた。

「心配ありませんよ。ぢき、夏さんは醒めますから——なあに、歸ると、決心すれば、夜中  
も——」

そして、聲をいくらか低めて、

「眠るのが一ばんです。酔つたときは——少しお眠りになれば、ハッキリしてしまひます。」  
それから、小聲のまま、彼は自分がはじめて飲酒したときの苦しさを、面白をかくし話  
すのだつた。

「今では大たいの強烈な酒でも、自分を失ふほど酔へなくなつてしまひましたが、昔、十八九の  
時、先輩に連れられて料理屋へゆき、はじめて日本酒を口にしたときには、頭が痛んで、胸苦し  
くなつて、次の間に休んで、先輩連の放談高語を聞いてゐましたが、こんなものを呑んで平氣な  
奴は、鬼に相違ないと思ひましたよ。それが、どうです？ 今の僕は——朱にまじはればなぞと



言ひますが、経験は、人間をだんだん鍛へてゆくのですね——それは死ぬまでつづくのです。畢竟、最後に死の毒盃をわれわれは飲むでせう。』

彼もシヤムパンを傾けつづけた。

涼子はしかし、夏子の額に手を當てて見て、熟睡したらしいのを見届けると、自分がこの儘にしてゐるのが、妙な立ち場になつた。

夏子を出來るだけ早く起こして歸りをすすめるか、それとも自分一人歸へることにするか——それは、彼女に取つて死ぬほど辛いことだ。

が、自分が一人で歸へらうとしたら、凛太郎がどうするか、それを試しても見たいのだつた。自分一人を追ひ歸すやうなら決乎と諦めねばならぬ望みであるのだらう！

彼女は立ち上つて、青い衝立の彼方へ行つた。そしてワクワクする思ひで、浴衣を洋装に着更へようとしはじめた。

すると、おお、何といふ嬉しさ！ 凛太郎が、椅子をはなれて、こちらに近づく氣配がはつきりと感じられた。

『涼子さん。何をなすつていらつしやるの？』

『私、戻らうと思つて、着更へをしようとしてゐますの。』

凛太郎は、たうとう衝立のこちらへ來てしまつた。涼子は、解きかけた細い帯をおさへた。『いけません。三人は一緒に歸るのです。』

と、凛太郎は、怪しくきらめく目で、命令するやうに言つて微笑した。

## 震へる耳朶

如月凛太郎の、優しげな、しかし熱を含んだ言葉と瞳との呼びかけは、此の宿から一人で歸つてゆくことは、死ぬより辛い氣がしながら、しかし一夜を明かす覺悟もつかず、思ひ切つて出てゆかうとした涼子の決心を、たちまちぐら付かせてしまふのだつた。

『こんな良い晩、この湖畔を捨てて、君ひとり歸つて行かうとするの？ え？ 夏子さんと僕とだけ残して？』

さう言ひながら、しかも凛太郎の手先は、もう彼女の、細そりした肩にさへかかつてゐるのだ。

どうして、涼子に、その手を振り落すことが出来るだらう！ ——夏子さんと、僕とだけ残して——

さうした言葉は、あまつさへ錐のやうに鋭どく、小さい、柔しい、だが嫉妬といふものをさ



へ、育くみはじめた胸を刺さずにはゐなかつた。

彼女は、着更へかけた單衣の前を合せて、紅い胴締をくるくると捲きつけは捲きつけたが、われ知らず、その上半身は、後から抱き寄せるやうにしてゐる凧太郎の、力強い胸に凭れかからざるを得ないのだつた。

『でも、わたし——』

と、彼女は呟いた。

『いいえ、夏子さん一人残して行くのは、あの人のためにも、お自家の方々へ、良くない印象をあたへるかも知れません。君はもう暫くここにゐなければいけません。ね。駄駄をこねずに——一緒に来たものは、一緒に歸るのが禮儀でもありますよ。』

凧太郎は、心もち、手先きに力を強めた。そして、それは、肩から胸の方へと幾らか迂るのだつた。

涼子は呼吸も窒るやうであつた。生れてはじめての、ある官能的な刺戟に、全身は名状しがたい大波で浸され、齒といふ齒がガチガチと觸れ合つた。

『ね、まあ、お坐んなさい。』

凧太郎の手は、やさしく彼女を窓際の白い長椅子に導いた。渾身の筋が抜けてしまつたやうな涼子には、もう振り解くことは思ひも寄らない。引かれるまゝに、異性の膝に乗るやうに腰を下してしまつた。

『ごらんなさい。この窓からは、湖は見えないけれど、月の光で黒い山のすがたがハッキリと浮き上つて見えますよ。山の上の空は水のやうに輝やいてゐる——全く、一生のうちに、こんないい晩が何度経験出来るだらう！』

歎息が、凧太郎の唇から洩れるやうであつた。

彼女は彼から離れたかつた。全身が異様な熱に蒸し立てられて、月光も山色も眺める餘裕はなかつた。けれども、彼から引き離れるには、意志の力を奪はれすぎてゐた。

涼子も亦、心から叫ばずにはゐられない。

——ほんたうに、こんな晩が繰り返へせるかしら？　いいえ、こんな瞬間が——

彼女は孤獨と寂寞とに長らく生きて、素直な性格から、さうした境涯に激しい不満を抱いたり、不平を呟やいたりすることはしなかつたが、絶えず絶えず、心の底では、身も魂も寄せかけて手頼るべき何物かを——淋しさや哀しさを忘れつくさせてくれる何物かを求めてゐたのだつた。

そこへ、突如として現はれて来た凧太郎は、彼女に取つて、偶像だつた——輝やきに充ちたそれであるばかりではなく、熱情的な手を差し伸べて、あらゆる苦痛を、心身から拭ひ取つてくれる救ひ主でもあつた。



——わたしは、この方を離れることは出来ない。この方は、わたしの心の隅の隅まで知つて下さる、たつた一人の男性でいらつしやるわ！

涼子はこれまで、夏子や夏子の友達たちが、多くの男性の間に立ちまじつて、自由に快活に交際を求め合つてゆくのを見てゐながら、自分だけにはどうしてもその眞似も出来なかつた。どんな青年も、彼女の小さい胸に一ぱいに詰つた秘密な哀しみについては、了解してくれないやうにしか思はれなかつたのだ。そして、多くの青年たちも亦、つましく片蔭にかくれてゐるやうな彼女を、特別に問題にはしないのだつた。

緋い、豊かな夏花の叢群の側に、かすかに白く咲いた小さな薔薇——そのやうなのが彼女の存在だつた。

それが、今、急に、自分をジツと瞞める、熱く鋭い目に出逢つたのだ。

涼子は奇しい期待に全身をわななかせながら、何かしら、次に起つて来るであらう事を待ち設ける外はない——

『涼子さん、何も怖れることはありませんよ。若くつて美しい君は、あらゆる権利を持つてゐるので——愛さうと、愛されよう——』

凜太郎は、彼女の目に見入るやうにして囁きつづけた。

『——幸福は速いのです。月の光が傾いてゆくよりも——僕はそれを知つてゐる——僕はただか

ら、偽つたり隠したりする暇がないのだ。』

彼はしなやかな両手を伸べて、涼子を引き寄せるやうにした。

涼子はやつとのことで、顔を窓の方へ向けることが出来た——それゆゑ、凜太郎の唇は、彼女のそれに觸れずに、かすかに耳朶にさはつただけであつた。

が、その耳朶に、何と燃える烙印のやうな熱さが感じられたことよ！

『僕は君を愛してゐます——』

彼は烈しく囁やいた。

『許して下さい——僕は自分を抑へることが出来ないのです。』

——が、その時、涼子はハツとしたやうに後ろを振り返へつて、そして立ち上らうとした。

凜太郎も、衝立のかなたに、物の氣配を感じたのだつた。

——夏子が、目を醒ましたのだらうか？

『大丈夫ですよ——ぢつとしていらつしやい。』

凜太郎は、小聲で言つて、自分だけ立ち上つて、衝立の向側へ行つた。

涼子は、身を硬くして、白い両手で顔を蔽くしてゐた。



雌豹たち

凛太郎が、夏子に近づいたとき、窓際の籐のソファに、彼女は相變らず横になつてゐるのだつた。以前と別に變つたところもなく、眼瞼は物うげに閉されたままであつた。

では、二人の耳にかすかに響いたのは、あれは空耳であつたのだらうか？

窓から流れ込む涼しい風がカーテンをそよがしたのにすぎなかつたであらうか？

凛太郎は、音もなく、夏子の枕邊に近づいて、ちつと覗き込んだが、閉された眼瞼のひそみや、紅い、美しい口元の痙攣を、素早い目で認めると、心持ち眉をしかめるやうにして、冷たい微笑をうかべた。

彼はハッキリ見て取つてしまつたのだ。

——この人は、何もかも、見てしまつたか、聴いてしまつたに相違ない。

さうだ！ 凛太郎の炯眼は、いみじくも一切を悟つてしまつたのだつた——籐椅子に白く豊かな身を酔ひ仆れたやうに横たへてゐた夏子は、その實、それほどまでに自分を失つてゐたのではなかつた。彼女は普通の成りゆきでは、どうしても熱海に今夜中に歸らねばならない身なので、自分と他人とを偽るために、さもひどく酔つてしまつたやうな風をしただけだつたのだ。

その彼女が、どうして、衝立の彼方に消え去つた、涼子と凛太郎とを、そのまま黙過してしまふことが出来たらう！

彼女は、心の目と耳を、極端に働かせて、すべての模様を探り知つたのみではなく、たうとう堪へかねて、ソツと椅子を迂り下りて、涼子に接吻しようとする凛太郎の舉動をさへ見てしまつたのだ。

二人が、何か知ら物の氣配を感じたとき、本能的にあわてて長椅子に戻つたとき、凛太郎は早くも自分の側に佇んだのである。

——凛太郎は、眠りを装ふ夏子の表情に、何もかもを読み取つたが、しかし、唇に冷たい微笑をうかべたまま、獨りごとのやうに呟やいた。

『夏子さんは、よく眠つておいでだ。酔つたときは眠るが何よりだ——』

そして、それなり、クルリと後を見せて、元の涼子の方へ立ち去るのだつた。

夏子は、その瞬間、はじめは細目に、やがて、大きく目を睜いて、凛太郎の後姿を激しく瞋めた。

彼女は何か叫ばうとするやうにして、叫び得なかつた。手を差し伸べようとして、伸べ得なかつた。

夏子の紅い唇はぐつと引き歪められ、白い兩手は、亂れた斷髪を引き抜かうとするかのやう



に引ッ擱んだ。

——何といふ事だらう！ あの方は私を捨てて行つてしまふ！

夏子は、今夜ほど自分自身の無力を感じたことはなかつた。

彼女はこれまで、どんな世界へ出て——晩餐會や、舞踏會、バザアからピクニック——大凡男女が群れ集まるほどの席で、大ていの場合には我儘な妙齡の女王のやうに扱はれて來たのだつた。どんな戀人同志までが、彼女の前ではお互の愛情を見せることをさへ慎しむやうに見えた。彼女より優れた美や才能を持たない女性を戀人にしたのを恥ぢるやうに——また彼女ほどの容色や機智を持たない癖に愛人を持つたことを羞づるやうに——

そして夏子は、いつだつて、快活に、自由に、どのやうな男女とも付き合つて來たのだつた。退け目や、怯れを感じたことはないのだつた。

いつとはなしに、それゆゑ、彼女は、異性ととの社交に、どんな女性にも負け色を見せる自分ではないと信じてしまつてゐた。

それなのに、人もあらうに、寄食人の、羞にかみ家の涼子に、如月凛太郎を奪はれてしまはうとは！

たつたさつき、凛太郎が涼子の肩を抱いて、接吻を求めるときには、全身に怖ろしい嫉妬の苦痛を感じたものの、それを、微塵した男性の、假りのたはむれのやうに強ひて観察

しようとしたのだつた。そして凛太郎が、自分の側にソツと取つて返へしたのは、ツイ心にも無く犯した悪戯について詫びるために遣つて來たのだと思ひ做したのだつたが、その凛太郎は、今、さも、自分が眠つてゐるのをたしかめて、安心したといふやうに涼子の方へ戻つて行つてしまつたのである。

——では、あの月夜の濱の囁ききは、みんな嘘だつたのだらうか？ それとも如月さんといふ人は、どんな女性の魅惑にも抵抗しがたい、平凡な多情者にすぎないのだらうか？

彼女は、猛烈に頭を揮つて、そして、凛太郎といふ存在を蔑視してしまはうとした。けれども、衝立のむかうの囁ききは、荒々しく白い、膨れた乳房の裏奥を攪き亂すのであつた。

『夏子さんはよく眠つてゐますよ——美しくい、安らかな寝顔をして——』

凛太郎は、こちらにやつと聽えるほどの聲で言つてゐた。

『あの人は文字通り花のやうに艶やかですね。そして、お見さんとはまるで違つて、朗らかで明るい——』

この言葉が、夏子の感情に、どうして媚びずるにゐるだらう。彼女は鋭どい棘毛で魂を突き刺されながら、片手で限りなく甘たるい愛撫を受けるやうな氣がした。

凛太郎は、歎くやうにつけ足した。

『男性は、ああいふ女性には近づき難い。あの人の青春は、あまりに豊かに漲り溢れてゐるやう



に見えますからね——』

夏子は撫められて、髪をつかんでゐた両手を、白く豊かな胸に當てた。

——男といふものも妙ね——なぜ、美しくさや充ち張つたものを怖れるのでせう——男といふ男が、私には、令嬢の手に觸るのも怖がつて、小間使の腰に手を廻はすやうな人達のやうに思はれるわ。

夏子は、凛太郎の今夜の舉措を、小間使にからかふ浮氣男のそれと同一視しようとした——輕視しようとした。彼女の自尊心は、涼子と自分とを、ハッキリ對立させることに忍びないのだつた。

凛太郎はもう夏子の讚美をつづけなかつた。彼はごく僅かな言葉が、嫉妬に荒れ狂ふ處女の魂を、早くも緩和させることに成功したのを信じたし、また、これ以上に語りつづけたら、涼子をあまりに反省的にしてしまふかも知れなかつた。

けれども、涼子は、凛太郎が口で何と言つてゐるやうとも、それに耳を傾けて、かれこれと心を煩はすには、利那の激情に昂奮しすぎてゐた。

彼女は、再びソツと肩に置かれた凛太郎の手の重みに、あらゆる感覺がしびれてしまふやうな氣がした。そして、夏子が熟睡してゐると告げた凛太郎の言葉を信用してゐたので、われにもなく、口に出して、深い瞳の底を覗いてしまつた。

『わたし、このままどこへ行つてしまひたうござんすわ！ どこか遠いところへ——いいえ、このまま、死んでしまひたうございますわ！』

『死ななくともいいのですよ——君が行くなら、僕もどこまでも一緒に供しますよ！』

と、凛太郎は微笑して言つた。

『どこへか遠いところへ——』

と、涼子は呟きつづけた。

『私、つい今日までは、お月さまや、空や、はてもない野や山を見てゐると、そこにお母さまがいらしつて、涼子、こつちへおいでと招いてゐるやうな氣がしましたのよ。でも今夜は——』

彼女はたゆたつた。

『今夜は？』

と、凛太郎はますます微笑した。

『今夜は、私、お母さまが招いてゐるなどは感じられませんの——お母さまが招いても、そつちへ行くことは出来ないやうな氣がしますわ。』

『君は、幸福なの？』

さも戀に酔ふ青年のやうに凛太郎は囁やいた。

涼子は、かすかに答へた。



『ええ、幸福ですわ——』

その語韻には、あの人生の最初の歡びに浸つたことがあるものだけが想像し得る、甘さと掬かさと、溶け入るやうな忘我とが罩められてゐるのだつた。

けれども、その瞬間、今度こそ、確かに夏子が目を醒して、籐のソファに起き直つたに相違ない輓みが聴えた。

「またも、現實に呼び戻された涼子は、身を硬くして、凧太郎を押し退けるやうにした。」

凧太郎は立ち上つた。

衝立の彼方へ行つたとき、夏子は、籐椅子に起き直つて、ぢつと、傾く月にいよいよ澄み輝やく、黒と銀との湖面に見入るやうにしてゐた。

『目が醒めましたね！ やつと——』

と、凧太郎は、少しも怯れない調子で言ひかけた。

夏子は答へようともせず、湖に見入つたままだ。

『あなたが眠つてゐる間に、月は大分位置を變へましたよ——もうすっかり醒めましたか？』

夏子はまだ答へなかつた。身じろぎもしなかつた。

凧太郎は首を揮つて、含笑つた。

彼はさう言ふと、壁の洋服掛けにかかつてゐる上衣のかくしをさぐつて、青色の液に充たされた小瓶をもたらしした。そして、その液體を少しばかりコップに注いで、あとからなみなみと冷水を充した。

『さあ、召し上れ——氣分がよくなりますよ。』

肩に手をかけて、荒つぽくゆさぶられて、夏子はこちらを見ずに答へた。

『ありがたう——でも、なんにも——結構ですことよ。』

凧太郎はいよいよ荒つぽく、不遠慮にゆさぶつた。

その時、夏子が醒めたので、元のまま窓際に坐りつづけることが、氣が尤めて來たのか、涼子が、部屋を出てゆく足音がした。

『馬鹿だな——君は！』

突然、粗暴に言つて、凧太郎は笑ひ出した。

『君は何か氣にかけてゐるのですね——お馬鹿さん——』

彼は、夏子の耳朶を引ッ張つて、こちらを向かせた。

『お馬鹿さん——僕は流浪の旅びとなんだ——君と仲良くするためには、どんな人達とでも、君の周圍にゐる限り仲良くしなければ、今のところ危険なんだ——君といふものが、僕を認めててくれてゐるのに、何で——』



夏子の黒い、キラキラと煌く腫が、はじめて彼を見た。強い視線だったが、憤怒や反感は消えようとしてゐた。

『ねえ、僕は、第一君の兄さんにあんな取りあつかひを受けてゐるんですよ。いのちの親の僕に、あの人が見せる態度ですか——君も気がついてゐるでせう——四面楚歌では、やり切れない。君以外に、一人位同情者を拵へて置かなければ——大人しい素直なあの娘さんは、屹度僕たちの楯になつてくれますよ。大人しい女性の運命は——彼女等の義務はそこにあるのだ。あの人は、大丈夫犠牲になつて辛抱してくれる——』  
口早やに彼は言つて、

『さあ、水をおあがり——』

『毒、はひつてゐない？』

と、夏子が唇を歪めて毒々しく訊ねた。

『馬鹿むすめ！』

手荒く、コップは紅い唇に押しつけるやうにされた。

夏子は、ボツチャリした手で受け取つて、さうまさうに呑み干して、コップを突き戻した。

凛太郎は夏子の両手を掴んで、引き起すやうにして、

『さあ、この上の展望臺へ行つて見ませう——この出窓からつづいてゐるのだ。』  
グイグイと引ツ張られて、夏子は、スリッパを突ツかける暇もない位だつた。

彼女は導かれるままに、出窓へ出て、白い梯子を踏んで、屋上の小さな見晴しへ出た。

おお、何といふ清爽な眺めだらう！ 光りだらう！ 微風だらう！

『如月さん、あんた、すばらしい作家ねえ——私、物語のページを翻してゐるやうな気がしたわ。』

彼女は凭れかかつて、怨じた。

凛太郎は笑つた。

『もう物語は推移つたのだ。本文にはひつたのですよ。そして、どんなすばらしい小説だつて、こんなに美しい背景を持つたことはないでせう——』

夏子は熱ばんだ瞳で、頭を凛太郎の胸に凭せかけたまま、山や、水や、月を眺めた。そして、魂のどん底から、たぶらかされ、偽られ、溺れさせられることを甘んじるのだつた。

『涼子さんは、このまま死んでしまひたいと言つてゐたわね——私だつて——』

『いいえ、君は、死ななうことを、ほんたうに考へるには美しくすぎるし、賢しすぎますよ。今、僕は背景に就いて言つたが、君が立ちさへすれば、どんな背景もすばらしいものとなるのだ。君には一切を、君にふさはしく變化させる力があるのです。』

さう言はれると、夏子は、自分の美しくさといふものの、ほんたうの意義をしへられたやう



な気がして来るのだつた。彼女は、どんな着物を着ても似合はない事のない自分を、あらためて思ひ出すのだつた。またこの月の夜から、突然、春の花の下や、淋しい冬ざれの庭にわが身を置きかへて見て、そこに立つ自分の別種の美について映像を刹那に作つた。それからまた、曾つていつか試みた早乙女すがたの彼女さへもが、ひどく似合つて、満場の喝采を博したことを追憶するのだつた。

彼女は、凛太郎の言葉を、かりそめのお世辭や阿諛と受け取るには子供らしすぎてゐた——熱烈願望に燃えすぎてゐた。

『熱海よりか、湖畔の方がよつぽどいいわ。』

と、彼女がうつとりと呟やいた。

熱海といふ土地を思ひ出して、もう彼女は、そこへ歸らねばならぬ自分だなどは考へ度くもない——

『いつまでもいつまでも、今夜が明けなければいいと思ふわ。』

凛太郎は、その紅い唇を、激しい接吻で擦しつづすやうにした。

『不思議な力だ——運命だ。』

と、彼は吐息をするやうに、

『僕には君といふ人が、大きな同僚のやうな気がする——』

へ引き込まれてしまふやうだ。』

彼女は哀願するやうに、彼を見上げて、取りすがつて喘いだ。

もつともつと近く、もつともつと激しく彼に接近したい慾望が燃えるのだつた——かうしてゐても、まだ二人の間にはへだたりがありすぎるやうな気がするのだつた。どうしたら、そのへだたりを取り去ることが出来るか、彼女にはわからなかつたが、相手にそれを求め願ふのだつた。

しかし、階下の方で、人聲がしてゐた。

『今晚、お泊り下さるのでございますなら、お部屋を作りますが！』

ボオイが来て、いつか部屋に歸つてゐる涼子にたづねてゐるのだ。

凛太郎は、

『下りませう——』

と、夏子に言った。

芳烈な香氣をただよはす、新鮮な果實を味はふのに、彼はいそぎはしない。

夏子は遺瀨なげに、先きに立つて梯子を下りた。

涼子は湖面に臨む窓に向いて、ほッそりと立ち、ボオイは部屋の中を片づけてゐた。

『あんまり良い夜なので、ここから動けなくなつてしまつたよ。』



と、凛太郎は、ボオイに言った。

『僕に小さい寢室を一ツ——それからこのお二人に、涼しい部屋を取つて上げてくれ給へ。』  
『畏りました——恰度二つだけならルームが開いてをります。』

ボオイは去つた。

夏子は肱椅子に腰を下し、凛太郎は紙巻に火を点けたが、涼子は、かぼそく後すがたを見せてゐるばかりだつた。

月を観るために、わざと弱めた灯さへ、彼女にはまぶしすぎて振り向けぬやうであつた。

『涼子さん、少し疲れたやうですね？ こつちへお掛けなさい。』

凛太郎に言はれて、やつと涼子は振り返へつた。しかし、その瞳は、床に注がれたままであつた。

『僕も疲れましたよ——ゆつくり眠りませう——明日の朝の湖も涼しいに相違ありませんよ。』  
夏子は唇を噛んでゐた。彼女の物足らなさは、全身を床に打ちつけたいほどであつた。

しかし、凛太郎のやうな男性にすれば、かうした二人の女性を並べて見てゐるといふことは、どのやうな快樂に身を浸すよりも楽しいのだ。

猛獣使は、今、鞭をあげて一閃させただけなのだ——次の鞭の動きで、美しい、しかし怖ろしい斑の雌豹たちは、どのやうな演技を彼の前で見せるであらう？  
彼は、黙り込んで、うまさうに蔑を吸ひつづけた。

ボオイが来た。

『すぐおやすみになりますやうなら、御案内いたしませう。』

凛太郎は、紙巻を捨てて勢よく立ち上つた。

『さあ、寝ませう！ すっかり疲れちやつた。』

處女たちは、もつとかうしてゐたいと、引き止める術がなかつたのである。

## 美しくしき反噬

——凛太郎の遣り口は、古い言葉の、（あやなす）と、言つたやうなものに比べれば、そこにもつと悪い、言はば近代的なものが含まれてゐるのだつた。

けれども二人の娘たちは、めいめいの心持から、決して（あやなされ）てゐるとも思はなければ、欺かれてゐるとも考へなかつた。不思議な暗示と蠱惑とに魅いられてしまつた彼女等は、自分に分られたことだけが、眞實だと思ひ込むのだつた。これは不合理な話のやうだが、いつ、いかなる場合でも類似の情況が現はれるのを、われわれが胸に手を置くと、思ひ當ることが出来る。

そしてこの錯誤が、言ひ表はし難い紛糾を現實社會にもたらして来る。



さて、白いベッドが二ツ並んだ、ほの暗いヒヤリする部屋にはひつてから、夏子は無暗とい  
ら立つて来る氣持をどうすることも出来なかつた。

彼女は今夜、もつともつと凛太郎と語りたかつた。もつともつと接近したかつた。もつともつ  
と奇しい、もつともつと激しい世界を感ぜたかつた。

生殺しになつた蛇のやうに、彼女の胸の中でのた打ちまはる慾望が、だんだんに一切の自制を  
忘れさせてしまつた。涼子が見てゐなければ、両手で髪の毛を掻きむしりながら、大きな聲で何  
か叫び出したい位だつた。

夏子は、ほの青い光りで、隣りのベッドにつつましく腰を下して、スリッパの趾先をみつめて  
ゐる涼子を見つめた。

瞳は冷たく燃え、唇は引きねぢれて来るのだつた。

——この人が氣が利かないからだ——この人がこんな場所にあるのこつたからだ——折角一度歸  
りかけながら、いくら如月さんが引き止めたからと言つて——

涼子さへるなかつたら、どんなに思ひも寄らぬ歡びが自分を待つてゐたであらうと考へると、  
生れてはじめて、この親友の存在が、限りなく呪はしいものに思はれて來た。

彼女はうなだれた涼子を見下しつづけた——

——この人は、自分が、ほんたうに如月さんから頼りられてゐると思つてゐるのだわ——

て見てもわかりさうなものなのに——

『涼子さん、何を考へていらつしやるの？』

と、掠れた、尖りを帯びた調子で、彼女は言つた。

ハツとしたやうに、涼子は顔を上げた。

涼子の表情には、悲哀に似た、しかしひどく感情的なものが溢れてゐた。

彼女は、洞ろのやうな目で、夏子を見上げただけだつた。

その魂の抜けたやうな表情が、夏子のいら立たしさを煽り立てた。

——この人は、如月さんのことばかり考へて、ぼうとしてしまつてゐるんだわ——

腹立たしさと、呪はしさと、相手を蔑む氣持で一ぱいになつて、彼女は重ねて言つた。

『涼子さん、ひどくぼんやりしてゐるわね——全く、あんたは妙よ——をかしいわよ——』

涼子のまつ毛の長い目は、何か言ひわけしたげに見えたが、言葉が見つからないか、唇がか  
すかに動いて、そのままになつてしまつた。

夏子は侮蔑した。

——浅間しい人！ すっかり溺れてしまつてゐるよ——夢をさましてやらうかしら！

彼女はわが慾望が充たされなかつたのを、みんな涼子のためだと考へて、あらゆる悪罵をさへ  
浴びせかけたいのだつた。



が、彼女は、しばし黙つたあとで、思ひ出したやうに言った。  
『私、ね、湖畔へ來ると思ひ出す物語があるのよ——何だか、眠れさうもないから、話してあげませうか？』

『ええ、どうぞ——』

夏子は、憎々しげに涼子の横顔を一瞥して、白い天井の方へ目を投げるやうにした。

『昔、昔、讀んだはなしよ——中世紀の南ヨーロッパの話だわ。ある國にねえ、美しい湖の側に城館を持つた公女が栖んでゐたのよ。公女は、月が出れば月のやうに、花と並べば花のやうに、どんな美しくいものを側へ寄せても、それと同じ美しくさに見えるほどの美人なの、若くつて、才氣があつて、その公女を見ると、どんな男でも溜息を吐かずにはゐられないといふ風なの——』

涼子もだんだん引き込まれて來たやうであつた。彼女のまつ毛の長い目が、仰向けた夏子の、圓い、恰好のいい顎のあたりをみつめてゐた。

夏子はつづけた。

『公女の側には、仲の善いお朋友がゐました——この人も、同じ年ごろの、ゆづらないほど美しい娘だといふ評判でしたけれど、遠い國の、公女とは親戚に當る城主の子でした。城主が戦ひに亡びてしまつて、今では公女を手頼つて來てゐるのです。公女はほんたうにその娘を愛してゐ

たのよ——どんな喜びでも、必らずわけてやるやうにして——』  
夏子はますます仰向くやうにするのだつた——彼女の聲は、鋭どく、冷たく、落付いたものとなつてゆくのだつた。

『すると、ある日、突然、この城館に現れた一人の士があつたの——智勇兼備で、どんな女でも、その人の顔を見たら、心を動かさずにはゐられないといふやうな人でした。おきに、公女にその人は思ひを寄せ、公女も亦、その人の情にほだされました。ところが、困つたことには、その公女の女友達が、同じやうに、その士に戀したのよ——それも片戀ならいぢらしいけれど、士が、あるとき、公女と近づくすべに、その娘に、あり來りのお世辭を云つたのを眞にうけて——』

そして夏子は、あらゆる悔りを漲らして呟やいた。

『そして、自分を忘れて、公女と張り合つたりした末、公女と士の結婚式の晩に、湖水へ身を投げて死ぬのよ。昔は、可哀相な、痴かな娘もあつたものねえ！』

涼子は、話を聞いてゐるうちに、灯のいろの所爲ばかりではなく青ざめて來た。唇はわななき、瞳はひたむきに夏子に注がれてゐた。

語り了つた夏子が、彼女の方を一瞥したとき、四ツの瞳は激しく出會つた。

夏子は、明らさまな嘲笑をうかべて、しかし、さもしたしげに言つた。



『おもしろいお話でしょ？』

涼子の、いつも静かな目に、いぶるやうなきらめきがチラつき、下唇は美しく歯に噛まれた。

『話が、お気に觸りでもしたの？』

『氣に觸りなんかしませんけど——』

と、思ひも寄らず落付いた調子で、涼子は答へた。

『でも、あんまり、符合してゐるやうな氣がしたものですから——』

『符合した？ 何に？』

と、言ひながら、夏子は妙に宛てがはづれたやうに感じた。

彼女にすれば、あてこすりを言つたら、一も二もなく悄氣込んでしまふ涼子だと、最初から高をくくつてゐたのだ。

だが、激烈な情熱の炎に點火された處女の魂は、凜太郎が豫想したとほり、狂ふ火花、狂ふ雌豹であつた。それは、自分に害をあたへるあらゆるものに、鬨をいどみ、反噬せずにはゐないのだ。

『何に符合したとおつしやるの？』

驚きを感じながら、重ねて、夏子は問ひ返へした。

『私たちに——』

と、涼子はいよいよ青ざめて言つた。

『お話の公女は、あなたですわ。世話になつてゐる女朋友は私——すっかり當て嵌りますわね。』

『でも。』

と、夏子は、辛うじて言つた。

『でも、士が、貴公子がゐないぢやないこと？』

『夏子さん、私、如月さんを愛してゐますのよ。』

と、涼子が、夏子に取つては全く意想外な簡明さを以つて言つた。

『あなたがあの方に、どんな感情を持つていらつしやるかは、今夜——ついさつきはじめて知りましたわ。して見ると、私たちは、どうしても兩立しませんもの——』

夏子は、掛けてゐたベッドから立ち上つて、窓際にもたれて、強い目で涼子を見下した。

『私があの方を愛してゐるとしたら、あなた、どうすると言ふの？』

と、夏子はきびしく言つた。

『私も、その女朋友と同じことで、自分を捨ててしまふことは出来ません——もつとも、湖へは飛び込みますまいけれど——』

『ぢやあ、私に挑戦なさらうといふのね？』



と、夏子が笑つた。

『もつと落ちついたらどう？ 私は、あなたに敵意は持つてゐないことよ——それに、如月さんのお心持を伺へば、何もかも判つてしまふのだもの——』

『あの方は——』

と、涼子は、言ひかけて、言ひ澁みながら、

『私が信じてゐるやうな方ではないかも知れませんが——でも、あの方だつて、人間でいらつしやいますもの。ほんたうの氣持をふみ躪つたり汚したりすることは出来ません。』

『ホ、ホ、ホ！』

と、夏子は辛い笑ひを笑つた。

『あなたは自信家ねえ——』

涼子は答へなかつた。しばし唇を嚙んだ末に言つた。

『私、身分を忘れたかも知れませんが——でも私は、あなたのお側から去れとおつしやればいつでも去りますのよ。』

夏子は、わざと事を軽く見てゐるといふやうに笑つた。

『ホ、ホ、ホ、あんたは今夜ひどく昂奮してゐるのよ——まあ、寝ませうよ——寝てゆつくり眠つて、萬事あしたの解決よ。』

彼女はゴロリと寝臺に横たはつた。

涼子もしづかに横になつた。

彼女は天井をみつめたままで、身じろぎもしなかつた。彼女は涙は流がさなかつた。

## 防 禦 線

その晩、熱海の病院に呻吟する静吉の許には、かなり遅くなつて、すぐ山手の別荘にゐる青年貴族の今川俊二が浴衣がけで見舞ひに来てゐた。

俊二は一昨夜、濱の岩蔭に涼んでゐた夏子からはじめて今度の奇禍を聽いて、驚いて早速見舞ひに來ようとしたのを、昨日一日、東京から訪ねて來た友人に妨げられて、今夜はじめて病床をおとなふことが出來たのだつた。

静吉は、俊二の顔を見ると、これまで、あんなに沈鬱苦痛に充たされてゐた患者とは、思はれぬまで上機嫌になつて、さまざま青年らしい物語に耽るのだつた。

まるで、痛み所のある人とは見えぬ元氣で、ゴルフのこと、競馬のこと、都市對抗野球競技のこと、水上競技のこと、それから時事問題——さうした話題を、彼の方からあとからあとから持ち出して、少しも倦色を見せなかつた。



十二時が廻るころになつて、俊二は椅子を離れようとした。

『まあ、もう少し——』  
と、静吉は引き止めた。

『この病院には、今重症患者がゐるないから、少し位強く聲が洩れても大丈夫ですよ。』  
『しかし、あなたがあとでお疲れになつては——』

『いいえ。』

と、静吉は笑つた。

『當て木をされたり、繻帯を巻かれたりしてゐるから、よんどころなく天井を向いてゐるので、これ位な傷は、ほんたうは寝てゐるにも及ぶのですよ。もう、殆んど苦痛はないのですから——』

と、言つたが、眉をひそめるやうにして、夫人の節子に言ひかけた。

『ホテルへ電話をかけてごらん——夏子たちは、まだ歸らんか訊き給へ——』

『さき程かけたばかりですけど——』  
と、夫人は答へた。

『歸つたら、すぐ電話をするやうに言つてありますから——』  
『一たい、今、何時だと思ふ？』

と、静吉は唇を嚙んで、しかし、來客の前を兼ねてか、すぐに微笑した。

『折角君が来てくれたのに、夏子が居ないでは——あれは、大變ピアノが上達したといつて、君に聽いて貰ひたいとよく言つてゐましたよ——何しろ、我儘にばかり育てて、今では後悔してゐるのです。』

夏子の名が出ると、一種の困惑が、凜々しげな青年の面にうかぶのだった。

今川俊二が特殊な感情で、夏子に對してゐるはしまいかといふことは、静吉と、静吉夫人との間で、長らく問題になつてゐるのだった。

『ピアノは、いづれ伺ひに行くと申し上げて下さい——兎に角、もう失禮ませう。』

青年は立ち上らうと、ふたたびしたが、静吉は押へた。

『今川君、實は、少し眞面目な話を、君として見たいのです——幸節子の外にはだれもゐませんし——』

俊二は、いぶかしげにみつめて、そして紅くなつた。

——夏子の名が出て、その次に眞面目な話といふからには、何か彼女に關する問題のやうに直覺された。

そして、俊二といふ青年に取つては、その問題なら、自分の方から、何度となく持ち出したく



願つてゐた話であつた。同時にそれだけ、妙な恐怖や羞恥の情を、隠くすことが出来ないのだ。  
『真面目な話とおしやるのは？』

と、さう言つて、彼は紙巻を取り上げて火を點けた。

『いいえ、何もあらためて言ふ程のことでもないのですけれど、實は夏子のことですが——』  
と、たうとう静吉は切り出した。

俊二はまぶしげな目つきをして、うなづいて、煙を吐いた。

『あの子も、ああいふお転婆ですが、まあこれまでは大過なく過ぎて來たと信じてゐるのです——そのことは、親しくして下さつてゐる君も首肯してくれるでせうが——しかし、何分、いはゆる妙齡といふ奴です——僕も、自分が老い込んで來たためか、これといふ間違ひもないうちに、あれの身を固めてやりたいと思ふのですがね——』

このあまりに開放的な静吉の言葉は、俊二ばかりか、節子夫人をも驚かしたやうに見えた。

これまでの静吉は、一たいに、自由放任主義で、妹の身のをさまりなぞを、今の中から問題にしさうにも見えなかつた。いかに真面目な話だと言つて、これほど實際的なことを持ち出さうとは、思ひがけなかつたのだ。

しかし、静吉はすこぶる熱心だつた。直接的だつた。

『何もあの娘に、特別にどうかうといふわけではないのですが、かうして、寝てゐていろいろな

ことを考へると、世の中は、好事魔多しなんて、昔の諺がよく思ひ當りもします——實際人生は寸善尺魔で、僕の自動車事故などにしてからが、生活の用心を、訓しへてゐるやうなものだと思ふ——と、いふと、暢氣なプチブルの僕が、何を？——と、君はお思ひかも知れん——しかし、氣がついたら、人間は、良いと思ふ方針をすぐに採用すべしだ——』

彼はちよつと、黙つて、

『夏子のことは別として、しかし、新鮮な果實が、永久にそのままでもあり得ないし、害蟲や、害鳥が、いつ襲つて來るかわからん——善良な青年が、求婚しようとして遠慮してゐるうちに、女性は待ち切れずに馬鹿げた噂を蒔いてしまつたなぞといふことは、フランスあたりでもザラに聴きました。さういふことは、一種の罪惡です——女性といふものが、どれ程多くの誘惑に遭遇するかと考へるとね——』

『しかし。』

と、聽いてばかりゐるのが、一種の苦しさをあたへて來たやうに、俊二は言葉をはさんだ。

『さういふ女性は、すでに尊敬するに足らんものではないでせうか？』

『さうも言へませう。ですが、一がいにさうも言はれんと思ふのです。僕は、處女といふものは、燃え易い花びらのやうなものだと思ひますね——節子、君は女としてどうだね？』  
節子夫人は、このごろになく上機嫌な夫を、うれしげに眺めて言ふのだつた。



『さうですわね——脆きものよ——と、昔から言つてゐますから——』  
『それに、その脆いといふことが、別に罪悪ではないと僕は信じるね。』  
と、静吉は受けた。

『脆いからこそ、柔しくも、美しくも、甘くもある——それゆゑにこそ、男性の慰め手としての、柔しい存在を永久に保つのだ——もし、女性が、理性のみに勝つた、ゴツゴツした、理論澤山のものばかりだつたら、世間の男性は大がいに、高野山へ登つてしまふだらうからね——だが、同時に、勿論、そこに危険がある。』

静吉は眉根を寄せるやうにして、急に呪はしげに唇を曲げた。

『世の中には、その女性の美点を悪用して、彼自身の利益、快樂、野心の犠牲にしようと、漁つて歩いてゐるやうな奴があるに限り、彼等の一群は、實に悪どい執拗さを以つて、どんなに恥かしめられても、憎まれても、用心されても、どこまでもどこまでもと、攻めてゆく。媚びてゆく——甘言で陥れて、次にはさんざ弄ぶ、その果ては枯れた花束を捨てるよりも未練もなく溝に投げすてるのだ——』

『ですが、さういふ奴は、ちゃんとした家庭や、相當な社交界へはひり込むことは、かなり困難でせう。』

と、彼一はなだめるやうに言つた。

『ところが、そこにまた問題が生じて來るのです。』

と、静吉は、いまいまして口調で、

『君は、ちゃんとした家庭とか、相當な社交界とか言ふが、どんなところにも弱點はあるのですよ——どんな砲臺や軍艦にも弱點があるやうに——われわれは、みんな人間なんだ。弱い、罪を犯し易い、同時に悔い易い人間なんだ——今言つたやうな奴は、家庭内や社交界の、平生底深く隠されてゐる祕密といふやうなものを、いつとはなくかぎつけて、それを種に、君たちの弱點はいくらでも握つてゐるぞ——ほじくり出してやらうかといふ風に、無言の威嚇をこころみるのが恒です。當らず觸らずにしてゐてやれば、いつの間にか、彼等は毒のある爪で、手あたり次第に傷をつけて歩く——』

ここまで静吉が言つたとき、節子の顔に、ある暗い、深い影のやうなものがただよつた。

實は、彼女は今良人の話を聽いてゐるうちに、だんだん、彼がかくも呪つてゐる當の男性——一般的らしくは言つてゐるが、たしかにそれと、的にして憎みを注いでゐる人物——それについて、ハッキリした幻影をうかべることが出來て來てゐた。

——この人は、屹度、如月さんのことを言つてゐるのだ——いつもの氣性で、舊友に助けられたとしたら、もつともつと感謝の情をあらはすに違ひないのに、あんなに不愛想にしてゐるのは、何かわけがあるに相違ないと思つてはゐるが——



そこまで思ひつくと、たつた今の言葉も、聴きのがすことは出来なかつた。

君たちの弱點はいくらでも握つてゐるぞ——ほじくり出してやらうかといふ風に、無言の威嚇をこころみるのが恒だ——

と、彼は言つた。

若し、如月凛太郎が、此の家庭の秘密を掴んで、それで良人を怯かしてゐるとしたら、それは一たいどんな秘密だらう？

この疑惑は、鋭い針で、節子の心をうづかせはじめた。

けれども、節子のさうした内心の動搖には、熱中して語つてゐる静吉は氣がつく暇がなかつた。

『彼等はどこにでもウジャウジャゐりますよ。君は、賢明な青年でいらつしやるが、まだ人生を廣くお歩きにならないから、ドギツイ觀察で人間を御覽になるのを好まないでせう。が、どんな庭にも、毛蟲はゐるのです——その毛蟲が、僕は世間の處女たちに、怖ろしい害をあたへないことをのぞむのです。あたへる暇をあたへないことをのぞむのです。夏子は、僕の口から言つては妙だが、かなり人目に立つ子です。得てして、毒蟲の目をひくでせう。——だんだんひくやうになるでせう。その前に、僕はあの子に良い縁を結ばせたい。ファウストの魂を、どんなに、惡魔が狙つても、天使はいつも先き溜りをして、自分の手の中に奪つてしまつたと言ひますが、處

女の魂は、もつと大切なもののやうな氣がします。』

俊二は、紙巻を捨てて、自分の膝の上をみつめてゐた。

彼は彼女にとうに戀してゐた。打ち明け兼ねたのは、夏子があまりに朗かで、自由で、戀といふやうなことを言ひ出したら、笑ひ消されてしまふやうな氣がしたからだ。

しかし、静吉の話を聴いてゐると、ある怖ろしい豫覺を感じて來た——どんなにドス黒い手が、あの白い、明るい胸を汚してしまふかわからない——

『ねえ、今川君、僕は君が夏子と親しくしてくれてゐるのを感じてゐます——で、もう一歩すすめて、もし君にさうした氣があるなら、あの妹を、あらゆる害毒から防禦して貰ひたいのです——こんなことはあまりにぶしつけかも知れない——しかし、僕にすれば大切な一人の妹です。あの娘を、世間の不幸な娘たちの中へ加へたくない氣持を察して下さい。』

『わかりました。』

と、今川青年は眞面目に答へた。もう氣弱く頬を染めはしなかつた。

『實は、僕はとうにあの方のためには、どんな事でもしたいと望んでゐるのです——言ひ出せなかつたのですけれど——』

『有難う。安心しました。』

と、静吉は、一荷卸したやうに呟やいて、ホツとして含笑つたのである。



決

意

だしぬけに攪きほだてられた、激しい情熱の大渦の中に捲かれた、二人の處女が、涼しすぎるやうな湖畔の一夜を、同じ白い部屋で、安らかに熟睡することが出来たかどうかは、誰れにもわからなかつたが、明け易い夏の山上の湖面に、霧を突き破る日光が漲る七時ごろになると、涼子の方は、もう寢室を出て、浴室で冷たい水を浴び、すつかり洋装になつて、緑草が露に濡れてゐる庭園の、見晴しの亭の榻に坐つたのだつた。

彼女は晴れてゆく霧の間から、だんだんにくつきりと姿を現はしてゆく、水を繞る山々や、それからその嶺を越して、紫いろにそば立つ富士をみつめてゐた。彼女は心持青ざめてゐたが、瞳や引き緊つた唇には、これまで見られなかつた一種の決意といふやうなものが、ハツキリと観取されるのだつた。

涼子は、生れて今朝ほど、自分の境涯について考へたことはなかつた。彼女は父母が相次いで歿つてからは此の世では、従兄妹同志の静吉と夏子とだけを頼りにして來たのだつた。幾らかの家産は、死んだ両親が遺してくれてゐたけれども、それを使つて、自分の一生を、どうして生かしてゆくべきかを、考へたことはなかつた。

彼女は、昨日今日まで、若い、美しい、柔しい身と心とを、静吉一家の庇護の下にまかせて來た、さうすることが、自分を一ばん幸福にする道だと信じて來た。ところが、今だしぬけに、さうした生活から分離せねばならぬ必要を感じはじめたのだ。

——私には、もう辛抱が出来ないわ！ 夏子さんから食客同然にあしらはれて、自分の一切の望みをさへ捨てねばならぬ生活——そんな世界に、一日も我慢してはゐられないわ——

戀は、どんなやさしい女性にも、思ひも寄らぬ勇氣をあたへる。昨日までの柔和な羊を、肉食獸のやうにもする。急に沸き立つて來た慾望を捨てる位なら、死んだ方がまだとさへ考へさせて來る——他の力が、それを奪はうとすれば、死力を盡して抵抗せずにはゐられない——理非は問うてゐる暇がないのだ。

——私は昨日まで、何といふ馬鹿らしい娘だつたのでせう！ 私は、もう赤んぼではなかつたのに——ちつとして、黙つて、自分の意志を捨てて生きることが、一ばん平和で暢氣だと信じて來た——そんな生活は、生ではない——死とおんなじだわ！

彼女の胸には、自分と比べて、あまりに我儘一ぱいに暮して來た夏子の日常生活が、まざまざとよみがへつて來た。自分と對立させて考へるとき、憎らしく、呪はしく、厭はしいものばかり、感じられるのだつたが、彼女は、ある誇りを以つて、さうした觀念を振り拂はうとした。

——夏子さんのことなんぞ、とやかう思ふ必要はない——私とあの方とは全然違つた人間なの



だもの——私が、この清水家から去つてさへしまつたら、それで何もかも解決されるのだわ——でも、如月さんはほんたうに、私を愛してゐて下さるのだらうか？

不安は、そこにばかりあつた。彼女は異性から、胸の底に觸れるやうな言葉を聽かされたのは、彼がはじめてで、一種の信頼は、憧憬に變つて來たのだつた——それが、急に、戀愛とまで深入りしてしまつた徑路については、自分でも、ハツキリ説明することが出来ない。

しかし、かりそめに、肩にかけられた彼の手先の感觸や、耳朶に觸れた熱い息や、さうしたものの激しい記憶が、彼なしでは、一日も生きられまいとしか思はれない彼女自身にしてしまつてゐるのだつた。

——私なんか、あの方の、小指の先にも足りないつまらない、つまらない女だわ——あの方がどんな生活をなすつてゐるのかも、それさへ窺ひ知ることも出来ない私だわ。でも、あの方を思ふなど言はれて、思はなくなることはどうしても出来ないのよ——涼子、可哀さうな涼子——お前はどんなにみじめなことになつてしまふか知らないけど、でも、このままあの方を他へ上げてはしまへない——

小徑の細かい砂利を、貸下駄で踏む音がして、何人かが近づいて來たやうであつた。

涼子は、顔いろが變るほどハツとした——近づいたのが、凜太郎であることを直覺したのだ。

「涼子さん——お一人ですな？」

涼子は、會釋をして、轟く胸を押ししづめようとした。

しかし、浴衣で、素足の、涼しさうな凜太郎は、昨夜自分が、どのやうな毒を、二人の處女の胸に注ぎ込んでしまつたかも、忘れてしまつたやうに、切れの長がい目で、山々の方を眺め遣つた。

「静かな朝ですな——あとで、ボートを出して、夏子さんと三人で船遊びをませうね。」

「あの、私、出来るだけ早く、熱海へ歸りたいと思つてゐるのですけれど——」

と、涼子は思ひ切つたやうに、つい崖下の湖を見下ろしながら言つた。

「どうしてそんなにいそぐのです——歸つて叱られてはと怖いのですか？ 清水君には、僕からよくあやまりますよ。」

と、凜太郎は微笑して言つた。

「いいえ、そんなわけではございませんの。」

と、涼子は、水を見つめたままで、

「私、みなさまより一足先きに、東京へ戻らうと存じまして——」

「東京へ？ どうしてまた！」

さすがに、凜太郎もおどろかされたやうに言つた。

涼子は、呟やくやうに、しかし思ひ入つて、目を昂げて、凜太郎をながめた。



『私、もうみなさまと御一緒に、お暮しすることが出来ない氣持になつたものですから——』  
『ふうむ。』

凜太郎の、薄い、聰しげな唇がちよいと引き緊つたが、やがて、腫には、絶えず何か生き生きとした生活の冒險を想つて生きてゐるもの特有な、いたづら氣を帯びたきらめきが現はれた。  
『ふうむ——君は、昨夜あれから夏子さんと喧嘩をしたのですね——さうでせう？ それでそんなことを考へたのでせう？』

『喧嘩なんかいたしませんわ。でも、もう御一緒に生きることだけはしたくないのですの——私  
は、一人で生きてゆきます——出來ても出來なくても——』

彼女の腫は、凜太郎に注がれたまま、急に激しく燃えた——彼女は唇を引き釣らせて、一生懸命な思ひをして、たつたひと言を呟やいただけであつた。

『でも、あなたは、私を訪ねて下さいますわねえ？』  
凜太郎は、一種異様な目つきで、彼女を見た。

その目は、言はば、極めて手易く良に落ちて、昏迷して、手足に力を失つてしまつた犠牲のけものをみつめる獵人のそのやうなものであつた。  
『勿論。』

と、ゆつくり彼は言つた。

『私、何も申し上げずとも解つて下さると思ひますわ。そして、私が、どんなに成つても、その成りゆきに満足してゐるのだといふことも、わかつて下さると思ひますわ——』

『君が東京へ行けば、僕もこんなところに愚圖々々してゐるやあしませんよ——でも——』  
と、彼は一足近づいて、勁烈なきらめきを鍾めた目で、涼子を見つめた。

『しかし、僕は、君が、それほど激しい魂を持つてゐるとは思はなかつた——君の柔しい胸にさういふ魂が眠つてゐるようとは——』

『いいえ、私は馬鹿ですわ。』

彼女は、どういふわけか涙ぐんだ。決心は決心として、若し、この凜太郎に、あれはみんな冗談だと言つてしまはれたらどうしたらいいだらう！

彼女は彼から讚美されて、手足の節節に言ひ難い安堵を感じた——彼の胸にすがりつきたかつた。

『僕は不幸な男でした。』

と、歎息するやうに、彼は言つた。

『僕は、絶えず求めて、何も得られずに生きて來た男です。僕はこんな男で、人から信じられても、證據を見ずには、信じてくれたことを信じることの出來ない不幸な男です。君の決心に、僕は生れ變つたやうな昂奮を感じるのです。』



『私は、明日はもう東京にゐますの。』

彼女は涙の中から、ハッキリと言ひ切つた。

『お従兄さまやお嫂さまは、さぞお驚きになるでせうけど——』

『屹度、僕を恨むことでせう——清水君は僕にある不安をいつも感じてゐるのですから——ああいふ幸福な人間には、僕たちの氣持なんぞ解りはしない。』

凧太郎が、そんな風にいふのを聴けば、涼子は、さも、彼と自分とだけが、清水一家の人々なごとは全然異つた、ある激しい生活者のやうな氣がして、心傲りを覺えざるを得なかつた。

凧太郎は満足げだつた。實驗室の青年醫師が、素直なモルモットの肉體に、實驗の反應を充分に見出したときのやうに、生き生きした瞳で山を見た。

『僕は一刻も早く、東京で君に逢ひたいのです——君とたつた二人で——』

——君とたつた二人で——  
涼子の心身は、その言葉で完全に震蕩せしめられた。彼女は、うつとりとして、青ざめて、兩手で胸を抱くやうにして凧太郎の横顔を眺めた。

『では、僕も、そろそろ熱海へ歸る仕度でもしませう。』

彼は抱きしめるやうな目で、もう一度涼子をみつめて、去つた。

涼子は幸福だつた——大が、幸福といふのであらう——  
妖しい、重苦しい、感情が、五感を混濁たる境に引き入れるのを感じた。

山のいろも水のかがやきも、彼女にはひどく遠いものとなつてしまつた。

氣嵩な夏子も、さすが今日は沈黙しがちであつた。涼子と彼女の目は絶えて出會はなかつた。しかし、凧太郎は、さうした二人の舉措に少しも拘はらずに、むしろ少しも氣がつきさへしないやうに、一人で元氣であつた。朝の食卓でも、充分に、美しい葡萄酒をかたむけ、食後には、娛樂室で、夏子にピアノを弾かせるために、自分で譜本をえらんだりしてゐた。

さうしたことも、涼子には氣にはならなかつた。彼女は凧太郎を信じた——信じようと努力しつづけてゐた。そして夏子の彈奏にも安らかな心で耳を傾けることが出來たのだつた。

正午少し前、三人は自動車を命じて山を下りた。

## 病室の波瀾

熱海のホテルへ着くと、汗になつたからだを風呂で清めてから、凧太郎の部屋に集まつて、冷たい飲ものを採ることになつたが、涼子は何の未練もなく、夏子を彼の側に残したまま、自分の



部屋に閉ぢこもつて、卓に向つて一通の手紙を認めはじめた。そしてそれを書き了ると、もう夕涼になつた温泉町を、静吉がはひつてゐる崖上の病院の方へ出かけた。

——自分は自分で生きよう。人の情けに手頼るところから、一切の屈辱は生れるのだ。

と、決心した彼女も、その屈辱を、夏子からヒシヒシと感じさせられたとは言へ、静吉夫妻に對しては、急に分離したいと思ひ立つたといふことを、さすがに自分の口から言ひ出し兼ねるのだつた。そこで、口で言へないことは紙に書いて、よそながら暇乞を濟したあとで、讀んで貰ひたいと考へたのだ。

病院では、たつた今ホテルから、一行の歸宿を電話で知らされて、静吉夫妻もやツとホツとしたところだつた。

夏子であつたら、静吉は、露骨に詰責のいろを見せたかも知れない。  
涼子にはいくらか他人行儀もあつたから、彼も彼女に激しい目顔は見せなかつた。ただ、夫人

が、  
『ほんたうに、昨夜はどんなに心配したか知れないことよ——湖畔のホテルにゐるといふことは、自動車か歸つたのでわかつたのだけれど——お従兄さんも、それはそれは案じていらしたわ。』

と、顔を見るなり言つただけだつた。

涼子は言ひわけともつかず、

『御心配をかけましたわ。お電話すればよかつたのですけれど、夏子さんが少し氣分が悪いとおつしやいましたし、私も、何だかひどく疲れが出てしまつて——』

彼女は静吉の机邊に近づいた。

『大分よろしくなつて？ お従兄さま？』

静吉はちツとみつめた——何か、彼女の顔から讀み取らうとするやうな目つきで——そして答へた。

『うん、殆んど痛みもないよ、君にもさんざ氣を揉ませたが——』

と、言つて、

『夏子はもうすつかり元氣なのだらうね？』

『ええ。少し頭痛がするとお言ひでしたけれど、今日はお元氣ですわ。』

『で、今ホテルにゐるの？』

『ええ。』

『どうして君と一緒に病院へ來なかつたのだね？ 我儘にも、程があると思ふが——』

彼はその人の名を口には出さなかつたが、夏子が凛太郎と笑ひたはむれてゐる姿を想像して、  
『一人心に憎みを感じざるを得ないものに相違なかつた。』



『私、あの方に何も申さずにこちらへ伺ひましたの——』

と、涼子は言つて、少し間を置いて、

『實は、お従兄さま、私、今夜、東京へまゐらうと思ひますの——お従兄さまももうおよろしいし——』

『東京へ？ 一人で？』

と、静吉がいぶかしげに言つた。

節子夫人も近づいて來た。

『何か買物にでも？』

『ええ、少し用が出來ましたから——』

涼子が、自分用で、自由行動を取らうとするやうなことは、これまで一度もなかつた。

何とはなしに夫妻には、涼子のこの申しでが不審に思はれたらしかつた。

『それは君の自由だけど、僕ももうちき退院出來さうだし、一緒に揃つて歸京りたいがなあ。』

『何か欲しいものがあるなら、電話でさう言つて届けさせたらどう？』

と、節子夫人もかたはらから言ふのであつた。

しかし、涼子はしづかに主張した。

『あなた、何か夏子さんと言ひ争ひでもしたの？』

と、夫人が、女らしく氣をまはして訊ねた。

涼子は黙つてゐた。

静吉は言つた。

『涼子さんの氣性で、夏子と言ひ争ふなどといふ事をするはずはない——あの子の我儘は、百の

百まで知つてゐるのだから——』

と、言つたものの、複雑な表情になつて、

『それもいいだらう——東京へ歸るのもネ——どうも、僕には最近の熱海の空氣は、有毒に思は

れるのだ——』

静吉は真相に近づきかけて、ほんたうに核心に觸れることが出來なかつたのだ——彼は涼子が

熱海を去りたがつてゐるのを、夏子と凜太郎が、何かほしいままな行爲を重ねてゐるので、それ

を見、聽きしたくないためだと信じ込んでしまつたのだ。

涼子は口かず少なくしづかに坐つてゐた。彼女は静吉のために、何か自分出來ることと最後

の奉仕がしたいと思つた。

——この方は、私を自分一人では何もよう仕得ない娘だと信じ切つておいでなのだわ。私が、



この方から言はせたら、大それたことを考へてゐるのをお知りになつたら、どんなにお怒りになるだらう——でも仕方のないことだわ。私にも、自分は大事なのだもの——自分自身で、この若さや、現在や、未來を生きて行かなければどうにも仕様がなないのだもの——  
恰度、薬を飲む時間が来たので、涼子は吸呑に入れた焦茶いろの水薬を、静吉の唇にあてがつてやり、薄く削いだ果實をホークで運んで遣つた。

——私の家族生活といふものも、これが了りなのだわ。  
と、彼女は思つた。

だが、静吉は、果實を食べても、なほ苦が味が口の中に残つてゐるといふ風で、  
『ねえ、涼子さん、この薬は鎮静劑なのだよ——いくらこんなものを飲んだつて、心にわだかま

りがあれば、何の役にも立たないのだ。』  
涼子は、そのわだかまの根が、どこにあるかを考へて見るひまもなかつた。一度振り捨てようとする家庭の空氣の中に、いつまでも浸つてゐると、たとへふたびそれに捲き込まれてしまはぬまでも、いたづらに息苦しさを感ずるばかりだ。

——私を行つてしまはなければ——

『では、私、失禮しますわ。』  
『東京の用がすんだら、なるべく早く早く歸つて来てネ。』

と、節子夫人は言つた。

彼女にしる、涼子が、未來永劫、清水家を去つてしまふ決心だとは知る由もない。

涼子は答へずに、會釋をして部屋を出た。

もうすつかり日が暮れて、町は散歩客でにぎはつてゐるが、何もかもサツパリと古いものから離れ去ることが出来る氣がして、淋しく且つ歡しかつた。

彼女は町のポストに、静吉夫妻に當てた別離の手紙を投函した。

そしてポストを離れたとき、一臺の自動車か、彼女の側を走り抜けた——向うでは氣がつかぬらしかつたが、その中には、白い訪問服を着た夏子のすがたが見えた。

美と青春とを誇るやうに、胸をふくらませて、あてもない微笑をうかべてゐる夏子は、これから兄の病室を訪ねようとするのであらう。

——夏子さん、私、もうお目にかからないことよ！  
と、涼子は心で叫んだ。そしてホテルの方へいそぐのであつた。

病室で、例に依つてさも朗らかさうな夏子を見たときの静吉は、涼子が訪ねたときとはまるで違つた、むきつけな不機嫌な表情をあからさまに見せた。



『湖畔は、それはすばらしいことよ——こんな海岸町なんかとは大した違ひだことよ。湖畔に眞夏はないわ。そりや涼しいのよ。早く癒つて、お兄さまも行つてごらんさいよ!』

そんなことを、例の歌のやうな調子でしゃべりかけるのを、黙つて聴いてゐた末、彼は、いつもの全然異つた、叩きつけるやうな語調で遮切つた。

『夏子、そんなことはどうでもいいのだ。僕は、君に訊くが、昨夜の君の遣り口は、立派な處女のふるまひだと信じてゐるのかね?』

夏子は、別にびつくりした容子もなく、兄を見ずに微笑した。

『お兄さま、何を氣にかけていらつしやるの? 私には、あなたの言葉がわからないわ。』

静吉は、天井を睨めつけてゐるが、自由なからだであれば、夏子を前に引き据ゑて睨んでゐたであらう——

『僕はこれまで君に何ひとつ自由を束縛するやうなことは言はなかつた——君が、はふり投げて置いても不仕だらなことをする程痴かではないと信じてゐたからだ。が、若し、昨夜のふる舞を少しも反省せんといふなら、君は墮落してゐるのだぞ。』

『昨夜、私が何をいけないことをしたでせう——私は、湖畔へ行つたわ——如月さんと涼子さんと三人で——そして、氣分が悪かつたから、あつちで静養して来たまでではないこと——』

『君がどんなに抗辯しても、僕には何でも判つてゐるのだ——僕にも神経といふものはあるからなあ——』

と、静吉は呪はしげに、

『君は何か僕たちに言へないことをしてゐる——しようとしてゐる。それはいけないぞ——君は踏みあやまらうとしてゐる。君がしようとしてゐることは、後で必ず苦痛をもたらすだけのことだ。僕は君よりも人生を知つてゐる——』

『お兄さまは、如月さんに、何か特別の悪感情を持つてゐるのね。』  
と、夏子はすばりと言つた。

『私は、もつとくはしくあの方のことについて、伺つて見たいと思つてゐるのよ——私たちの目には、あの方は魅力のある男性だわ。あの方のどこが、あなたをそんなに焦ら立たせるの? え? お兄さま?』

彼女は、ベッドをのぞき込むやうにして、まっかうから訊くのだった。

静吉は苦笑しげに唇を嚙んだ。

『私には、お兄さまの考へがわからないわ。』

節子夫人は、兄妹の氣持を融和させようとして氣を揉んでゐるらしかつたが、口をはさむことも出來ずに、うつむいて、膝の上で雑誌のページを翻へしてゐた。



「ねえ、お嫂さま、あなたは何か知つていらつしやるの？」  
「夏子、兎に角、君は今大事なからだだ。君は輕はずみなことをしてはならんのだ——僕はそれを要求するよ。」

と、静吉が掠れた聲で言つた。

「君の幸福を、僕たちほど望んでゐるものはない。君のふる舞が、君に幸福をもたらすと信じられれば、何で君を掣肘しようとするだらう——そこを考へて貰ひたいのだ。」

「だから、伺ひたいのよ——如月さんと言ふと、お兄さまはぢきに眉をおひそめになる——いのちの親と言つてもいいあなたの方に——どうしてでせう！」

彼女は、ベッドの枕元を、高踵の靴で、行つたり來たりしながら言つた。

「あの方に強い印象を受けたのは私ばかりではないわ——涼子さんだつて——」

節子夫人は、膝の雑誌から目をはなして、思はず夏子の顔を見た。

静吉も、ハツとしたやうだつた。

「涼子さんが？」

「涼子さんだつて、あの方に魅惑を感じてゐるといふことをハッキリ告白したわ。私は無理はないと思ふのよ——でも如月さんが涼子さんに興味をお持ちになるかどうかは疑問だけれど——」

静吉は、涼子が、單調で東京へ去りたいと言ひ出した、その言葉の、根本に據たはる何物ものかに、いくらか觸れ得た氣がした。しかし、涼子の申しいでについては、何も口にしなかつた。

彼の咽喉から洩れたのは、皺枯れた咳やきだつた。

「毒虫は、どこへ行つても、毒を放たずにはゐないのだ。」

「毒虫！」

と、夏子は聞きとがめた。

「それは、だれのことを言ふの？」

静吉は、唇をぐツと噛みしめて、天井をちツと睨みつづけた。

「毒虫なんて、ずるぶん残酷な言葉だわね——それは如月さんのことを言つていらつしやるの？ 多分、さうでせう？」

夏子は、足を止めてつづけた。

「一たい、どうした理由からそんなことをおつしやるの？ 伺はして頂戴——私たちはあの方を、あなたの舊友で、あなたのいのちの恩人として知つただけなのよ。そして、おつき合ひしてゐる中に、あの方の優雅な性格に引きつけられたのだわ。あの方に興味を感じない女性は、さう澤山はあるまいとさへ思ふのよ——それなのに、あなたは、毒虫よばはりをなさる——私には判らないわ！ 言つて頂戴——」

夏子はひるまず、ぐんぐんと突ツ込んで行つた。



『それを説明なさるのが、あなたの義務だと思ふわ。ねえ、お嫂さま、さうぢやないこと？』  
『夏子さん、まあ、昂奮しないで話させようよ。』  
と、嫂がなだめた。

『いいえ、お兄さまのなさり方は、あんまり我儘だと、私は思ふの——なぜ、あの方が私たちの友人として——いいえ、恋人としてと言つてもいいわ、ふさはしくないのか、それを説明して頂きたいのよ。もともと、お兄さまの縁で、あの方と知り合つた私に對して——』

静吉の顔面は、精神的苦痛と憤怒とに、怖ろしく引き歪んだ。

彼は、凛太郎の人物について、一切をぶちまけねばならぬ場合に遭遇してゐる。が、さうすることは、彼自身の過去の亂行と罪惡とを、同時に表白することなのだ。

そして、それは、更らに同時に、現在、かくも和やかに、美しく形成られてゐる、この清水家の家庭生活に、拭ひ消しがたい暗影を投ずることではなくて何だ！

静吉は唇を噛みしめつづけた。

が、もう一度、夏子が、突ッ込んで來たなら、静吉は、今は思ひ切つて、過去の一切を告白したかも知れない——

ところが、その時、白衣の女があらはれて、例の今川青年の來訪を知らせて來た。

『おお、今川君が！ すぐにお通ししてくれ給へ。』

と、言つたが、今までとは全然ちがつた、稍々不自然ではあつたが、したしげな、明るい口調で、夏子に言ひかけた。

『夏子、今の問題については、あとで説明してもいいし、またおのづと判るときもあらう——今川君が折角見えたといふから、氣持を直し給へ。』

夏子は不満さうではあつたが、しかし、社交的な態度を忘れてはゐなかつた。

『ええ、判つたわ——お兄さま。』

と、彼女は言つた。

今川俊二は、今夜は、淡い空いろの背廣に、紺と赤の細縞のタイを結んで、凛々しいうちに瀟洒な身ごしらへをしてゐた。彼はドアをあけてくれたのが、夏子だと知ると、男らしく日に焼けた頬に、ぼうと明みを差したが、しかし度を失はずに小腰をかめた。

『今晚は、みなさん。遅く上つてすみません。』

『いいえ、相變らず退屈がつてゐるのです。どうぞ、ゆつくりして行つてくれ給へ。』  
と、静吉は言つて、うれしげに微笑した。

今川青年は、夏子をかへりみて、

『蘆の湖へいらしたさうですね？ 富士は美しくかつたでせう。』



『ええ、すばらしかったことよ！ いい月でしたわ。歸るのをわすれて、お兄さまに叱られてゐたところですよ。』

と、夏子は笑つた。

『誰れしも湖畔へ行くと半日が一日、一日が二日になりますね——塔が島の分譲地に、父が土地を買つて、別荘を建ててくれる筈でしたが、例の非常時で、お流れになつてしまつた。』

と、青年は明るく笑つた。

節子が、サイフォンから冷たい飲みものをコップに注いで、客にすすめた。

すると、看護婦が、院長の夜間診察の時間が来たことを知らせて来た。

静吉は、折を待つてゐたやうに言つた。

『診察はすぐすむから、夏子、今川君を庭園へ御案内して、少し涼んで来て頂いてくれ給へ——今川君、どうぞさうなすつて——繙帯をはづすとき、泣き聲でも出して、笑はれたくありませんからね。ハ、ハ、ハ。』

夏子もさう言はれて、

『では、月見がてら、庭へお供いたしましたせう。』

今川青年と、夏子とは病室を出た。

『今川君も、いかに遠慮深いからつて、昨夜の今夜だ。何とか切り出すだらうな？ まだ夏子の方も、まさか手後れになつてはるまい。』

『ええ、まさかかねえ——』

と、夫人もうなづいた。

職員と、看護婦とをしたがへて、老院長が部屋にはひつて来た。

## 純情と媚笑

今夜も、あの濱でのやうに、また湖畔でのやうに、青すみ冴えた月は、いくらかいびつに歪みながらも、白い羅衣を着た美女を照らしてゐた。

今川俊二は、彼女と肩を並べるやうにして、遠い弧燈の光りが、月光ですつかり無駄にされてゐる、芝生の多い庭園を歩いて行つた。病院の自慢の一つであるこの庭は、その果ての崖の下に、渺々と展がる伊豆の海を見はらすことが出来るのであつた。

夏子は、これまでは、この青年を、自分よりも年長の友の一人と考へてゐたのだつた。ところが、不思議なことには、今夜は、まるで弟のやうな、年下の男友達のやうな感じしか持つことが出来なかつた。そのことを、彼女は自分では氣がついてゐなかつたが、言葉や態度には、いつ



か表はれて来るのだつた。

『熱海では、この夏、充分御勉強が出来て？』

と、芝生の間の小徑を歩みながら彼女は訊ねた。

かうした質問は、俊二の豫期以外のものであつた。彼女とはこれまで、音楽やスポーツや、その他、若々しい快樂については随分語り合つて来たが、勉強なぞといふ言葉が、紅い、美しい唇から洩れやうとは――

俊二は、なまけ者ではなかつたが、此の夏、充分にこの避暑地で、勉強出来たと答へるわけにはいかなかつた。

『ええ、多少本も読んだけれど、まあなまけてしまつた方です。』

と、彼は苦笑して、吸ひさしの紙巻を投げ捨てた。

『泳いで、濱で寝ころんでばかりだったのでせう――駄目だわよ――卒業論文を、この夏すつかり、準備するはずぢやあなかつたこと！』

俊二は、帝大の佛文科に籍を置いて、古風な、ロマンチズムの發生について、新卓見を書き上げるのが、學生としての最後の仕事として残されてゐるのであつた。

その論文は、二三枚、書き出しを書きかけたなりで、原稿紙は、空気に曝されて、もうスツカリ茶ツ氣いろに變つてゐるのである。

だが、彼は、今夜、不意に論文の話を持ち出されて、多少閉口すると同時に、夏子が、さうしたことを忘れずに覚えて訊ねてくれたことを、感謝しないわけにはいかなかつた。否、それ以上に、ある成心を以つて、自己満足を感じざるを得なかつた。

――夏子さんは、やつぱし僕に特別な友情を持つてゐてくれるのだ。絶えず案じてゐてくれるのだ。

昨夜の、靜吉の話に思ひくらべて、彼の胸は不思議な鼓動を感じるのであつた。

『秋風が立つまでには、屹度、骨組だけでも構成して御覽に入れますよ。』

『いいえ、私なんか拜見したつてわかりっこなしだわ。でも、私は知つてゐる方が、他人との競争に負けるのは大嫌ひ――私、女のお友達でも、何かすぐれたところのない人とは、親友になる氣もしませんのよ。と、言つて、私自身は、駄目なんですけれど――』

『いいえ、あなたに駄目なところなんぞは、一ツもありはしません。』

と、言下に、俊二は答へた。

『まあ！ あなたもお世辭がうまくなつたことね。』

と、夏子は笑つた。

二人は、崖の上の見晴しの亭に来て、淡青いベンチに腰を下した。

月に黒く輝やく波の上に、初島はまどろんでゐた。空は明るく、水はいくらか暗かつたが、見



渡すかぎりには、清らかなきらめきを漂はして、輝やいたり揺らいだりしてゐた。  
しばし、海を眺めて、俊二は吐息をした。

『どうなすつて？』

と、夏子が訊ねた。

俊二は感動的に言った。

『ひどく幸福になつたのです。』

『まあ、いつもあなたは感傷的ねえ——』

と、夏子は笑つた。

『あなたが、今、特別に幸福だなんてをかしいわ。あなたに不幸な日があらうなんて、誰れが思ふでせう！』

『どうしてでせう？』

と、俊二は呟やいた。

『そりや、あなたにだつて、自分で好んで求める不幸——思想的な不幸とか、感情的な不幸とかはあるかも知れないわ——でも、これは現代では贅澤よ——そんな、贅澤な方面をのぞいて、あなたに不仕合せの影なんぞ、どんな眼鏡で調べたつてありやうがないわ。健康で、秀才で——何れもつ不足のない御境遇で——』

『さうです。僕はまあ恵まれた方でせう——しかし——』

と、俊二は言ひ渡した。

『しかし、やつぱり不幸な時もあるとおつしやるの——あなたにも——』

と、夏子は海の方を見て微笑した。

『私のいはゆる贅澤でない不幸な時があるとおつしやるの？』

『さあ、贅澤であるかないか知れませんが、僕は今、幸福の絶頂に上るか、不幸の深淵に落ち込むか、二ツに一ツの瀬戸際に立つてゐるやうな気がするので。』

彼の聲音は、妙に沈鬱であつた。

夏子は興味を呼び起されたやうに、黒く輝やく目で、俊二の横顔を注視した。

『まあ、何だか知れないけど、切迫つまつたやうなおつしやりやうね！ あなたをそんなに苦しめてゐるのは、何なの？』

突然、彼女は笑つた——

『戀でせう！ 判つたわ！ 戀でせう！ 屹度さうだわ。』

俊二はハツとしたやうに、彼女を見て、すぐに目を外らした。彼女のあまりに明るすぎる表情は、彼にある萎縮を感じさせるに充分であつた。

彼女は、しかし微笑しつづけてゐた。



『判つてゐるわよ！ 屹度、戀ね！ この熱海の海岸は、昔ツから、ロマンチックの濱なのよ。ここでは屹度、戀がはぐくまれるの——妙に甘ツたるい濱ですものねえ——』  
夏子は、凜太郎と、はじめて二人だけであのやうに激しい想ひに浸り合つた、あの月の夜を思ひ出したのであらうか！ だが、彼女は俊二を追求しつづけた。

『一たい、どんなお方——あなたのやうな方に、そんなに戀された令嬢は？』  
俊二は、苦しげな目つきをして、空と水との境をみつめた。

そのあたりには、淡い靄のやうなものがたなびいて、商船の灯らしい青い灯光を、かくしたりほのめかしたりしてゐて、見る目を妙にいら立たしくするのだつた。

彼は、どうにもして、今こそ、自分の想ひを打ちあけてしまはねばならぬと焦つた。今夜を措いては、いつまた、こんないい機會が来るかわからないやうな氣がした。

彼が、何か言ひださうともがいたとき、彼女は追撃して來た。

『あなたのやうな方に、想はれた方は幸福ですわねえ——どんな女性だつて、その幸運を羨まなわけにはいかないわ。私のお友達といふお友達も、みんな蔭では、あなたを口をきはめて讀めてゐるのよ。その癖お目にかかる、しをらしく黙り込んでゐるけれど——あたし、いつも笑つて上げるんだわ。』

と、妙に息づまつた調子で、俊二は呼びかけた。

『僕は、あなたが笑つてしまはれやしないかと思つて、それが怖いのです。』

『あなたの戀の告白を、私は笑つてしまふ！ まあ、どうして——そんな失禮なことをするでせう——私は、いつだつて、あなたの親友のつもりでゐるのですもの——おつしやいな、私にお力になれることでもあればいいと思ふわ。』

彼女は、ベンチから、俊二の紙巻入れを取つて、埃及巻に蓮葉らしく吸ひつけて、煙をフウと吐き出した。煙は青ざめて、月光の中に溶けてゆくのであつた。

『夏子さん、あなたはほんたうに僕を親友と思つて下さる？』

俊二は、自分ながら、何といふ拙い切り出しやうだらうと、口中の唾が乾くやうな思ひで言つた。

『ええ、昔ツから——』

『夏子さん——噓はないで下さい。僕は、その親しさを、もつと密接なものにして頂きたいのです——もつと永久的なものに——もつと——』

彼は、言葉につまつてしまつた。そして、氣弱く、兩手で顔をかくすやうにした。

夏子はたしかに、不意を打たれたのだ——吸ひさしの紙巻を、唇の間で弄ぶのを止めて、目を美しく睜つた。



無言で、彼女は、彼を眺めた。

『俊二さん——何とおつしやつたの？』  
と、彼女は呟やいた。

『——私に、どうしてほしいとおつしやるの？』  
両手で顔を蔽したまま、俊二はうめくやうに——

『僕はこの望みを持つた自分を、痴かだとは思ひません。僕でなくとも、あなたにこれほど親しくして頂けば、かうした望みを起さずにはゐないだらうと思ふのです——どんな人間でも、しかし、僕には言ひ出せなかつたのです——あんまりあなたが美しくいいし、賢い方だから——』  
『私が、美しくくつて、賢いって！』  
と、夏子は呟やいて、ニコリと笑つた。

『いいえ、私このごろ、まるでその反對なのよ——寔れてしまつて、馬鹿ものになつてしまつてゐるのよ——でも、私、あなたが、そんなことを言つて下さるのは案外だわ。』  
彼女は、割合にしづかに言つて、紙巻を崖の下に投げた。

『俊二さん、あなた、今夜はどうかしていらつしやるのねえ——』  
なだめるやうに、彼女はつけ足した。  
『いいえ、僕は、どうもしてゐやしません——けれども、これまで何度も、ただ怖ろしさに黙つ

てゐたのです——僕の柄にもない要求が、これまでの親しさをさへ、あなたから忘れさせてしまふかも知れまいと思つて——蔑視して、突き放されてしまふかと思つて——でも、もう怖へてゐられなくなりました——何となく、あなたは、僕からズツと遠いところへ行つてしまはれるやうな気がして——』

『俊二さん、私、あなたに感謝しますわ。そしておわびしますわ。あなたのお言葉はうれしいけど、今夜、そんなことを伺ふつもりで、いろんなことをお訊ねしたのではなかつたのよ——私、あなたとは、そんな事を今更伺ふには、あまりに親しくして頂きすぎてゐましたから——どこまでも、まあ、言はば同性のお友達のやうなつもりでゐましたから——』  
と、夏子は言つて、

『で、ね、どうか、そのお話、伺はなかつたことにして頂戴ね。』  
俊二は両手を顔からはなした。そして、情熱にいぶる目で彼女を一瞥した。

『では、あなたは——』  
『あなたが、求婚して下さつたのを拒む——』

と、夏子は笑はずに、むしろ淋しさうに、  
『そんなこと、私、一生したくないのよ。私たちは、あんなに仲よくして來たのですもの——だから、忘れて下さいね。』



俊二は、目を足元に落した。

夏子は、わざと明るく笑つた。

『月の光は、やつぱしどなたにも毒なものなのよ——ソラ、モウバツサンの小説にありますわね——貞淑な夫人が、月光の下で操を忘れて、つい他人のひとに唇を許す語が——月はだれの心にも、ある感動をもたらしますわ——いけない感動を——ねえ俊二さん、考へてごらんあそばせ——いつものあなたなら、私につまらぬことなんぞお聴かせには、決してなりはしないわ。あなたほどよく、どんなにつまらない私かを、知つておいでの方はないはずですよ——』  
望みを失つた俊二は、溺れたものが、もう一度最後のあがきをあがかうとするやうに老人のやうに老けた聲で哀願した。

『いいえ、僕は、あなたのすべてを知ればこそ、あなたなしでは生きられぬ氣がするのです。』  
『俊二さん——さうおつしやられると、私辛いのよ——』

と、言つたが、夏子は、急に、殘忍にさへも見える笑ひをうかべた——恐らく、俊二の、急に女々しげなのが腹立たしくなつて來たのもあらう——

『だつて、私、もう駄目なの——もうしばらくしたら、私がどんなに馬鹿なんだかといふことが、あなたにもおわかりになるでせうよ——私、自分をわざと卑めて言つてゐるのではないの——常識的から言つて、あの柔しい兄と、戀愛といふやうなことから、私が喧嘩をしなければならなくなつたら、世間では、私をあきれかへつた馬鹿むすめだと、罵しるにきまつてゐますもの——』

夏子は、たうとう俊二に、彼女自身の境涯を、話して聴かせたのだ。

俊二の心には、昨夜の靜吉の、あの陰鬱な言葉が、パーッとまざまざとよみがへつて來た。

——では、やつぱしこの人は、もう清水さんがあのやうに怖れてゐた淵に、陥入つてしまつてゐるのか！

俊二は、思はず夏子をみつめた。

夏子は目を避けなかつた。

『私はもう駄目なのよ——私の心は囚はれてしまつてゐるのよ——私は馬鹿かも知れないわ——でも仕方ないぢやないこと——』  
と、言つて、ベンチを離れて、

『それに、そんなことは別として、俊二さん、あなたには私なんか、どの點からも値しないことよ——年だつて、あなたはまだそんなにお若いのだもの——私より三つかそこらしか上ではないではないの——學校を御卒業になつて、御洋行でもおすましになつてから、どんな立派な令嬢でもお戀しになる方が賢明よ——』



そして、華やかに、突然笑つた。

『さあ、もう家へはひりませうか——月の光は、あなたにばかり毒ではないのよ。私の胸にだつて毒を注ぎ込みはじめるわ。夜は灯光の下にゐるのが、人間には一ばんいいのかも知れなくつてよ——』

彼女はもう病院の白い建物の方へ、黒い影を芝生に曳かせつつ歩きはじめてゐた。

俊二は、病舎へはひらなかつた。

廊下の入口まで来ると、彼は足を止めた。

『どうぞ、清水さん御夫妻によろしく申し上げて下さい。』

『まあ、どうして？』

と、夏子は朗らかに言つた。

『兄はあなたが大好きなものですもの、このまま別れたら私が叱られますわ——只さへ機嫌がよくないので——さ、どうぞ一緒にいらして——』

『いいえ、僕は失禮させて頂きます——いづれまた、伺ひますから——』

彼は、建物を一まはりして、表門の方へ出るために、もう背後を見せてゐた。

夏子は、ほほゑみつつ二階へ上つて行つた。

此の春だつたら、私、何と返事をしたかわからないわ。でも、もう私はもつと奥深い男性の生活を、のぞいてしまつたもの——兄のやうな人から、悪黨のやうに言はれる人の生活に觸れてしまつたのですもの——ことに依ると、如月さんはほんものの悪黨かも知れないわ——でも、かまはないことよ——あの方が、百人の女をたぶらかす方にしても——さういふ男の心を、私の手で、きゆつと擱んで上げたら、どんなに、楽しいでせう——戀を、私は戦ひと見ても失望はしないわ。

ここまで溺れてしまへば、もう問題はないのであつた。

彼女は、口笛を吹きたいやうな氣持で、兄の病室のドアをあけた。

彼女がたつた一人なので、節子夫人がとがめた。

『おや、今川さんは？』

夏子は笑つた。

『あの方、月の光にすつかり憂鬱になつてしまつたらしいのよ——みなさんによろしくつて、さう言つて、内部へはひらさずにお歸へりになつてしまつたわ。』

節子夫人は、良人の方を不安げに眺めた。

静吉は顔だけを夏子に向けて、鋭い視線を注いだ。

『夏子、君はあの人に何か失禮なことでもしたのかね？ あの人が、僕達に別れを告げずに歸へ



るなんて、そんな作法以外のことをなさる人ではない。しつけのいい青年だ。』  
『いいえ、別に失禮なことなんか何もしなかつたわよ。只、あの方、だしぬけに妙なことをおつしやつたわ。』

と、夏子は開放的だつた。

『妙なことは？』

『求婚なすつたわ。』

静吉は、凝視をつづけたまま、

『求婚は妙なことはない——で、君は何と答へたのだね？』

『お兄さま。』

と、夏子は笑ひを消した。

『あなたは、私が、若し拒絶したと言つたら、お責めにでもなるやうな表情をしていらつしやるわね。それは非文明よ。壓制よ。』

『そんな臆測をする必要はない。只、何と答へたか聴きたいのだ。』

『私、思ひもよらないと答へたのよ——私は、あの方のそんな申しいでを、お受けする資格がないのですもの——』

能ふかぎり自分を押へるやうに静吉が訊ねた。

『私。』

と、夏子はキツバリと言つた。

『私、他の方のことで心が一ぱいなんですもの、今更仕方がないわ——』

『夏子！』

激しく、静吉が言ひかけた。時も時、ドアがコツコツ鳴つて、はひつて来たのは如月凛太郎だつた。彼は悠然と節子夫人にまづ腰を屈めて、

『夏子さんが、清水君に叱られてるやしまいかと思つて、遠乗事件の釋明に、夜陰ながら參上したわけです。ハ、ハ、ハ。』

## 奇怪な脅迫

嘲笑といふには、あまりに快活すぎる如月凛太郎の笑ひに、静吉は、明らさまな憎惡の目で、グツと見て、そして利かぬ軀をベッドの上を起こさうとした。

すると、凛太郎が、白い手を伸べてそれを押へるやうにして、  
『イヤ、そのままでも給へ。手足は兎に角、胸が大事だよ。肋骨のヒビは、早く癒着させてしま



はんといけんのだ。』

凧太郎の突然の出現は、節子夫人をいくらか青ざめさせた。彼女は良人と彼との間に、どのやうな過去が伏在するかに就いては、考へて見るひまもなかつたが、良人の、この青年に對する嫌悪がどんなに激しいものであるかは、今や充分に知り切つてしまつてゐた。

凧太郎は、節子夫人の、幾分青ざめた顔を、軽く一瞥して、微笑みつづけた。

『おくさん、あなたもさぞ御心配なすつたでせうね？ 遠乗に行つたまま、大事なお二人が、お歸へりにならなかつたのだから——しかし、僕としては、中世紀の騎士のやうに、立派に護衛をつとめた積りですよ。その證據には、お二人とも、別に箱根山の雲助に、かどはかされるやうなこともなく、無事にお戻りになつたのですから——ハ、ハ、ハ。』

それから、彼は、この人ばかりは、彼の訪問を、まるで豫期してゐたかのやうに、驚きもせず涼しい風が黒く吹き入つて來る窓の側に、スラリと立つて、祕密を含んだやうな微笑で、花のやうな唇を歪ませてゐる、大柄な夏子の方を眺めた。

『どうでした？ ひどく叱られましたか？ 清水君は、何しろ道德家の遺口がお好きらしいですからね！』

誰れもが答へなかつた。しかし、夏子だけは、その無遠慮な、媚びに充ちた笑ひで、言葉で言ふより、もつとあけすけに答へてゐるのであつた。

——私、叱られたつて平氣よ。もう決心はちやんとついてゐるわ。

二人の目と目が、意味ありげに合つて、淫らな微笑さへ取りかはされたのを見ると、ベッドの上、痛む身を強ひて起さうとして、枕に脇をついたままであるた靜吉の瞳に、ムラムラと赤黒い炎が漲つた。

彼の頭も胸も、全身も、沸えくりかへるやうであつた。

——夏子の奴、よくも愛してゐるものがあるなぞと公言したな！ 貴さまは、ここにゐる、白い前歯を見せた男が、どんな人間だかを——けだものだかを知らないんだ！ このけだものが、どんな奴だかを貴様が知つたら！

『夏子！』

と、彼は唸るやうに叫んだ。

『如月君と話がある——今夜はもうホテルへ歸つてもよい。』

『いいえ。』

と、夏子は紅い唇で答へた。

『如月さんとどんなお話があつても、私がここにゐたつていいでしょ？ ね、如月さん、お構にはならないでしょ？』

凧太郎の方へ、夏子は流し目を送るやうにして付け足した。



静吉は憤怒を押し鎮めるやうに、

『イヤ、君に聴かすべき事ではないのだ——節子、夏子を彼方へ連れて行け！』  
『夏子さん。』

と、節子は、彼女自身、この奇怪な空気が脱れ出したいもののやうに言った。

『さ、お兄さまの言ふ通り、あちらへ行きませう——また、あとで——何かお話があれば——。』  
夏子はほんの少し肩を聳やかしたが、それでも、嫂の言ふままに室外へ出て行つた。

凧太郎は、かうした形勢を、まるで他人事のやうに眺めたまま佇んでゐた。しかし、女たちが

去つてしまふと、薄い、深酷な唇には、ありありと怖ろしい嘲笑がうかんで來た。

『清水君。』

と、彼は一步寢臺の方へ近づいて、冷たく輝やく目で見下した。

『話といふのは何だね？ ひどく重大なことからしいが——。』

『如月君——僕は先だつて、すでに君に頼んである積りだ。僕の一家へは、これ以上手を觸れな  
いでくれるやうにと言つて——それなのに、君は、またしても僕の周囲を臺なしにしようとして  
ゐる——僕にはもう見てゐることが出来ない。』

『なるほど、二三日前、いのちを救けて上げた僕に對して、何と思つたか、君は妙なことを言つ  
たッけ——あの時、僕は、熱に浮かされて、つまらん事を言ふのだと思つて、黙つて聽いてゐた  
が——。』

凧太郎は、平然として、聲を強めず言つて、

『ちやあ、あの失禮な言葉は、本氣から出てゐたのだね？』  
『勿論、本氣だ。』

と、清水静吉は激してゐた。

『僕はこの世で、一ばん神を呪はねばならんことがあるとすれば、君のやうな人間に、引き合は  
せて下すつたことだ！』

『ハ、ハ、ハ——どうも、正氣でそんなことが言へる君とは思はんがねえ——。』

と、凧太郎は冷酷に笑つて、  
『清水君、君が僕にいのちを助けられたのは、今度ばかりではないのだぜ。パリでどんなことが  
あつたか、君は覺えてゐるか？』

静吉の顔はサツと蒼ざめて、額には油汗のやうなものさへにじみ出して來た。それこそ、この  
青年に取つては、たとへ魂を荒砥で磨りへらしても、コスリ剝してしまひたい、醜くい淺間し  
い追憶であつた。

一たい、彼は何の積りで、モンマルトルの、あの汚らはしいレストオランなぞへ、足を踏み込  
んでしまつたのだつたらう！ 詐欺賭博になんか引ツかかつて、見苦しい争ひをした揚句、人も



あらうに、こんな凜太郎のやうな人間の救助を受けねばならなかつたのであらう！  
して、その結果はどうなつたのだ？ いのちこそ救はれたれ、あの純潔な、白い花のやうなピ  
カール嬢を奪はれて、しかも、その白い花は、凜太郎の汚れた手で人生の梢からモギ取られてし  
まつたのだ——彼女は恥辱にまみれて自殺する外はなかつたのだ。  
『ねえ、清水君。』

と、凜太郎の言葉は、ますます冷たく低まつた。

『僕が君の前に出現するときは、いつも危急存亡の場合なのだ。あの時だつて、僕が行き合せね  
ば、君は頭蓋骨を無頼漢どもに叩き割られて、セーヌ河へ屍體を投げ込まれ、死後まで紛々たる  
汚うはしいゴシップを、遠い日本にまで流さなければならなかつたのだぜ。家名も、名譽も、愛  
も、戀も、あつたものぢやあなかつたのだ。今、かうやつて、日本へ歸つて、天晴れ模範の青年  
紳士、虫も殺したことがないやうな顔をして、美しい、柔しい御婦人を、細君として、榮耀榮  
華の日を送つてゐられるのも、誰れのお蔭だ——イヤ、何も僕は、とんだ昔の話を持ち出して、  
君を苦しめる積りは毛頭ないのだが、君の出方が、あんまり辛いから、ついこんなことも言ひ度  
くなるのさ。』

『如月君。』

と、靜吉は喘いでゐた。

『いかにも僕は、妙な廻り合せで、危急の場合に君に出逢つてゐる——しかし、いつもそのあと  
で、苦い苦い毒杯を吞ませられるのだ。こんなことなら、いつそ君の救助をうけるより、そのま  
ま死んでしまつた方が、幸福だと思はれない。君は、僕に取つて、此の上もなく呪はしい宿  
命の鬼にしかすぎないのだ。』

『一たい、君は、何といふ見榮坊で、何といふ弱虫で、何といふ偽善者なのだね？』

と、凜太郎は、むしろ呆れ果てたもののやうに呟やいた。

『それが近代紳士の特徴かも知れないが、そんな心がけだからこそ、しつかり抱いた腕の中から  
さへ、どんな大事な小鳥でも、逃げ出して行つてしまふのだよ。パリのピカールさんの問題だつ  
て、君は何と思つてゐるか知れないが、あの人が、君の生濫い愛に飽き切つてゐたからサ——僕  
には別に罪はないのだ——』

『古いことはどうでもいい。』

と、靜吉は奥齒を噛みしめて言つた。

『僕はあらためて君に、僕の家庭から遠ざかつて貰ひたいと要求するのだ。』

『ふうむ、君といふ人間も、どこまでケチ臭い、どこまで自我的な男かなあ。君はいつの間にか  
封建時代の家長か、それとも野蠻期の酋長のやうなものになつてしまつてゐるのだ。が、そんな  
ことは通用しないよ。世間へ通用せぬばかりか、君の家庭の中でだつて通用しッことはないのだ。』



まあ、試みに、夏子さんなり、涼子さんなり、それともおくさんなりここへお呼びして、君のさういふ考へが、道理か無理かお訊きになつて見てはどうかね？ 君に僕を、君の家庭から追ひ拂ふ——そんな権利があり、力があると思つてゐたら大間違ひだよ。第一、僕は、そんな失禮な要求を受けるほど、不徳なことをしてはゐないんだ。」

「君は、どこへ行つても行く先きさきで、何かしら毒を撒く——物を腐らせる——君は、いつも魂に、パチルスの培養器を抱いてあるいてゐるのだ。」

「ところで君はどうだ？ どこへ行つても、行く先きさきで、いやに君子ぶつて、聖人ぶつて、その癖、處女を引ツかけたり、賭博宿に出入したり——おまけにその口を拭つて良家の令嬢と結婚して、濟してゐるやうな人間ではないか！」

凜太郎は、相變らず聲を高めめせず、しかし、人指ゆびを、嚇すやうに突きつけて言ふのだつた。

「さういふのが、清水静吉といふ男なのだよ。少しは自分のことも思ひ出して見るがいいね。」

「貴さまは！」

静吉は、たうとう、ベッドの上に半身を起して、片手でムズと枕元の柀を掴み、飛び出るやうな目で睨んだ。

「ハ、ハ、どんな怖ろしい顔つきをしたところで怖くはないよ。」

と、近かぢかと、顔を突きつけんばかりにして凜太郎は、急に妙に猫撫で聲になつて、  
「だが、僕は、君と喧嘩するために来たのではない。況んや君をおこらせて、負傷を重くさせるやうなことは心外至極だ。まあ、君も、少し氣を落ちつけて何とか妥協の道を講じようとしてはくれぬか？ 何も昨日今日の淺馴染といふわけでもあるまい。」

激しい憤怒に、静吉は齒さへ噛み鳴らしてゐた。

「妥協！ 僕が君と！」

「妥協といふ言葉が厭なら、撤回してもいい——さつき、君は僕に要求といふ言葉を使つたね？」

話がここまで来れば、僕の方でも、君に逆に一ツの要求といふ奴を持ち出したたい。」

静吉が怒りに蒼ざめれば蒼ざめるほど、相手は落ちついて、両手をうしろにまはして反身になつた。

「君は僕に、君の家庭から去れ——といふ。僕の要求はそのあべこべなのだ。僕は今後自由に君の家庭に出入するが、それに對して君はどのやうな故障も持ち出さない——と、いふ言明を僕は要求する。第二に、僕と君の令妹夏子さんとが、君が想像するより深い交渉を持たうとも、それについて、とやかう口出しをせぬ——と、いふ誓言を要求する。」

「夏子と、想像するより深い交渉？」

静吉は食ひしばつた齒の間から唸つた。